事業報告書

2006 / 5 / 12

作成 **NPO arts NPO Link**

ARTS NPO FORUM

Arts NPO Forum vol.3 in Maebashi

第3回全国アートNPOフォーラム in 前橋

アートがまちにできること…／アートNPOによる都市再生を考える

2005.11.5[sat]-6[sun]

ARTS NPO LINK

特定非営利活動法人 アートNPOリンク

〒604-8222京都市中京区観音堂町466 みやこ3F
TEL / FAX 075-231-8607
E-mail anl@arts-npo.prg

http://arts-npo.org

Arts NPO Forum vol.3 in Maebashi

［第3回全国アートNPOフォーラム in 前橋・議事録　フォーラム１］

日　　時　2005年11月5日（土）　12:50－14:20

タイトル　オープニング・セッション
公共文化政策を考える
－アートNPOが公共文化政策を担うために－

内　　容　代表的な3つのアートNPOの活動を紹介しながら、河合隼雄文化庁長官を交え、これからの公共文化政策のあり方を議論します。
このフォーラムは、文化庁の協力を得て、文化庁「文化芸術懇談会」の一環として開催されるものです。

パネリスト　市村作知雄｜NPO法人アートネットワーク・ジャパン
大谷　燠　｜NPO法人ダンスボックス
河合　隼雄｜文化庁長官
佐東　範一｜NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク
モデレーター　吉本　光宏｜ニッセイ基礎研究所

会　　場　旧前橋オリオン座

アナウンス

ただいまより、第３回全国アートNPOフォーラムin前橋「アートがまちにできること…アートNPOによる都市再生を考える。」を開催いたします。

小見

こんにちは。第３回全国アートNPOフォーラムin前橋に際しまして、少しだけ、ご挨拶をさせて頂きます。私は当フォーラムの前橋実行委員会代表を務めます、小見と申します。二日間、よろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中、遠路遥々の方が沢山おられます。北海道から沖縄から、全国から、本当に頑張っている連中がたくさん集まってきてくれました。

そして、今日は、文化庁長官河合隼雄さま、副知事の高木勉さま、市長の高木政夫さまをはじめ、ご来賓の方にも参加して頂いております。本当に有難うございます。偶然にも、このフォーラムを開催するこの時期に、いろんな新聞で同じ記事がにぎやかに紙面をかざりました。それは何かというと、「前橋で最後の映画館、前橋テアトル西友廃館へ」という記事です。駅前通りに素敵なけやき並木があるんですが、あそこに前橋ブンエイという映画館がありました。それが2000年に閉館しました。実は、この建物の上に劇場が四館入った「前橋オリオン座」というのがあります。まさにシネコンの走りなんですけれども、そこも2003年に閉館しました。そして、最後の「前橋テアトル西友」が、来年の１月29日に閉館してしまうだろうということです。ほんとに寂しい限りだと思います。自分は中心商店街の生まれですから、オリオン座には、幼稚園の頃毎日遊びに来ていました。そういうものがどんどん無くなっていく現実があります。ただ、こんな時代の中で、映画館がまちから無くなっていくということを憂いていても仕方が無いです。憂いているだけでなくて、同時に僕たちは、いまとても寂しい気持ちにかられています。なぜかというと、映画館を囲む環境そのもの、まさにまちなんですけれども、それもだんだん空洞化して、だんだん寂しくなっている現実があります。昔のまちっていうのは、たとえば、映画に行く前に、誰かと待ち合わせする喫茶店があって、記憶としてはあそこのいすは硬かったとか、映画館の中の通路をコロコロっと音をたてて転がるコーラの空き瓶だとか、たとえば、あんまり良い映画だったんで、一人ぼっちになりたくって、一人で歩いて帰った道だったとか。あんなものを含めた形で、まちが文化を包んでいたような気がします。その両方ともが音を立てるように、郊外に向かい、逆にまだまだ経済合理的な場所に居を移していく。そして、まちという文化の集積した場というのが、どんどん消えつつあるというのが寂しくて仕方ありません。お手元にあるパンフレットにも書いてありますが、いま回のアートNPOフォーラムは第三回になります。神戸に始まって、去年が札幌、いま年は前橋ですが、このテーマが、「アートNPOによる都市再生を考える。」ということになっています。これをきっかけに、どうしたら文化によってまちを再生できるのかという熱い議論がここでできればいいと思います。

最後に簡単な挨拶ですが、先ほども案内いたしましたが、色んな遊休施設を再生しています。ここ、前橋オリオン座一階旧フレッセイは、昔はスーパーマーケットでした。あそこにちょうどお惣菜屋さんがありました。私の知り合いがアルバイトしていました。そんな思い出もあります。拠点になっている麻屋デパートは、昭和９年の建物で、デパートでした。それから、「赤看板」だとか、「新星堂」だとか。本当に元気だったものが、どんどん、廃墟に変わっていく、その過程に私たちはいます。どこかで食い止めなければいけない。それを何によって食い止めるのか。やっぱりアートだと僕は信じて止みません。前橋が、これをきっかけに、色んな地方都市のモデルとなるように。アートを基に、文化政策と都市計画が両輪になってグイグイと元気になっていく、そんな様を、これをきっかけに皆様にお見せしたい、そんな企画にしたいと思います。言いかけましたけども、最初

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

からすべていま回ボランティアの手作りです。掃除からお花をかざるまで。ローズマリーのハーブを飾ってありますが、それを飾るまで、この空間は湿気臭くて仕方なかった。あっという間に臭いが消えました。素敵な知恵が生まれました。これは、どこにでも使える知恵だとおもいますので、どしどし使ってください。

さて二日間のフォーラムが始まります。ここが色んな出会いの場になれば、本当に良いなと思います。五年か十年か経って、「あれがきっかけだったよね。あれが転換点になったよね。」と言えるような、そんなものになれば、本当に幸いだと思います。

アナウンス

それでは、オープニングセッション・フォーラム 1「公共文化政策を考える」を始めさせて頂きます。パネリスト、市村作知雄さま、大谷燠さま、河合隼雄さま、佐東範一さま、モデレーター、吉本光宏さまご登壇ください。なお、このフォーラムは文化芸術懇談会の一環として開催させて頂きます。

吉本

みなさまこんにちは。ただいまから、フォーラム 1 をはじめたいと思います。最初にパネリストの皆様をご紹介いたします。皆様から向かって右側から、文化庁長官の河合隼雄さん、NPO 法人 Japan Contemporary Dance Network 代表の佐東範一さん、NPO 法人 Art Net Work Japan 代表の市村作知雄さん、そして、NPO 法人 Dance Box 代表の大谷燠さんです。いま、司会から、簡単に紹介がありましたが、今日、河合長官にご出席いただいておりますのは、このフォーラム 1 が文化庁の「文化芸術懇話会」の一環として開催されているということでございます。この懇談会は、平成 13 年の文化芸術振興基本法をきっかけに始まったもので、平成 14 年に香川県で第一回を開催し、今回、群馬県での開催が 28 回目になるということです。今年は、特に趣向を変えて、色んな地域でやっていらっしゃるということで、九州の国立博物館であったりとか、高校生とのシンポジウムをしたりということをされているそうです。今回は、初めての試みで、このアート NPO フォーラムと協力してやりましょうということになり、文化庁とご相談する中で、実現して、長官にもご出席していただいたということです。皆さんもご承知かとは思いますけれども、長官は、色んな地域を回られて、「文化力」という、文化で日本を元気にしようと、いろいろとご尽力頂いています。今日はお忙しい中、ご出席を賜りました。

さっそく、フォーラムに入りたいのですが、今日のテーマがちょっと硬くて「公共文化政策を考える」というものです。NPO 法人と公共文化政策は、あまり関係無いように見えるかもしれませんが、実はこの公共文化政策は、いま大きな転機にあるのではないかと思います。その転機というのは、3 つぐらいの視点で整理できるのではないかと個人的に思っています。一つ目は文化政策の扱う領域、ドメインの拡大です。これは、たとえば教育の現場、学校にアーティストが行ってワークショップをしたり、アウトリーチしたりというような、教育の現場でアートが力を発揮する。あるいは、福祉の分野でも、アートの力があるんじゃないかと、文化政策という一つの政策領域ではなくて、その境界が曖昧になって、色んな形で広がっていっているということです。長官のおっしゃっている、「文化力」というのは、まさしくその大きな流れの一つになっていくんじゃないかと思います。

それから、二つ目の文化政策の転換のポイントというのは、文化政策の担い手が非常に多様化してきているということだと思います。従来の文化政策の担い手といいますと、文化庁をはじめとした国の機関であったり、あるいは、地方公共団体や地方公共団体の作った財団。それから、90 年ぐらいから盛んになっている民間企業によるメセナ、あるいは民間団体などでしたが、そこに、このフォーラムの担い手でもあります、アート NPO というのが入ってきた。それから、市民自体が文化政策の担い手になってき

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

て、文化政策の推進する役割を発揮しつつあると思います。今回のフォーラムも、大変多くのボランティアの方に支えられているということを伺いましたが、いわゆる市民の立場からも文化政策を担っていくような時代になってきているということです。文化ボランティアについても、長官が日ごろお話をされていることかと思います。ちなみに、データ的なことを紹介しますと、今年の9月30日現在で、全国で認証されたNPO法人が23,608件に達しているそうです。ざっと計算しますと、1998年のNPO法施行以来、毎日10件のNPOが新しく全国に誕生しているという勘定になります。そのうち、17つの定款の目的というのがあるんですけれども、4号目的とされています「学術・文化・芸術またはスポーツの振興」を定款に含めるNPOが32.1%ということですので、毎日出来る10件のNPOの内、約3件は、学術・文化・芸術またはスポーツの振興のために設立されているということで、これらNPOが大きなパワーになりつつあるということがございます。

それから、3つ目の文化政策の転換点と思えるのは、最近、皆様もご覧になったことがあるかもしれませんが、クリエイティブシティとか、クリエイティブインダストリーといわれるような潮流が、世界的な大きなトレンドとして認識されるようになってきているということです。クリエイティブシティというのは、「アートの力でまちそのものを活性化させていこう」というものです。特にヨーロッパなどでは、巨大な産業遺構をアートスペースに改修して、まち全体を活性化しようというたいへん大きなプロジェクトが各地で成功を収めております。クリエイティブインダストリーというのは、アートだけでなく、個人のクリエイティビティ、創造力を源泉とする新しい産業というのが次代を担う産業分野として注目されているということです。アート、文化政策が産業政策に展開したり、あるいは都市政策に広がって行くということで、大きな転換点に来ているかと思います。今回のアートNPOフォーラムの全体のテーマも、「まちにできること」ということで、言ってみればそのアートや文化政策が、都市経営や地域経営の一つのソフトウェア、もっと言えば、OSとして機能するような、そんな時代に我々は差し掛かっているのではないかという気がしています。そんな中で、NPOが、公共的な立場から全国各地でいろいろな試みをしている訳です。

今日はその中で、タイプの異なる代表的なNPOのお三方に集まって頂きました。今日のテーマ、「公共文化政策」との関わりも含めて、三人のNPOの方にまずご発言いただきたいのですが、私の隣大谷さんのNPO法人Dance Boxというのは、大阪の小さな劇場を運営しながら、新しいダンスアーティスト、コレオグラファーの育成、地域と結びつくような活動等、色々やられています。まずは大谷さんから、Dance Boxの活動のなかで、特に公共的な意味合いを持っているようなこと、あるいは、そういったことを推進する上で、日ごろ課題に思ってらっしゃることについてお話頂けないでしょうか。

大谷

こんにちは。NPO法人Dance Boxの大谷と申します。公共文化政策的な意義ということですが、その前に、ダンスボックスができた経緯について簡単にお話させて頂きます。ダンスボックスは1996年、4月に大阪市内にある民間のホールで、アーティストたちの小さな思いから出発しました。当時は、コンテンポラリーダンスに関わっているアーティスト達が踊る現場が非常に少なかった。中規模の公共のホールはありましたが、そこを借りるには、いろいろとリスクがかかってしまう。自分たちが好きな活動をするには、ギャラリーとかライブハウスしかないという状況の中で、「小さくても、劇場の機能を持ったところでできないか。」というアーティストの思いと、当時ある民間のホールのプロデューサーをやっておりました私の思いが一致して、ダンスボックスを始めました。とにかく当時は、毎週月曜日に劇場に来ると、コンテンポラリーダンスの公演がやっているという状況からスタートしました。その後、2002年に

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

Dance Box を NPO 法人化しました。これには、大阪市との関係がありました。大阪の新世界という非常にディープなエリアがあるのですが、隣接している西成は、大阪でもっとも日雇い労働者が多い地域ですし、ホームレスも最も多い地域です。一方で、少し懐かしい匂いのする通天閣を中心に、ある種、大阪を代表するような匂いのあるまちでもあります。そこにフェスティバルゲートという、全国でも紙面を賑わしておりましたので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、97 年にできた都市型遊園地があります。私たちがそこに入ることになったのが、2002 年です。そのときもう既に、50% 以上のテナントが抜けている状況でした。いまはもう 80% が抜けているような現代建築遺産になっている場所なのですが、そういうところで、大阪市から声がかかって、現在 4 つの NPO が「公設置民営」という形で遊休空間をアートで有効利用していこうということになったのです。この「公設置民営」が「指定管理者制度」とどう違うのかというと、公設置民営というのは、大阪市が家賃、共益費、光熱費を負担します。基本的に運営管理経費、たとえば、一年間劇場を運営していくために、何人かの人が要りますし、そういった人たちの人件費は見ない。事業費に関しては、大阪市の事業を、年間二つ受託して、その中で、制作人件費というのは認められるということです。指定管理者制度と違うのは、指定管理者になった場合は、その地方自治体から運営管理に関する人件費というのは出てくるわけですけれども、それが全く無い状況で続けております。ただ、指定管理者制度と、私たちが大阪のフェスティバルゲートでやっている「新世界アーツパーク事業」というのですが、これとの違いは、自由度があるということです。たとえば、公立施設の場合には、「公共性」という言葉のもとに、あまり過激なことをやってはいけないという自己規制が働いてしまったり、市民の声をある意味で反映していかなければならないという枷がかかってくるんですが、僕たちのやっている公設置民営というのは、そういう意味ではまったく任せてもらえる、自由度があるというところがメリットです。デメリットは先ほど申しましたように、運営経費が出てこないので、自分たちで色んな事業をしながら獲得していくしかないというそういう形態でやっております。いま、フェスティバルゲートが閉鎖するという問題が起こっていて、現在のところ 2 年後の 7 月までは閉鎖しないということが決まりましたので、その時点までは、私たちも現在の活動を続けていこうと思っています。このような状況の中で、連続したシンポジウムを開いています。それは、先ほど吉本さんのお話にもありましたように、「創造都市」、クリエイティブシティという概念で都心にある遊休施設をアートで活性化していくことが都市再生に繋がるという視点でやっております。これに関しては、「新世界アーツパーク未来計画」という項目で検索していただくといままでの報告書が上っておりますので、お時間ある方はご覧下さい。それから、Dance Box の活動において、公共文化政策的な意義がどこにあるのかということですが、一つは、公設置民営という形でホール運営を任されているということが一つ。そして、二つ目、国内外で活動できるアーティストを育成しているということです。これは、コンテンポラリーダンスの国際化ということを大阪という地方都市から立ち上げていくということです。ただの劇場ではなくて、インキュベーターとして機能する劇場をつくっているということです。三つ目は、観客の育成。これは、一定の知識層、あるいはエリートと言われる人だけではなくて、いかにして一般の市民に広くコンテンポラリーダンスを中心としたアートを享受してもらえる環境を作るのか。そのために、いくつかのプログラムをつくっています。四つ目、これは多様な価値観が共生する社会形成に寄与することです。ダンスというのは、生身の身体表現です。もちろん演劇もそうなのですが、それを鑑賞すること、あるいはワークショップなど身体を通じて自己表現することで、感性を育んだり、他者とのコミュニケーション力を育てていくことができると思います。特に、現在少子高年齢化が進む中で、

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

年齢を超えたコミュニケーションができる社会を創っていくこと。それから、たとえばニュータウンというものが出来てきたときに、新しい住民と、古くから住んでらっしゃる方とのコミュニケーションがなかなかうまくいかない地域があります。そういった場所で新住民と旧住民のコミュニケーションを作っていく力。それから、障害者と健常者とのコミュニケーションのとり方。あるいは、私たちの住んでいる地域は、野外生活者がたくさんいるまちですし、実際、先日やった舞台でその野外生活者の人が舞台に上るというようなことも含めて、その地域との関係を作っています。もう一つ、五つ目、これは、地域のアイデンティティを醸成していくということです。これもワークショップやまちづくり事業、あるいはアーティスト・イン・レジデンスという形を通じて、劇場がまちの魅力を作り出していくということが大事だと思っています。また、アーティストにとっても、自分の第二の家だと思えるような劇場を目指しています。その結果、住みやすく、働きやすい魅力のあるまちになっていけば良いかなと。これは模索しながらやっていますので、必ずうまく行くかは分かりませんが、そういう方向性をもってやっております。と同時に、アーティストが、地域の事業に参加できないだろうか。たとえば、もともと、その地域に盆踊りがあったが、いま無くなってしまった。じゃあ、新しい盆踊りをコンテンポラリーダンスのコリオグラファーが地域の人に振付けていく。そういう元来その地域にあって、いま無くなってしまったフェスティバルをアーティストの力を使って復活させていく。そういうことも地域のアイデンティティの醸成に繋がるのではないかと思います。以上、現段階で Dance Box が公共文化政策的な意義として実施している活動です。

吉本

ありがとうございました。Dance Box はフェスティバルゲートで小さな theater dB という劇場を運営されていて、コンテンポラリーダンスに特化した劇場運営をやられています。いまの大谷さんのお話を伺うと、劇場の中での公演はもちろんやっておられる訳ですが、もっと地域に対してダンス、あるいはダンスを中心にした劇場運営に何ができるかということをすごく真剣に取り組まれているという印象を受けました。

では、続いて市村さんにお話を伺いたいと思います。いまも大谷さんの話にあった、「指定管理者制度」ですが、市村さんの NPO は、先日、横浜市の大倉山記念館の指定管理者制度の公募が行われまして、公募を勝ち抜いて、ついにアート NPO が指定管理者制度を取った、初めてのケースだと思います。それ以外にも、アートネットワーク・ジャパンという、おそらく日本のアート NPO では最も規模が大きい、何を持って規模が大きいといえば良いかは分からないのですが、本当にいろいろな活動をやっておられます。市村さんから、そのあたりのことも含めてお話い頂ければと思います。では、市村さんよろしくお願いいたします。

市村

アートネットワーク・ジャパンというのは、主に三つの事業をやっています。一つは、来年の二月、三月に開催する東京国際芸術際というフェスティバルを開催しています。それから、もう一つは東京都豊島区の協力のもと、閉校になった朝日中学校を使いまして、「にしすがも創造舎」という稽古場プラス公演のできる施設の運営をしています。これは同時に、もう一つの NPO、NPO 法人芸術家と子供たちと一緒になって運営をしています。三つ目は、指定管理者という新規の事業として取り上げて、いまのところはこの三つをやっているのですが、もう少ししたら、四つ目を作ろうかなと思っています。

東京国際芸術際というのは、世界から演劇やダンスの主要な劇団なり舞踊団を招聘したり、そこと共同制作で新しい作品を作ったりということをしています。あるいはリージョナルシアターシリーズという形で、地域にある劇団を東京に紹介していくという

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

プログラムが主要なものです。その中で、気がついたことがいくつかあります。それは、世界のアートと日本のアートのレベル差、というとちょっと語弊があるのですが、だいぶ差があるということは明白に気がついてしまうということです。それについて、一体なんで、こんなに差がついたのかということを我々なりに一つ一つ潰していく作業をしています。いままでは、稽古場がないとか、育成、教育機関が無いとか、あるいは資金が足りないとかそういう周辺のインフラについて、かなりの部分で語られてきたのですが、むしろ私たちは、作品の作り方が違うという最も根本的なところに触れたいと思います。それは、世界から、特にドイツからなのですけれども、劇団等を招いたときに、その作り方を聞いたときに、「日本と実は違っているんだ。」と思いました。我々の意識でいうと、向こうが違っていると思うんだけど、本来的には我々が違っているということなんです。特にいろんな世界の人と話すときに、世界が違うのではなく、むしろ我々が違うというふうに考えた方が良いということ、これも一つ気がついたことです。その中で、当然作品の作り方が違うということを話すと 10 分では足りなので、この辺で終わりますが、そういうところで、作品を作るときに何が必要なのか。そういうことを色々考えたんですが、今回の文化政策という絡みでいうと、アーティストが、何を目標にして自分たちの活動をしていけば良いのか。そこがかなり不明だということです。たとえばヨーロッパでは、はじめはもちろん個人の力でつくりはじめますが、いつか劇場付きのアーティストになれるとか、一つの目標が定められていると思います。しかし、日本のアーティストは、どうやっても食えそうに無い。どこまで行っても食える絵図が描けない。逆に言うと、いつまでも淘汰されないということでもあるんですが、いつまでも自分の好きでやっていけます。たとえば、ある段階を経て、一つずつ発展していくための道筋があって、それを登れないとダメだということが無い。日本のアーティストはいつまでたっても平気でやっていられるという、これは恵まれているのか、そうじゃないのかは分かりませんが、そういう国なんですね。それは非常に良くないなと思っています。これは何とかしなくてはと思うんですが、ヨーロッパの解決方法というのは、劇場にかなりの資金投下をして、劇場がアーティストを雇っていくという形態を作っています。日本はどちらかというと、アーティストにお金を出して、アーティストが劇場を雇用する、借りて劇場を養っている。全く逆の形態、全く逆のベクトルが成立しているんです。ところが、残念なのですが、日本の公務員を減らしたりする中で、劇場にアーティストを雇用するということを、あまり主張する気になれません。「劇団を公共ホールが雇いなさいよ。」と言っても、あまりのリアリティの無さに、言う気がしないんですね。我々としては、にしすがも創造舎の中で、稽古場をかなり安い値段で、1 教室、1 月借りて、光熱費全て込みで六万円という値段で貸して、一度借りたら、稽古の始めから終わりまで完全に自由にお使いくださいというスタイルで優遇すれば、多少は良い作品が出来上がってくるかと思ったんですが、そんな甘いことは全くありませんでした。これは変えなくてはいけないということで、レジデントアーティストという制度を作ろうと思ったんです。これは、公募ではなく、名前を言いますと演出家で言うと、阿部初美さん、倉迫康史さん、ダンスでいうと井出さんと、おそらくタカヤマアキラさんという演出家、それから、宮城聰さんもその形になっています。本来的には雇用したい。おそらく JCDN もそういうことだと思うのですが、もう劇場に雇用するなんていうことは無理だから、日本独自のシステムを作りたいと。それは、アーティストと劇場の中間にアート NPO を作って、アート NPO がアーティストをある程度雇用するようなシステムをつくり出すと、おそらく日本独自のシステムが出来上がっていくのではないか。それによってアーティストが、たとえば JCDN に雇われるために頑張ろう、我々の場合ではレジデントアーティストにも努力すればなれますよというシステムをつくれるならば、アート NPO はそ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

うとう素晴らしいことができるんじゃないかと思います。その一環として、指定管理者制度にエントリーしたんです。指定管理者を NPO が経営すると、多少そういう真似事ができる可能性があるなと思ったのです。

吉本

市村さんのところは、三つの事業やっているということですが、一番大きいのは東京国際芸術際というフェスティバルだと思います。芸術フェスティバルというと、やっぱり海外から有名なカンパニーを呼んできて、作品を見せて、国内の作品も見せて…という、ある種お祭り的な要素として捉えられると思います。実際、市村さんのところでやっているフェスティバルも一見そうなのですが、実はその奥底に、フェスティバルを通じて、日本のアーティストの作品創造の環境を作っていこうという、公共文化政策的なことを見据えているということだったかと思います。

次は、佐東さんにお話を頂きたいんですが、佐東さんの JCDN は、コンテンポラリーダンスをとにかく活発にしようということでやられていて、おそらく最近の日本のアートで一番元気のある分野の一つがコンテンポラリーダンスかと思います。JCDN ができる前と後では、相当いまの状況は違ったのではないかと、それぐらい大きなインパクトを持った活動をなさっているんじゃないかと個人的には思います。では佐東さんお願いします。

佐東

京都から来ました JCDN の佐東です。実はすごく自慢するんですが、この前橋でアート NPO フォーラムをやらないかと言ったのは僕なんです。なぜ言ったのかといえば、あそこの商店街がすごく寂れてたんですよね。今日は、「あちゃー」と思ったのですが、全国のちんどん屋大会があるということで、すごく活気があるところに見えてしまい、これはまずいと思ったんです。せっかく寂れた前橋を見せようと思ったのに、すごく盛り上がっているまちに見えてしまったらどうしようと思っていたら、案の定、すごく盛り上がったまちに見えてしまって…。あそこの商店街には、僕は、五年ぐらい通っているんですけれども、夜の五時を過ぎたらほとんど人と出会わないんですよ。前橋の悪口みたいですが、現実のことなのですみません。夕方の五時過ぎると人と出会わないないし、商店街はほとんどシャッターだらけで、開いている店も三分の一から五分の一ぐらいなんですよね。そこに、アートがじわじわっと来る感じを、実は今回のアート NPO フォーラムで見せたいなって心ひそかに思ったんですけど。なんだ、ちんどん屋があるいているは、全国から人は集まってるは、カメラマンはいっぱいいるはって言うので…。多分夕方になったら人は少し減りますよね。そしたら、少しイメージできると思います。

今日お話したいのは、なぜ文化芸術が日本の中で必要なのかということを、ある共通認識をお話できればと思っています。いままでの日本では、文化芸術というのは、心を豊かにするもの、人間を豊かにするために必要なんだと言われてきたと思います。だけど、僕が思うのは、人間が生きるためになくてはならないものなのではないかということです。心を豊かにするとか、人間を豊かにするとかそういう甘っちょろいことを言っているから、日本の文化っていうのはどんどん低迷していくと思っています。生きていくには絶対なくてはならないもので、それがなかったから、今日本の問題、たとえば子供たちの問題であったり、あと世の中がおかしくなっているのは、日本があまりにも文化芸術をおろそかにしてきたから、いまの状況になっているんじゃないかなと僕は思っています。日本みたいに、毎日新聞を開けたらいろんなタイプの殺人が起きてる国っていうのは、世界を探しても戦争をしている国以外は無いのじゃないかなと思うぐらい、いろんなことが起きていますよね。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

河合
それはちょっと違います。

佐東
違いますか？

河合
他の世界では、殺人事件を載せていたら、紙面に載せきれないので書かないところもたくさんあります。

佐東
日本はみんな載せてるから…

河合
まだましな方です。

佐東
そしたら、その国はやっぱり文化と芸術が足りないのだと思いますね。なぜそういうことが起きるかっていうと、多分人のことを想像することが出来ないって言うことが一つあると思います。人を叩いたら痛いと考えるのは、一つの”想像”力ですよね。例えば、クリエイティビティの”創造”力が、まちや物事を作っていくのだと思うんです。ただ、戦後、日本という国を発展させるために、クリエイティビティとイマジネーションがあることによって、日本が発展しないんじゃないかと、偉い人たちが思ったんだと思うんです。それで、文化芸術っていうのは後ろのほうに置かれてしまったと。そうするうちに、人間の最も不可欠なものを育てる力を日本の中で培ってこなかったから、やっぱり人を想像することが出来ないし、新しいものを創造することができないという結果に陥ってきていると思うんです。僕が、いまのJCDNを作ろうと思った一番のきっかけというのが、ニューヨークにいたときに、1996年に榊原事件があって、たまたまその事件をインターネットでずっと見ていて、日本というのはすごい国になったなと思ったんです。つまり、ここまで日本は来たかというふうに本当に思ったんですね。それが、たまたまニューヨークにいて、インターネットという方法で見ていたから、余計にリアルに感じました。これは何でなんだろうと思ったときに、やっぱり、いままで「芸術が心を豊かにする」と言っていたけれども、もしかしたら、そこがあまりにも欠落してきた結果としてこういうことが起きてしまったのだろうと、本当に切実に思ったんですね。僕自身、前に舞踏をやっていて、その頃芸術をやっている人は世の中の外れ者でした。1979年ぐらいに僕が舞踏を始めたとき、大学で京都に行っていて、一年経って帰ってきたら、息子が眉毛剃って頭剃って実家に帰ってきたんですよね。そしたら、やっぱり親から勘当されるわけですよね。「何をやるんだ。」と聞かれて「舞踏ってのをやろうと思う。」と言うと、「もう家の子じゃないから、帰ってこなくて良い。」と言われて、それから二十年間くらい親戚づきあいをしていなかったんですよ。それぐらい、親戚の中では「どっかに行っちゃった子」として扱われたんですね。日本の場合面白いのは、芸術をやっている人たちっていうのは、世の中の外れ者か先生なんですよ。ちょっと偉くなると、「先生ですか。」って言われて、真ん中がいないんですよ。それは、日本の文化をすごく象徴していると思っています。日常生活の中で、ダンスをやっているというのは、趣味でやっている人は少し違うと思いますが、それをプロでやってる人は、やはり世の中から外れて、「可愛そうですね。」って言われるか、先生になった「あー、偉くなったんですね。あなたの子どもは。」と言われるかのどっちかで、あまりにも社会の中に居場所が無いということが、一つの問題だと思います。アートNPOをはじめ、文化に関わる人が余分なものではなくて、危機的な日本の社会状況を救えるのは文化と芸術だと僕は思っているんですよ。いまそこの立て直しをしない限り、いまの変な日本の社会がどんどん進んで行くんじゃないかと思います。そこが、アートNPOにしても、JCDNをやっている根底にあります。多分そういう危機感を持たないと、「心を豊かにしまっせ。」と悠

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

長なことを言っている間に「世の中変になってきましたね。」ということになるんじゃないかなと思います。もう一つ、いま「踊りに行くぜ!」という事業をやっています。これは、最初は全国四ヶ所で始めたプロジェクトです。いまは全国18箇所で開催しているプロジェクトですが、必ず地元のアーティスト、地元の振付家が出演するというのを必要条件にしています。それはなぜかというと、いままでは東京が全てだったんです。日本の芸術文化の全てが東京だと思っていたんですね。全てが東京に集約されて、東京から出たり入ったりすると。アーティストが地方にいても「芸術やるんだったら東京に行かないとね。」というふうになっていたんだけれども、そこを何とかひっくり返せないかなと思ったんですね。さっき、河合長官とも、東京でアーティストをやってる人は、ほとんど地方から来た人ばっかりという話をしていました。そういう意味で、いまの日本の中で、東京じゃなくて自分の地元で、アーティストとして活動できる場所をつくれないのかということ。そして、各地方で文化芸術を育てようとしたときに、アーティストがいないと始まらないんだということに、ようやく全国的に少しずつ気づき始めてきたということがあって、「踊りに行くぜ!」も毎年、開催地が増えているんです。いまインターネットによって情報がスムーズに流れることによって、別にどこでやっていたとしても、世界に通じる道が作れるんですよね。逆に、例えば稽古場とかいろんなことを考えると、地方、自分の生まれたところで、アート活動をできるような環境ができてきたとしたら、必ずその地で文化と芸術が育っていくと思います。いままでは、地方で文化芸術をやろうと思うと、必ず東京とか海外から呼んで、「素晴らしいものでしょう。」と鑑賞させるのが、各地方の文化芸術振興だった思うんですが、もうそれは終わったと思います。やっぱり、自分のところで、各地でアーティストを育てるというのが大事だと思います。もし居ないんだったら、先ほど市村さんが言われたように、レジデントで外から呼んでくるというのもいいと思うけれども、やはり、その担い手というのは、何か作品を作るアーティストだと思うんですよね。そのことを各地で作れる仕組みを作れないかなと思っています。

あと、もう一つ、問題と思っているのが、日本の文化の担い手というか、仕掛け側というのは、公共ホールとか自治体とかだと思うんですけれども、担当者が三年で変わっていくということだと思います。それは、システム上しかたないことだと思うのですが、三年かけて文化事業をやって、変わってまた新しい人が来た。そうすると、文化というのはそんな一年や二年、十年、二十年で形づくれるものじゃないのに、もう少し長いスパンで考えなければいけないのに、三年スパン、もしくは一年スパンで考えてしまう。そういう宿命を、いまの文化を支える人は考えなければいけない。でも、日本のシステムがそうであるのならば、それをサポートできるのはアートNPOだと思うんです。専門的なアートNPOがそこと共同して一緒にやることによって、お互いを補うことが出来るのではないか。で、そのためには、アートNPOがもっともっと増えていって、もっと育って、そういう形になってきたら、多分日本の文化芸術っていうのは、かなり画期的に変わるだろう思っています。

吉本

ありがとうございました。佐東さんのお話を聞いて私も思い出したことがあります。最近ではあまり言われなくなりましたが、90年代ですかね。日本は経済的には豊かになったから次は文化だという。あるいは、モノの豊かさから次はココロの豊かさの時代だといわれたんですが、そのロジック自体が文化的な貧困を象徴しているなと思っていました。

ここまで、日本の最もアクティブなNPOの中から、三人の方の話を伺ってきましたが、長官、三人のお話を伺われて、コメントを頂きたいのですが。

河合

私は、小渕内閣の時に「21世紀日本の構想懇談会」の座長をしていました。そのときに、日本の21世

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

紀の教育、経済、もちろん文化といろいろな部会を作って話し合いをしたんですが、その共通認識として、私が言ったことに皆も「そうだ。」と言ったんです。それが、「個の確立」。個人が確立するという事と、「新しい公」を創り出すということでした。その話をしていて、僕らの仲間で、これはNPOとボランティアだと言っていたんです。それがいま動き出しているので、僕はすごく嬉しいんですよ。もう少し言いますと、日本人というと、どうしても個が確立していない人が多い。私もそうですけれども、何か意見を言われると、自分の意見を言う前に「ああそうですか。」と言ってしまうし、「河合さんいかがですか?」と聞かれても「皆さんどうですか?」と言ってしまって、なかなか個を打ち出すことができない。ところがいざ日本人が個を打ち出そうとすると、今度は利己主義になるんです。個を打ち出すのと利己主義との区別がつかない。これは、日本人の非常に悪いところ。個を確立してバラバラに切れてしまわずに繋がるためには、公ということを考えるのが普通ですが、そのときにわざわざ「新しい公」を創り出すといって、「新しい」と付けたんですね。なぜかというと、いままでの公というと、どうしても「お上」というのがあって、上からの命令が来て、それを聞くのが公だと皆が思っている。これをやめようと。下から突き上げたものが、公になっていく。個が集って公を作るという新しい公を創り出さねばならないというふうに考えて、「個の確立」と「新しい公」を創り出していくということを言いました。皆さんがやっていらっしゃるのがまさにそうで、個人で「おもしろいじゃないか。やろうか。」とか、「踊ろうじゃないか。」とか、おもしろいことを仲間同士でやろうとかいうのを、それだけで終わるんじゃなくて、これを公のものにしていきたいということです。そうでないと、これは育たないんですよ。いままで、どうしても日本ではその辺が分かれていて、我々だって若いときはずっとそう思っていましたけれども、なんか自分が一個の人間としてやろうとすると、公と対立する、公をやっつけてやろうという気になって、必ず負けるんですね。公が絶対強いですから。だから、そんな負ける喧嘩をするんじゃなくて、公を変えて行くんだ。「新しい公」を作るんだ。それが個人のパワーなんだという考え方でやって欲しいということを当時僕らも言っていました。そういうときに、僕らの仲間では、日本にはもっとNPOとボランティアが出てこないとダメだと言っていたんですね。そういう思いもあって、私は文化庁長官になったときに、文化ボランティアということをものすごく強調したんです。で、それが日本中にいま、すごい勢いで起こってきつつある。そして、実際ここにいらっしゃる多くの方々がそうですが、NPOの皆さんも起こってきて、それがいま、佐東さんも言われたけれど、やっぱり公を動かしていくし、一緒にやってすごい効果がでる。いままでは、どうしてもお互いに変に対立していて、喧嘩ばかりしていたんですが、もう喧嘩している場合じゃないですよね。さっきも言っていたんですが、例えば、ここのまちが寂れていくようなことが日本中に起こっているというのは、これは、グローバリゼーションの悪い方の影響ですね。僕は、グローバリゼーションという言葉とバーバリズムという言葉を一緒にして、「グローバーバリズム」が盛んになるから腹が立つと、怒ってるんですね。グローバーバリズムに抵抗できるのは、各地域の特色であり、個人の特色です。個人が頑張り、地域が頑張っていかないといけない。そして何より、グローバリゼーションが経済と一番結びつきやすいというのは、お金というのが、ものすごく恐ろしいもので、これほど個性を消してしまうものは無いからなんです。ここに居るのは、皆別々の人ですよね。ところが、年収いくらですか?と言って並んだら、並ぶんですよね。まるで年収の高いやつが偉いやつという錯覚を起こしたりする。それほどお金というのは怖い。日本は、経済にばっかりいって、どんどん金持ちになったつもりでいたら、知らない間に、先ほど言われたとおり、キレる人が多く出てきて困っている。これを本当に救えるのは、文化であり、芸術であると私も思っています。そして、それを皆さんが

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

やってくださっているのですが、これからは、やり方をうんと考えて、公、行政といかに組むのか、いかに動かすのか。そして、これも言われたとおり、行政は三年経ったらあちこちに異動することになっているんですが、日本は皆出世しなくてはならなくて、そのようになっているんです。そういう人はそういうシステムでいき、それと、こちらの変わらない者とがどう付き合っていくのかというのを考えれば良い。嘆いてばかりいても仕方が無いので、そういうふうにどう上手に付き合っていくのかを考える。これからはそういう新しいやり方を皆さんが創っていっていただきたいと思います。さっきから、クリエーション、創るという言葉が出ています。僕は思うのですが、「クリエイティブ」といったら何か、いわゆる芸術的なことをしなくてはいかんと思いがちですが、そうではなく、そういう新しいシステムを創るのもクリエイションでしょ。そして、いろんなクリエイションがあるはずなので、それぞれ自分の得意なクリエイションができると思うんです。身体で踊るということだけでクリエイションできるという人もいますが、僕なんかには絶対できない。しかし、システムを変えるとか、人を変えるとかそういったことができるのだから、それをやっていこうと。そういうふうにやって下さったら、私は本当に日本の国はすばらしくなると思っておりますし、私もそのために頑張りたいと思っています。そういう点で、いまの三人の方のお話を聞いてすごく心強い気持ちがしました。もっともっと行政のほうも一緒に協力してやっていきたいと思います。

吉本

ありがとうございました。いまの長官のお話しの中で「新しい公」、最近は「新しい公共」という言い方もされているみたいですが、三人のお話しを伺うと本当にアートというものを媒体にして、新しい公を作ろうとしているんだと思いました。さっき佐東さんが舞踏をやっていたというお話しを聞いて、はたと気が付いたのですが、今日、前に並んでらっしゃる方は、みんな舞踏派なんですよね。オリジンがみんな舞踏だということに気がつきまして…。

河合

「ブトウ」のブは、武士の武じゃ無いですよね？

吉本

戦う武ではなくて…。

佐東

おもしろい。本当に、なんでこんなオジサンばっかりになってしまったんだろうという話をしていたときに、みんな舞踏出身なんですよね。市村さんは山海塾の制作をされていて、僕が白虎舎というグループにいて、大谷さんが…、大谷さんの舞踏を見て僕は舞踏に入ったのですが、80 年代の頭にみんな舞踏に関係していた…
不思議な縁だなと思います。

吉本

話が横道にそれてしまったんですが、舞踏派の人たちのイメージは反社会とか反公共というイメージが非常に強い。その舞踏派の人たちがいま公共と一緒に手を結ぼうとしているのが、まさしく時代の流れを象徴しているなと思って聞いていたんです。

河合

僕が文化庁長官になっているということからして、これはもう流れが変わってきている証拠ですよね。

吉本

そこで、ちょっと現実的な話で、「新しい公」を NPO が行政と一緒につくろうといっても、なかなか一筋縄ではいかないところがあると思います。三人の NPO の皆さんは、それぞれ地元の行政とか文化庁の助成金とかいろんな形でパートナーシップを組みながらやっていると思います。市村さんは、にしすがも創造舎というのをやっておられますよね。あれ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

は、地元の豊島区との共同でやられているということで、それもある意味新しい公共の形ではないかと思うのですが、具体的なそのパートナーシップのあり方のことをちょっと話していただけますか？

市村

豊島区プラスもちろん文化庁の支援もいただいているし、内閣府からかなり大きな力添えをいただいています。さまざまな協力がないとやはりできないんです。誰も一人だけではできない。パートナーシップというのは、お役人の方は三年で変わってしまうとか、昔そういうのはおかしいといろんなことを言った人がいるのですが、僕は「それはそれで認めちまえ」と思います。こちらは変わらないんだから、向こうは向こうで変わっても良いというぐらいの気持ちでいるんです。どんなに変わっても、我々がそれを説得していくし、そこと一生懸命コミュニケーションをとるというスタンスでやっています。条件だけ言いますと、非常に我々には良い条件で平行したものを貸与してくれているんですが、無償貸与している施設を有償で貸して良いという、極めて良い条件なんですね。ただし、光熱費は払いなさいということです。ただ、体育館に空調入れたんで、1500 万かかりましたとか、これからもいろいろなおさないといけないので、何千万もかかってしまうだろうということは、こちらのチャレンジ。壊れるまでやろうかなと思っています。それも、NPO がお金を借りるっていうのは結構大変なんですよね。全てを初めての経験でやっていくんですけれど、そういうことでも、やはり、内閣府とかそういうところの協力を得ないと NPO に何千万も融資して頂けるなんていうことはできないんです。そういうことでいうと、いつもいつも話しているし、本当に毎日のように豊島区のお役人の方は、にしすがもに来られているんですね。我々もしょっちゅう行っている。ですから、ものすごくコミュニケーションの密度が高い。

吉本

あとは、公というとどうしても行政ということになるんですが、最後は、そこに住んでいる人たちというのがすごく重要だと思います。そのあたりはどうですか？

市村

この部分は、我々あんまり得意じゃないんですよね。もう一つ「芸術家と子供たち」という NPO が入っていまして、彼らはそれを専門で、地域の子供たちを我々のところに集めて、ダンスをつくったり、美術をつくったり、そういう活動をやられている。我々の場合は、例えば、地域からは、有名な方がここに稽古に来られているのを見たいとか、そういう要望がやはり多いんです。幸いにも蜷川幸雄さんのところの稽古は、ほとんどうちでやられているので、いろいろな有名な人が稽古に来ているんですが、一日だけ稽古を公開してくれと蜷川さんに頼んでいます。蜷川さんだけでなく、ほとんどのアーティストに稽古を公開してくれと。それを地域の人に無料で見せるということをやっています。こういう施設って地域で反対が上ったらその時点でクローズなんですね。だから、秋になると落ち葉が落ちますので、掃除をしたり、本当に細かいケアをしています。

吉本

ありがとうございます。地域との関係といえば、大谷さんのところも、非常にディープな新世界にあるということですが、新世界だけでなく、もっと離れたところでも地域と結びついたことをされていると思います。少しご紹介頂けませんか。

大谷

地域、あるいはコミュニティという言葉を使ったときに、Dance Box としては三つのコミュニティを考えています。一つは、点としての地域。これは、先ほど申しました、Art Theater dB という劇場がある新世界地域ですね。もう一つは、面としての地域です。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

これは、大阪市、あるいは、大阪府、あるいは近畿ぐらいのエリアです。もう一つは、コミュニティという意味の中に、コンテンポラリーダンスというコミュニティがあり、これは、世界と繋がっています。そういうコミュニティと関わっていくときに、いろんな事をやっています。簡単にご紹介しますと、まず点としての地域として新世界と関わっているのは、毎年「コンテンポラリーダンス in 新世界」というイベントをやっています。これは、劇場ではなくて、まちなかにあるいくつかのスペースを使って、ダンスを見てもらう。地元の人は、コンテンポラリーダンスという言葉すら「なんですか?」ということになりますので、こんなことをしていますよ、ということを見てもらう。もう一つは、新世界という地域以外の人が、新世界というまちの魅力をそこで知ってもらうということです。新世界というまちは、どこかに怖いというイメージがあります。若い女の人が一人では来にくいというイメージがあります。ところが、実際に行ってみると、たくさんおもしろい地域の資源があるんですよね。例えば、いまだにスマートボールが残っているとか。いまでは、お祭りでしかできなくなったようなスマートボールがあって、それを百円で一日遊べて、酢昆布に変えてもらえるというような、なかなか他には無いような、地域の魅力があります。あるいは、大衆演劇がいまでもやっています。というように地域を見てもらうということです。それをダンスボックスが 2002 年に行ってから、毎年続けて、その中で地域の人との協力関係というのも、当初よりは段々と深まってきました。もう一つは、アーティスト・イン・レジデンス。今年実施した事業です。これは、オランダ人アーティスト、ビー・ワンダーが 7 月から約 1 ヶ月あまり、新世界のダンスボックスに滞在して、地域の 70 歳以上のお婆さん、お爺さんと作品を作っていくということをやったんです。「ガーデン・オブ・エロス」というタイトルだったんですけれども、そのお爺さん、お婆さんの愛の記憶、戦争の記憶、いろんな記憶について語ってもらうということをドキュメンテーションしました。九人のお爺ちゃん、お婆ちゃんに対して、1 ヶ月間、映像と音声でずっとドキュメンテーションしていって、最終的にはそれを公演という形にしたんです。普段そのお爺ちゃん、お婆ちゃんたちは話をする相手がいないんですね。たまたま、そのアーティスト・イン・レジデンスをした、オランダの若い 30 過ぎのアーティストが、だいたい一人に付き三回くらい聞き取りに行くんですが、そこで普段は息子にも孫にも喋ることがなくなってしまったストーリーを話す時間ができたんです。非常におもしろかったのが、はじめ行ったときは、「私何にもしゃべれません」と最初は言うんですね。ところが、三分経つと、皆止まらなくなるくらい喋るんです。それだけでも非常にアーティスティックな行為かなと思うんですけれども、そういうことを映像作品にしまして、第二部では実際にビー・ワンダーというアーティストがダンスをして。そして、9 人のうち 5 人のお爺ちゃん、お婆ちゃんが舞台に上ったんです。ずーっとうしろ姿で手紙を書くという行為をしました。死んだ人でもいいし、未来の人でも良いので手紙を書くことをしてくださいと。三十分あまりの作品で、実際に舞台に上ってもらいました。そして、これが、地域のコミュニティと僕らとの関係をすごく進化させたなと思いました。というのは、イベントが終わってから、饅頭屋のお爺ちゃんが饅頭もってちょっと寄ってくれたりとか、野外生活者、ホームレスの方がちょこちょこ覗きにきてくれたり。なかなか忙しいのですが、本当はそういう人たちが溜まれるような場をうちの劇場が持ちたいなというふうに思うぐらい、そういうコミュニケーションがありました。それは、点としての地域とのかかわりです。もう少し広い面としてのかかわりは、「泉北アートプロジェクト」です。このプロジェクトは、大阪の泉北エリアにあり、60 年代後半に開発されたニュータウンを舞台に展開しました。これは、大阪府との関係で、一昨年度、実施した地域調査事業がきっかけでした。大阪府下の遊休空間を調査するという事業を受託しまして、大阪の箕面市から南の岸

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

和田市まで。例えば、港を整備したけれども、誰も使っていない、公園をきれいにしたけれど、犬の散歩をする人が一日5人程度しかいないとか。あるいは、高架下であるとか駅前広場であるとか。そういう遊休空間の調査をすると同時に、アーティストがそういう空間を使って作品を発表したいかという意識調査を同時にしたんです。アーティストの方は、95%やりたいということでした。特に、美術系とダンス系なのですが、実際に今年の三月にやろうということになりました。ところが実際にイベントとしてのプロジェクトを実行しようとした時に、予算がおりず、この計画は一度なくなったんですね。

ところが、ここが面白いところで、普通だったらここであきらめるんですが、大阪府の人と話し合って、悔しいなということになった。その中で、内閣官房で都市再生モデル事業という項目がありますよということを大阪府の方から教えていただいたんです。じゃあ、共同してそれをやるために、NPO法人ダンスボックスとして申請して。府の予算はゼロになったけれども、知恵は大阪府の人が出してくれたんです。そのことによって、今年の三月に実現した。ただ、知恵だけじゃないんですね。いまちょうど文化庁のHPを開けていただくと、調査報告が一番初めに出てくるようになっていますので、時間のある方はゆっくり見ていただきたいのと、六十部ほどその報告書が会場においてあると思うので、それをご覧になると詳しいことは分かると思います。これがおもしろかったのは、行政の持っている力は、お金の助成だけではなくて、例えば、地域の町会長とのネットワークを持っていたりするということです。普通だったら、あるNPOがまちを使ってなにかをやりたいとなったときに信用されないケースもあると思うのですが、行政が噛んでくることで、ある種の信用が出来てくるということです。この大阪府との組み合わせがおもしろかったのは、大阪府の行政の中でも、企画室というのと土木が共同したんです。土木の人は、実行力があるんですよ。で、生活文化課というのは始めに関わってたんですが、知らないうちにいなくなってしまって、結局、企画課と土木でやってしまったんです。土木の人は、やはり現場仕事になれていますから、すごく動くんですね。イベントの当日も、労働力として非常に有効に機能した。そういう協力もあるということです。そのときは、行政とアートNPO。そこに企業、全国の企業としてはアサヒビール株式会社に交流会での現物支給をしていただいたり、キュレーターである方にある知恵を頂いたり。それから、地元の企業としては、泉北高速鉄道という、これは6つの駅をつないでいる小さな鉄道会社なんですが、そこのつり革に子供たちがワークショップで作った、世界一短い詩を一定の期間展示をしたり。かなり、前代未聞だったのが、電車の車両の中でダンスを踊ったんですね。おまけにアナウンスを入れてくれたんです。「いまこの電車の何両目で、●●さんが踊っています。」とアナウンスで入れてくれた。そして、駅の構内をアート作品で埋めたんですね。おまけに駅に降りてから、ダンサーはビキニになって駅の構内を踊りまくったんですね。これは、ちょっとトラブルになって、担当の方が終わってから違うところに行かざるを得ないというご迷惑をおかけしたんですが、そういうふうにアートNPOと行政と企業、それから教育機関ですね。大学の先生の協力や学生ボランティアが活躍したり、小学校の総合的な学習の時間を使ってワークショップをしたり。そういうネットワークをこの泉北アートプロジェクトでつくれたという事が僕らとしては、面として地域と関わっていく上で非常に有効だったかなと思います。もう一つだけ言いますと、十津川という奈良県にある、日本で一番大きい村なんですが、そこに、障害者の厚生施設があります。三年前に開催したアジアコンテンポラリーダンスフェスティバルで招聘した、インドネシアのアーティストに一日残ってもらって、そこでワークショップをしました。その後、縁ができて、去年は日本のアーティストが1ヶ月通い続けて、ワークショップをして、実際に作品を発表するということにもなりました。今年は、先ほども言いましたビー・ワンダー

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

も行きたいということで、毎年続いています。このように、劇場以外のいろんな施設でいろんな活動を継続していくという、これは本当に大切な点じゃないかなと思っています。

吉本

ありがとうございました。ゲリラ的に電車の中でダンスを踊ったりするというのは、北方舞踏派の流れなのかなという気がしました。それで、地域との関係ということで言うと、佐東さんのところは、京都に本部を置きつつ全国で活動されています。今回も前橋で「踊りに行くぜ!」がありますが、全国あちこちの地域でダンスのプログラムをされながら、地域とアートの関係ということで感じていることがありましたら、お話ください。

佐東

先ほどは、日本のマイナスのところばっかり言ってしまったんですが、日本の中で海外に誇れることがあるなと思うのが、立派な劇場が各地にあるということです。昔は「ハコモノ行政」として批判されたけれども、実際に回ってみると、「こんなところにこんな立派な劇場がそびえてるのか」と思うんですよね。劇場ができたことによって、文化とか芸術が活性化していれば、それで良いのでしょうが、ものの見事に中の予算をつけてないとか、みなさんご存知のようにいろんなことがあるんです。ただ、あんなに立派なものは、地震とか火事とかでも壊れないし、結構ずっと残ってると思うんです。だから、いま、僕たちの文化財産として劇場やホールがあるのに、それを地元だけで有効活用できないのなら、全国の人たちが頭を使って、アート NPO リンクみたいなところがお節介隊みたいなものをつくって、「あなたのところの劇場は、もうちょっとこうしたらうまく使えるんじゃない。」とか。市村さんとか大谷さんとか言っていたレジデンスという意味においても、全国回ってみると、やっぱり結構空いてる劇場とかスペースというのがあるんです。僕がこれを使ってやりたいなと思っていることがあります。空いているところが分かって、例えば始めはアーティストがいなくても、東京の A というカンパニーが冬になると 1 ヶ月間作品作っているんだよね、というだけで、やっぱり何かが変わってくる。そして、例えば東京でみんな皆稽古場が無いってあくせくして市民会館とかを回っているぐらいなら、いろんな経済的な問題もあるだろうけど、1 ヶ月間どこかの空いているスペースに行って稽古の期間だけ集中することで、アーティストにとっても、各地に第二のベースキャンプのようなところができるんです。もし、アーティストが自分の住んでいるところ以外にベースキャンプみたいなものを持って、地域の中で作品をつくる劇場が日本全国にあるというのは、凄いことだと思うんです。ただ、そのうまい流通の仕方とか情報の作り方というのがいままでなかったんだと思います。地域のホールは地域の人だけでやらないといけないという目を持っていたから、そこで煮詰まってしまうけれども、地域にあるけれども、もし全国のアーティストを相手にできるというような新しい方法論、システムを生み出すことが出来たら、これはかなりイケルんじゃないかなというふうに思うんですよね。

吉本

いまの話を聞くと、アートというのは、例えば劇場で観るとか、美術館で観るという時代ではなくて、もっとアーティストが地域の中で暮らせることとはどういう意味があるのかとか、アーティストが活動するということが地域にとってどういう意味があるのかとか、まさしく地域とアートの関係を考えるようなことが、公共的な文化政策を考える第一歩になるような気がしました。地域ということで考えると、いまの三人の話を聞いて、長官から何かコメントをいただけたらと思います。

河合

これからそれがすごく大事になります。今年の 2 月に「地域から文化で日本を元気にしよう!」という題

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

で、文化審議会の報告も出たんですが、地域からという時に、佐東さんが仰ったように、「うちはうちでやる」というのではなく、地域が連携するということをもっと考えて良いんじゃないかと思うんですよね。お互いに連携するとすごくおもしろくなると思うんです。一つの例を言いますと、舞鶴で、これは芸術と関係なく、広い意味での文化なんですが、枯れる桜を生かそうという NPO ができたんですね。それと同じことを弘前でもやってるんです。そこで、弘前と組むんですね。そうすると、舞鶴のほうが先に咲くから、舞鶴で桜が咲くときには、弘前の人が来て桜祭りをする。そして、弘前で咲くときには舞鶴が行くと。そうすると非常に楽しいんですよね。知恵だけでなく、人も流通するので。同じようなことを大谷さんが言われました。地域といっても、コンテンポラリーダンスで言えば、隣の村よりもひょっとしたらニューヨークのほうが近いかも知れないわけでしょ。今日もこのように集っていらっしゃるのだから、お互いに結びついて交流するということをもっと考えて欲しいと思います。そうすると、迎えるほうも楽しいし、こちらも行くということをどんどん考えて欲しいと思います。それから、僕は大谷さんの話を聞いて、一つ思ったのは、帰ったら文化庁にやはり土木課をつくらないといけないのかなということです。

吉本

ありがとうございました。いま、河合長官がおっしゃいった、交流するということですよね。特に、NPO というのは、各地で活動していますが、孤立しているというか、なかなか問題も共有できない。どうしても苦しい中辛抱しながら活動しているという状況なんです。それを何とか打破したいというのがこのアート NPO フォーラムを立ち上げたきっかけですし、アート NPO リンクというのを作っていこうという大きなモチベーションになっているんですね。ここまでの話は、理念的な話といいますか、概念的な話、最近のはやりの言葉で言うとミッションということだったんですが、ただ実際にアート NPO をやるということは非常に大変なことですよね。おそらく前にいる三人の方の NPO というのは NPO 法人を経営するということでいけば、ちゃんと経営のできている数少ない NPO の人たちだと思います。それは、言うは易し、行うは難しというところもあると思うんです。ここから、実際 NPO を運営、あるいは経営していく上で、直面している課題というのがどんなものか議論したいと思います。

まず、市村さんから、おそらくアートネットワーク・ジャパンという NPO はファンドレイズという面で行くと、本当にいろんな事をされていて、最もアクティブにやってらっしゃると周りからは見えるのですが、実は内情はもっと大変じゃないかというふうにも思います。NPO の経営、運営、マネジメントという点から何か発言いただければと思うんですが、どうでしょうか？

市村

経営はもう大変だということは分かっているから別に大変と思ってもしょうがないんです。どうしてもこのところ気になっているのが、まずファンドレイジングという話になってしまうのが非常に嫌で、それより前に、事業を組み立てなければダメだと思うんです。事業の組み立てが無いうちに、ファンドレイジングというのであれば、もう底の無いところに水を注ぐのと同じでいくらあっても足りなくなってしまうと思うんです。どんな企業でも同じだと思いますが、まず事業を組み立てないと資本なんて集めても仕方が無いということ。だから、まず事業の話をしようじゃないかということです。お金の話はその次じゃないのかな。事業をするためにはいくらかかるのか、どういうふうにすれば事業が回るのかということがあって初めてファンドレイジングの話だとおもうんです。NPO の利点というのは簡単につくれちゃうことなんですが、簡単につくれちゃうことがまた欠点でもあります。普通企業って資本金があるじゃないですか。で、資本金の無い企業は簡単に

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

つくれますが、資本金が無ければ経営できないんです。NPO も同じで、最初の何かがないと、絶対に事業ができないです。それは、もうお金じゃなくてもかまわない。それは人材でも構わないし、機械でも物でも構わない。自分の持っているものが何かという分析からはじめないと物が立ち上がらない。自分は独自に何を持っているのかと。そこから事業を組み立てて、何ができるかということを組み立てていく。当然お金はいつも問題で、東京国際芸術際なんて、本当は 90% ぐらいを次はどんなものを作ろうかという話に費やせればいいんですが、90% ぐらいお金のことを考えていて、内容のことは 10% ぐらいで考えるという悲しい現実で、おそらくこれは企業を経営するときも同じだと思います。昔、小さな会社を経営したことがあるんですけれど、そのときに弁護士に聞いたら、会社がつぶれる 90% 以上は経営者がいないことだと言うんですね。経営者が居ないというのが、NPO の最大の弱み。ものをやりたい人はいっぱいいるんだけど、経営者がいないというね。それを解決するには、いろんなセミナーを開いたり、財務諸表がつくれるとか数字が読めるとかそういう根本的な人です。例えば人件費というのを、普通管理費というんですが、それが財務諸表のどこに入っていてとか言う具体的なところがわからないと、おそらく文化庁とお金のやり取りをしようとしても、話が食い違って、同じ土俵に立てないと思うんです。やっぱり、お役人さんはそういうことを良く知っているわけだから、我々も同じ土俵に立つためにはそういうことを勉強しないといけないんですね。だけど、みんな嫌がっちゃうんです。経理がどうなってて、会計制度がどうなってててという勉強を少なくとも我々もしないと、同じ土俵に立てないなあと。帳簿の付け方なんてやるのは嫌なんですけど、でも経営するにはやらなくてはいけないということですね。

吉本

いまの市村さんのお話は、アート NPO サイドにとっては、耳の痛い話だったかもしれないと思います。語弊があるといけないんですが、NPO でやっているというのは、「こんなにいい事をやっているから市や県はもっと僕たちにお金を出すべきだ」とか、芸術団体も「こんなにすばらしい芸術をやっているんだから、もっと国や市が支援して当然だ」とか、そういう意見も一理あるとは思うんですが、それだけでは経営できなくて、NPO 側もちゃんと経営的な視点を持ってやっていかなくてはいけないということなんですね。そういう点でいくと、大谷さんのところは経営ということを凄く考えてやってらっしゃると思うのですが、経営に限らず、いま NPO で一番課題だなと思われることを言っていただければと思います。

大谷

本当に経済基盤の確立というのは一番の問題です。それから、市村さんがおっしゃったように、それ以前の問題として、事業を組み立てるということが当然のことです。そういうことが、いま、やや逆転してしまっているんじゃないかという警鐘だと思いますが、Dance Box の場合は、事業の組み立て等々、熱意の上でどうやって経済基盤を確立していくかというと、ある一つのプロジェクトを継続していくということがすごく大事なんです。僕は一つのプロジェクトの結果がでるのは五年かかると思うんです。三年ではなく五年必要だと思ってるんですが、だいたい必要な助成金がだいたい三年単位で考えられています。大阪市の予算は単年度ですから、非常に矛盾があるんですけれども、一番初めにお話しました芸術文化アクションプランというプランを基に私たちの事業が組み立てられています。そのプランは十年なのに、予算は単年度。実際にいま問題になっているのは、もう家賃が払えなくなったということで、移転も含めて今後のことを考えて欲しいということが、今年の五月か六月の終わりにかけてでてきた。結局、僕たちが NPO としてやっていきたい思い、事業の組み立て、そこにファンドレイジングをしていくときに、ある種のパートナーシップの組み立てと

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

してお金だけではないと言いましたが、やはりお金がいることは確かなんです。それを、助成金というかたちで行政に対してNPOが申請をしていく形がいいのか、あるいは一つのアーツカウンシルというものをアートNPOが中心に形成していく。そして、アーツカウンシルそのものが、事業の評価と予算も持っていけないだろうかというのが、今後の地方自治体とアートNPOが関わっていく上での一つの方向性かなと思います。

吉本

佐東さん、そのあたりの運営についてどうですか？

佐東

基本的には市村さんと一緒で、多分経営をするというのは凄く大変なことだし、アーティストはやりたいことがいっぱいある中でどう成立させるのかというのは大変です。ただ最近思うのは、前までは銀行や公務員、大企業に勤めるというのが、日本では一番すばらしいことだったけれども、いまの時代は、大企業に勤めるのと、アートNPOに勤めるのとそんなに変わらなくなってきたんじゃないかなと思います。大企業でも、ずっと働いていられるわけでもないし、大変な状況にあるわけだし。ある意味アートNPOは好きなことをやろうとしているのだから、それを運営できるかどうかというのは、やはり、考えて、考えて、考えてやることでしか無いのではないかと思います。吉本さんがさっきおっしゃったように、すばらしいことをやるから金くれという時代はもう終わったと思うんです。それが、社会のなかでどういう意味を持つのかという視点がそのことを決めるのであって、いままでのようにすばらしいことをしているから、お上から金をくれという時代はもう、終わっていると思うんです。そういう意味で、NPOというのを日本の中で立ち上げて経営するというのは、やっぱり大変なことです。だけど、自分が好きでやっているのだし、ある意味、大会社を経営する人だって、家族でやってる人だって皆大変なんですよね。そこを、NPOはすばらしいことをやっているのに何で大変なんだと言うよりは、例えばアートNPOリンクにしても本当に知恵をあわせてやっていかないとダメだという気がします。そういう意味において、いま、河合長官のお話も伺っていて、あるアートNPOがいま狙っている線と、河合長官と文化庁が考えていらっしゃる線というのは凄く似ている気がしたんです。多分いまから考えないといけないのは、いまの時代の中に、河合長官がおっしゃったような新しいシステムをどうやって構築していくのかということが、望まれ、必要になってきている。そのことは、各分野、私たちにしても話をしているし、さっきのホールのことにしても何とかならないかなということをアーティストと話しています。例えば、文化庁のなかでもそういう話がでているとするならば、一緒にそういう話をしたい。実働部隊としてアートNPOというのは、ある意味の土木課をやっていると思うんですよね。新しいシステムが日本の中で必要とされて、十年、二十年、五十年先を考えたときに、いまその下地をつくっていこうということを文化庁の方々とアートNPOとが一緒に考える場みたいなものが作れないのかなと先ほどからお話を伺っていて思いました。どうなんでしょうか。

河合

本当に私も同感です。日本は、いままでのところをいろんな点で変えてやっていかないと本当に危ないと思っているんです。それが、あなたも言われたけれども、いろんなところで変な犯罪が起こっていたり、キレる人が出てきたり。日本人として繋がっていたものがいっぱい切れぎれになっている。その切れているのをつなぐのが文化と芸術なんです。そのために、皆さんも頑張っていらっしゃるし、我々もやりたい。そのためには、いままでのシステムは変えていかなくてはならない。新しいものをつくっていくという思いは、私も本当に強いです。だから、私も文化庁長官兼土木長官になってですね、皆さんと一緒にやって行きたいと思っております。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

吉本

ありがとうございました。まだ議論したいことはあるのですが、最後の話で、NPO 側は NPO 側でこれからの文化やアートをどうやって公共的なものにしていこうかと考えていますし、文化庁は文化庁の立場でいろいろとやられているということで、できれば、このフォーラムをきっかけに、ある種の研究会なりが組織されて、共同で文化庁土木課ができるかどうかは分かりませんが、文化庁にやっていただくことだけではなく、逆に「そのことは、NPO ができますよ。」というように、それこそ新しいパートナーシップ、新しいシステムをクリエイション、創造していくきっかけになればいいと思いますがいかがでしょうか。

河合

本当にそう思います。それと、本当に日本にはいろんな文化会館とかがあって、それがいままではマイナスに思われていたけれど、私はこれは、日本の宝だと思うんです。宝の持ち腐れをやっていますから、これを使うために皆で頑張っていきましょう。これは、民間だけでもできないし、行政だけでも絶対にできない。そういうのを、どうすれば良いのか、一緒に考えて行きたいと思います。

吉本

長官には最後に、力強いお言葉を頂いて、ちょうど時間も来ましたのでので、これで終わりにしようと思います。今日は、シナリオがあったわけでもありませんが、NPO で頑張っている大きなムーブメントが、この前橋で集って、文化庁や公共の立場の方と一緒に何か始めていこうという次のステップのきっかけになりそうな気がします。できればそれが具体化して会場にいろんな方がおられると思いますが、皆で市民の立場から、何か新しい公共文化政策のトレンド、流れをつくっていけるきっかけになれば良いかなと思っています。最後に長官はじめパネリストの方に大きな拍手をお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。

以上

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

Arts NPO Forum vol.3 in Maebashi

［第3回全国アートNPOフォーラム in 前橋・議事録　フォーラム２］

日　　時　2005年11月5日（土）　14:40－17:30

タイトル　都市新生へのアートの役割
－EU創造都市に学ぶ－

内　　容　「EU・日本創造都市交流2005」でEU6カ国の視察を行ったアートNPOが政策提言します。その提言を元に都市活性へのアートの役割について会場を交えて話し合います。

パネリスト　甲斐　賢治｜NPO法人［remo］記録と表現とメディアのための組織
宮本　初音｜ミュージアム・シティ・プロジェクト
若林　朋子｜社団法人企業メセナ協議会
コメンテーター　小見　純一｜前橋芸術週間
モデレーター　加藤　種男｜アサヒビール芸術文化財団

会　　場　旧前橋オリオン座

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

加藤

こんにちは、加藤です。早速、今日ご出席の方々をご紹介させていただきたいと思います。一番向こう側から、企業メセナ協議会の若林朋子さんです。次に福岡で、ミュージアム・シティ・プロジェクトの事務局長をされております、宮本初音さん。大阪でNPO法人remoの代表をされております甲斐賢治さんです。それから、コメンテーターとして、冒頭でご挨拶を頂きました、前橋の実行委員長をしておられます、小見純一さんです。進行は、アサヒビール芸術文化財団の加藤が努めさせていただきますよろしくお願いいたします。

この全体のフォーラムが、11月3日の読売新聞の社説に紹介をされております。こういうフォーラムが新聞の「社説」に載るということ自体が極めて珍しいことだと思うのですが、個人的には、自分の関係しているところが3つも同じ社説に出ているということで、大変驚きました。一つは、横浜市が進めてきた、歴史的建造物の芸術文化による都市活性のための実験があります。BankArtという仕組みなのですが、この事例が取り上げているということと、もう一つ、私の所属しているアサヒビールがやっている全国30以上のアートNPOと一緒にやっておりますアサヒアートフェスティバルというのがあるのですが、その事例も紹介もされていて、もちろん今回のアートNPOフォーラムも紹介されていまして、大変感激しました。という事は、今回でこのフォーラムは三回目ですが、ようやくアートNPOの活動が認知され始めてきたあらわれだと思います。

本日も大変大勢の方にお出でいただいて本当にありがとうございます。このフォーラム2の「都市新生へのアートの役割EU創造都市に学ぶ」というセッションができた経緯を、ご紹介したいと思います。これは、ブリティッシュ・カウンシルを中心にEU6カ国からの提案でした。その内容は、EUの創造都市が進めている事例を日本の関係者に視察して欲しいということと、逆に日本のそういう活動について、EUから交換で視察をして、最終的には何らかのシンポジウムのようなものを開催したいということでした。提案は横浜市と横浜市芸術文化振興財団にあったので、検討の上NPOと協働して提案実現を図ることになりました。そこで、このフォーラムを運営しているアートNPOリンクに相談し、一緒に参加してもらえるNPOを推薦していただきました。その推薦を頂いた方々と一緒に、6カ国を3つのグループに分けまして、それぞれ二カ国ずつ視察をしたわけです。その視察に参加した3つのコースからお一人ずつここにお出でいただいているというわけです。実際に、その視察の一つのグループに参加させて頂いて、視察いたしましたが、大変衝撃を受けました。衝撃を受けたことは2つありまして、どこの都市も困っている問題もたくさんあるということです。それは、日本では前橋に象徴的なように、空き店舗がどんどん出るという都市の疲弊のひとつの姿です。そういうことがヨーロッパの各地域にもありまして、その中に例えば、港で造船業などが盛んだったけれども、それが無くなってしまって、失業率が非常に高まるとか。あるいは、炭鉱、工場が閉鎖されてその地域の失業率が高まるとか、そういう事例がたくさんありまして、そういうことに対する対応の仕方が生半可じゃないということにひとつ驚いたんですね。それは、この前橋でいうと、こういう空き店舗が出たときに、1つ2つに手を打つというよりは、最初は1つから2つからなんですが、時間が経つと、10も20も、ものすごい数のものを何らかの方法で改修し、転用、活用していこうとする、その圧倒的な量の多さに驚きました。それから、もう1つは、そういうことが最初は必ずしもきちんとした計画があったのではなく、アーティストが不法占拠で勝手に改造してしまうということも多いのですが、何年か経って最終的にそれが都市の政策として非常に明確なものになっていくこと。そのときに、誰かが重要な役割を果たした。つまり、誰か、必ずキーパーソンのような人がいて、その人、あるいはグループが、あるときからその事柄を政策化し、パブリックなものにしていくということです。先ほどのフォーラム

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

でいうと、最初は極めてプライベートな思いだったかもしれないけれど、あるところで新しい公的なスタイルとして、いっきに変えていくという、その仕組みづくりがどこも非常にうまくいってるのかなと思いました。もちろん、その仕組みには、大勢の人がいろんな形で関わって努力をされた訳ですが、それを変えていくときに、非常に大きな力を発揮する人々がいるというところが驚いた点です。そんなところを、視察をしてきましたので、さっそくご報告をお願いしたいと思います。それでは、まず甲斐さんから報告をお願いします。

甲斐

よろしくお願いします。大阪から来ました remo の甲斐と申します。remo という団体は、90 年代以降のデジタルメディアの発達で、実に多くの人々にコンピューターや映像機器を使うことのできる環境が与えられたけれども、案外アーティストと呼ばれる人や専門業の人々以外はあまり使っていない。そこで、アーティストを好事例として参照しつつ、人々が広く社会生活の中でデジタルメディアを活用していくような状況をつくろうとしている団体です。一般的に「映像」と言って思い浮かぶのは映画やテレビですが、そういった映像に対する受け手としての身体は、もうおよそ私たちには備わってしまっている。すでに映像を読み取るリテラシーがあるといえます。ところが、それに反して発信する力が全然無い。毎日、私たちが膨大な量の映像に触れていながらも、ただただそれを受け取るだけというのは、とても健康的とは思えないのです。ですので、個々人がさまざまなデジタルメディアを活用できるよう促す機会をつくっていくことが必要だと考えています。また、発信する力というのは技術と共に向上していくものですので、あらゆるレベルの技術を見据えながら、つまり「ビデオアート」から「文房具としての映像」までを範疇として活動している団体です。では、はじめます。

（映像開始）

第 1 グループの私たちは、イタリア、ジェノバとアイルランドのダブリン、スライゴーに行ってきました。今回は、ダブリンのみに絞ってお話しようと思います。アイルランドの基本の情報として、まず人口約 390 万人、1995 年より経済成長が 10%/ 年増。それが、10 年間続いています。とてつもない状況です。主な産業は、サービス、建設、金融、バイオテクノロジー。聞くところによると、アイルランドが英語圏であることから、イギリス、アメリカの情報産業の仕事が一挙に流れ込んだそうです。伺ったところはダブリン。アイルランドの首都です。人口約 150 万人。中央部は 60 万人しかいません。小さな都市です。この中に幾つかの開発地区があるんですが、特にアートに関係するという点で、テンプルバーという文化地域があります。若い建築家事務所が 8 つ。アーティストが 30 人住んでいるという。これだけではピンとこないのですが、週末には 4 万人が訪れるといいます。その部分をトピックとしてお伝えしたいと思います。それ以外に、バリマン地区再開発。これもとても面白い事例です。11 月に横浜で行われる EU・日本創造都市交流のシンポジウムのときに、そのディレクターが招聘される予定ですので、また何かプレゼンテーションがあるかと思います。ご興味のある方はそちらに行ってみてください。

ダブリン市、シティ・カウンシルのシティ・マネージャーという立場の方から聞いた限りでお話すると、まちづくりの姿勢として、29 の地区を持っていて、それぞれの歴史的・地理的条件にあわせた開発を行う。経済的に国際都市に見合う都市にする。まちづくりのポイントとして 3 つあり、the Walkable City「歩きやすい都市」。the reclaimed city、「再生された都市」。そして the Connected City、要するに「関係を持ちやすい都市」とおっしゃってました。「歩きやすい都市」というのは、裏返して言っているようです。ダブリンには鉄道が発達していなくて、歩くしかないんですね。そういう意味で歩けるようなまちづくりをしなくてはいけないということで、「歩きやすい都市」とあえて言っているように、僕には聞

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

こえました。では、テンプルバーに入っていきます。1970 年から 80 年ごろ、特別にアートに関係する施設があるわけでは無いものの、アーティストが多く、文化活動の盛んな地域だった。ただ、荒廃していてアブナイ地区というイメージが強かったということです。これは、さきほど Dance Box の大谷さんがおっしゃっていた、フェスティバルゲートという新世界の中の遊園地、その中に remo もあるのですが、そのエリアとすごく似ている部分があります。周りはかなり元気がないとされ、問題視されてもいます。そのエリアの一部が浪速区なのですが、その人口は 5 万人程度しかいません。そういう場所と似通った感覚で見ることができました。で、当時のそのテンプルバーには家賃の安さなどの理由からビジュアル・アーティストや役者、映像作家などが生活していた。その時点ですでに国鉄のバスセンター建設予定地であったが、建設前に安く貸していた。そうこうしていくうちにバス・センター建設が多くの反対にあい、地域に根ざした文化芸術による開発が開始された。1991 年頃のことです。同時に、観光ビジネス居住区としての開発も進行し、現在は週末には 4 万人が訪れています。初期投資で 4 千万ポンドと 6 千万ポンドで約 150 億円が投入されています。莫大なお金だと思います。このとき、実はアーティストの中に、その反対運動の主導者がいたのですが、後ほど説明するある施設のリーダーがイニシアティブをとるかたちでロビー活動を行い、プランを提出し、このような開発に変わっていったと聞いています。それによってできあがったのが、それらの地域の運営をどのようにやっていくかという仕組みです。まず、テンプルバー・プロパティーズという政府期間が設けた会社、非公開株式会社が設立されます。営利目的の売買が無いといいますので、つまりは非営利ですね。株はすべて政府が持っています。これに、都市開発、マーケティング、財務、そして文化の専門家などが首相によって任命され、配属されます。この文化の専門家と呼ばれている方が、実はそのエリアに元々住み込んでいたアーティストだったんですね。そんなことって日本であるのかなと思いますが ... あるのかもと思いたいですが ...。で、政府から、プロパティーズが土地を購入する基金を得て、テンプルバー地区に 82 億円というお金が流れてくるわけです。今も、アイルランドのアーツ・カウンシルの年間総予算のうちの 15% が、このエリアにあてがわれているとのことです。その中の施設、4 つを今日はご紹介させて頂きます。

The Ark（ジ・アーク）。これは、施設としては世界初の、子どものための文化センターと写真に写っている女性が説明していました。この建物自体はテンプルバー・プロパティーズが所有しています。で、150 席のシアター、30 人収容可能なワークショップ・ルーム。ミッションとして、国連の子どもの権利条約に基づき、子どもに対しても大人と同様に芸術に触れる機会を与えるということです。利用者は年間 2 万人で、4 歳から 14 歳の子どもが教師の引率のもと訪れる。200 校が規則的に訪れ、100 校がたまに訪れる。これはなぜかというと、アイルランドの小学校もしくは、中学校のような年齢の教育機関には、美術の時間が無いらしく、それを補うための施設として成立しているということです。運営資金は、1.5 億円/年。内訳として、収入はアートカウンシルが半分出している状態です。あとスポンサーですね。写真右上がワークショップの風景です。下がその部屋ですね。

次にアイリッシュ・フィルム・インスティチュート。施設は元カトリックの教会です。1945 年の建物で、これもプロパティーズが所有しています。映画館が 300 席、200 席の 2 つあり、カフェとショップとフィルムアーカイブ、年間 30 万人の観客がいると。もともと、このカトリック教会が支援するというかたちでこのフィルム・インスティチュートというのは 70 年代から活動していて、その後も引き続き、そしていまのような設備が整った状態になったと。ミッションは、アイルランド映画を保存する、アイルランドの観客に多くの映画作品を提供する。アイルランド人の監督が国外で撮った映画も保存されているとおっしゃっていました。収入は年間で 4 億 5 千万

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

円。その多くはアートカウンシルからの助成金。残りはチケット、カフェ、ショップ売り上げ、スポンサーなど。運営体制は、45 人のフルタイム、25 人のパートタイム。これ規模として凄いと思います。

これも、古くて、テンプルバー・ギャラリー & スタジオ。施設は元シャツ工場。1 階がギャラリースペースで、階上はスタジオが 40 室あります。日本人の方も滞在制作されていました。利用コースは、1 年、2 年、3 年のコースがあって、滞在年数によって金額が変わっていきます。月、約 1 万円から 3 万円の賃貸料と非常に安い。国内の若手アーティスト、国際的に著名なアーティストなど、受け入れの幅はかなりの範囲でとっているということです。家賃は、日本円でも見て安いと思うのですが、実は、いまダブリンの物価がとても高いです。日本よりも高かったんです。僕たちの泊まったホテルで、日本でいうと 1 万 5 千円ぐらいで充分泊まれるだろうというホテルが 3 万円ぐらいするという感覚でした。そう言う意味でも安いと思います。それも、アーツカウンシルからの助成の他、政府やペンキ会社からの援助で運営していると。

次にコンテンポラリー・ミュージック・センター。これは、日本で言うところのクラシック・ミュージックの文脈でのコンテンポラリーという印象を受けました。施設は歴史的建造物として指定されているような建物とおっしゃっていました。そこに、プロパティーズの資本により改装し、入居運営してもらっている状況です。ミッションは、アイルランド人の手による（国外にいる人でも可）作品の収集、保存を目的とすると。20 世紀に活躍したアイルランド人の作曲家 120 人の作品が保存されているとのことで、これが、譜面なのですが、整然とアーカイブされていて見事でした。CD などの音源に関しても、5000 点あるということです。

次に、プロジェクト・アート・センター。これが 1966 年からですから大変古いです。‘66 年の 11 月に The Gate Theater という三週間に渡る演劇フェスティバルが行われたらしく、それを発端に活動が始まった。施設には現在では、ギャラリーもあって、それ以外は大小の劇場。それらの施設を利用できるのは全て選ばれた団体、個人であって、完全にクオリティ・コントロールするのだという勢いでおっしゃってました。いわゆる市民のための発表会の場ではないということだと思います。収入は、約 2 億円。その内訳は、アーツカウンシル、レンタル料、カフェなど。運営体制は 13 人のフルタイム、3 人のテクニカル、120 時間勤務のハーフタイムが数人。人件費が約 6 千万円。立派ですね。

では、テンプルバーの大きな流れをもう一回振り返ってみます。旧産業のための建造物もしくは荒廃した倉庫など、賃料の安いエリアだったのですね。そこにアーティストや映画人、演劇人が住み着いたと。そのエリアには行政指導による開発、バスターミナルができるという決定がすでにあった。そこにアーティストらを含めた住民による再開発に対する反対運動が起こったと。それで、陳状およびプラン提出を行っていく。ここで、国及び地方行政によるアートや文化活動の理解があったのか、なぜその素地があったのかというのが僕には不思議に思えるのですが、そのエリアのイメージが向上していくという何か理解があったのではないかと思います。そこで、再開発のプランの変更という奇跡がおこるのだと思いますが、テンプルバー・プロパティーズが設立されるのです。そして、ここにアーティストたちも入っていくのです。ちなみに、先ほどの The Ark という子どものための文化センターのリーダーだった方がそのロビー活動とかプロパティーズのメンバーに当初なったらしいのですが、その女性は、当時 20 代の後半で、今現在 40 歳過ぎで、アイルランドで一番成功した女性コンサルタントになっているらしいです。ただ、その人は、もうこのエリアには住んでいなくて、あいにく今では軽い壁が地元のアーティストの方々とあるようなお話を伺いました。で、EU を含めた投資、今回の創造都市の指定とも関係するのだと思いますが、継続して投資されていくわけですね。これらの施設と地域に。ただ、問題が全く無いわけ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ではなく、実際に行ってどうだったかという肌身の感覚なのですが、観光客とアート活動が完全に乖離してしまっている感じなのです。パブや服屋やカフェがあって、僕は大阪に住んでいるので、南船場、南堀江、アメリカ村みたいといったら分かってもらえるかな？東京でいえば、原宿、青山かな ... そういう繁華街的な場所なので、観光客の主な興味は飲食と消費のように見受けられました。実際、少し前まで、主にイギリスからの観光客が夜通し飲んで叫んでいるというような状況がかなりひどいところまで一端いったらしいですが、いまは、だいぶましになってきているとおっしゃっていました。その対策として、プロパティーズ主導によるアウトリーチのプロジェクトというのがいくつかプランされていて、それを、いまご紹介した施設とネットワークを組んで、年に一回フェスティバルをしたりとか、そういうことで中和するような動きもされているようです。

問題としてもう一つ気になったのが、いま、アイルランドの成長率が EU 第一位で世界第三位という、中国とインドの次ということですからいいのですが、お金がなくなったらどうするんだろう？ということがありまして、そこで、先に言いましたダブリンのシティ・マネージャーに聞いてみたんですが、「お金が無くなったら、もちろん文化は一番最初に手を離すよ」というふうに明言されていまして、そんなに深い理解があって自治体の方が動いているという感覚はありませんでした。もうちょっと大きく、アイルランドに関する補足の情報なのですが、アイルランド・アーツカウンシルというのがまずありまして、今回の視察先の全部に関与していますが、国庫からおよそ約 82 億円の予算を持っていって、それが 260 以上の組織、32 の自治体に助成しているということです。先ほど Dance Box の大谷さんがおっしゃっていた、アーツ・カウンシルというのは、こういう機能のことなのかなと聞いていて思いました。とは言っても、この 82 億円というのは、アイルランドの人口 390 万人で、82 億円なんですね。どうなんでしょうね、この金額を日本と対比した場合、比率的に。で、次に、これも面白かったのですが、A percent for art program というものが約 10 年前に、環境省と文化省により施行されています。ある基準によって認められた都市開発や再開発時に、それらの開発予算の必ず 1% は芸術活動に充てるということを定めている法律があるんですね。特に面白いのは、開発の種別による自由度が出ていることだとおっしゃってました。例えば、公共のビルが建つというのならば、前の広場や、建物の敷地内に何か彫刻のようなものが出来るというのが、およそこれまでの方法ですし、開発する土地の区画による制限がかかるのだと思うのですが、ここで言う再開発の中には、広範囲の下水道とかの開発も含まれているので、そのときの予算の使い方が土地にそう縛られることなく、実施されるアートプロジェクトにもかなり自由度があるということが印象的でした。この例として、ブレイキング・グラウンドというアート・プロジェクトがダブリン市内のバリマンという地区の再開発プロジェクトを資本に進んでいます。これは 2002 年に始まった再開発プロジェクトで、約 10 年間続きます。ご存知かもしれませんが、「コミットメンツ」という映画の舞台になった地域らしいですが、かなり荒廃していて、壁にペンキで絵がいっぱい描いてある高層公団住宅エリアのようなところです。アイルランドの友達に聞いたら、そこを普段車で走ることは避けるというような状況らしいです。そこの高層の住宅を全部壊して、テラスハウスの二階建てにしていくという開発が始まっています。それが 10 年続くので、1% が 10 年続くというアート･プロジェクトが始まっているわけです。そのディレクターの方が 11 月に来るので、とても面白いと思います。

あともう一つ。これもアイルランドの政府の方にコメントで聞いたので詳しくは分からないのですが、アイルランドには、アーティストの収入に関する税金の控除というのがありまして、税務申告の際、その収入が制作した作品などによるものであることを証明することで、非課税となるという制度があります。これはすごいことに、U2 のボーノなどもいまだ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

に非課税らしいのです。これは、ちょっと問題になってきているともおっしゃっていましたが、ここまで優遇するのはなぜなのかと思ったりするんですね。で、とにかく国策としてアーツ・カウンシルなどを介し、オルタナティブ…市民主導型といって良いのか分かりませんが、文化芸術活動の活動基盤が支えられていたように思えました。

ここで、「政策提言」ということになっているのですが、ちょっと提言というところまではいけないと思ったので、考察というのをしてみました。それで、有形、無形文化財の意義というのを考えてみたくなったんです。アイルランドの場合、文化芸術の活性とその周知。周知というのは、まあ広報であるとか、知らせるということで、いずれはそれを目当てに人が来る、ということ見込んでいるわけですね。それで、都市に新たな財が還元されるというイメージに、一応コンセンサスがとれているから、こうなっているのだろうと。そして、その実績も、既にあるわけです。EU もそうなのですが、創造都市の視点、ジェイン・ジェイコブスとかチャールズ・ランドリーとか佐々木雅幸さんなどの考えと、何かリンクしているのでしょうか。つまりは国家間及び都市間競争というところで、こういった有形無形の文化財と行政資本、国庫のつながりというのがあるんだろうなと感じ取れました。大阪もブランディングというのを、いろんなところで言い出してきていますが、いまいち見えないです。そこで言っているのが、だいたい観光収入を上げましょうとか、創造産業の活性や誘致、さらには国際的な企業の誘致という流れです。ところが、そこに本来の資産との乖離が見えるというか、よく分からないんですね。というのは、そこの地元の動きとのつながりがあんまり良く見えない感覚がありまして、またもや輸入品を地域の文化とするような動きに見えてしまうのです。まずは、今そのエリアにある有形無形の文化財とその動きに資本投下するべきかと思うのですが。で、そこで公共事業と情報産業ということを考えてみました。ハード的なインフラは日本も整ってきていると。生活にそれほどこまるような状況は無くなってきていると。そこで、公共的なソフトとは一体何なのかということを考えてみました。ハードは分かりやすいですよね。道やら橋やら共有物として。でも共有物としてのソフトってどんなものなのだろうかと考えてみたところ、地域で日常的になされる経済、福祉、文化、アートなどを含むあらゆるレベルにおける市民活動の実績、その集積というのが、実は公共的なソフトなのではないだろうかと。そして、そのような公共的なソフトを扱うには、とても高度な情報リテラシーや編集能力を持つ人材が必要です。これが現状として、行政サイドに、そういう意識や人材があるのかなと思うことが、日々、行政の方と関わっていて感じることが多いです。つまり、実際にはざっくりと有形、無形の文化財と呼ばれているもの…これはハードも含むんですけれども、その中のどの部分が、世界の潮流を踏まえた上で、固有の歴史的価値があり、それを創造産業的に、要するにビジネス的に展開できる財として扱えるか、それを見抜く必要があるのだと思います。また同時に、今、ここにしかないという地域固有の創造的な文化やアート活動などもそれらとは質は異なるけれど、同様の財として見抜く力が必要で、それらは概念的にも、歴史的財と先端的財といったような分別がなされる必要があるし、更にそれらを発信するためには、それらを再編集する必要がある。そういう力を持った人材や能力が、行政なのかどうかは分からないですが、これは NPO でも良いと思っていますが、そういう力が、今必要なのではないかなと思います。これは、極論なのですが、こういう考えを進めてみて、なんとなく思うのが、「情報産業としての公共事業」という視点です。それは、アイルランドもそうでしたし、イタリアもそうだったのですが、まずアイルランドには、文学者が大変多くて、ジェームス・ジョイスとかベケットという人は、アイルランド出身で、その方たちを集めた博物館であるとかイベントがちゃんと用意されています。例えば、ジョイスの「ユリシーズ」のなかに出てくる主人公の「ブルーム」という人物

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

を据えた「ブルームズ・ディ」というのがあるのですが、その物語自体が、ブルームともう1人の2人の人物がダブリンの街を歩きまわり、1日かけて出会っていくという話です。その1日にブルームが歩いた道のりを一緒に歩いて、同じポイントを通り、同じ食事をし…というイベントが年に1回行われています。それには全世界から人が来るんですね。そういったこと、もともとそこに眠っているというか、そこから発信された財のようなものをもう一度再編集し、展開していくという力がすごく必要なのではないかなと思います。そういう意味で、イタリアなんかは、使われなかった古い建物をもう一度使っていくという、産業遺産的なものもそうですし、教会などもそうですし、単に古い1800年代の建物みたいなものもどんどん使っていく。そこでは、いろんなやり方があると思います。歴史地区として開発するとか、古い工場をアートという視点で開発していくとか。いずれにせよ、やっていることは実はハードを作るというのではなくて、情報を編集しているのではないかなという印象を受けました。そういう意味で、「情報産業としての公共事業」というのが見えてくるのではないかと思いました。ただ、そう言いながら、同時に懸念するのは、人寄せパンダとしてのアートというふうにも成りかねないという事実です。そこでできるかぎり意識したいのが、地域で活動する人がつくっていくものの集積としての文化。そしてその集積と政策とが繋がるプロジェクト、もしくはアクションが今後起こせたらなあと思った次第です。

加藤

どうもありがとうございました。いま、ご覧になったように、アイルランドは人口が390万人ぐらいということは、日本の相当大きな市レベルの人口だと思います。横浜市の人口が360万ですから、ほぼ匹敵する、横浜市ぐらいの人口しかいないところです。さっきの、お金がたくさん費やされて、国のアーツ・カウンシルが390万人に対して89億円。これを日本国の人口に翻訳すると、だいたい2400億円ぐらいだと思うのです。これは、文化庁の予算と比較すると、文化庁の予算が約1000億ですから、ちょっと多いかなと。横浜市の芸術文化振興財団が、横浜市からもらうお金が35億円ぐらいですね。それとくらべて約3倍。文化庁の予算と比較しても約2倍強。多いといえば多いですよね。だけど、10倍とか100倍とかいう数字でもないので、他にもお金の出所というのはあるから、日本も自治体が文化に使っている予算というのはそんなに少なくもないので、そういう意味でいうと、それほど卑下するほどのことでもない。そう思うのですが、何か違う。ビジョンが明確でないので、金の使い方がへたなのか、先ほどから言われているように、ソフトがうまく提言できていないのか。

とはいえ、やはりお金の額も違う。一つ前のセッションでの市村さんの話にもあったとおり、ドイツのアート・芸術をつくっていくシステムがすごいのですが、私もベルリンで唖然としたのは、ベルリンのある劇場の人が「金が無い、金が無い」と嘆いている。「昔に比べてどんどん連邦予算の文化に対する額が減って、今では予算の3%しか文化にくれないのですよ。」と言われて唖然としたのです。日本は1%にもはるかに及ばない。やっぱり相当お金を使っているのは事実です。

次に行きましょう。では、宮本さんお願いいたします。

宮本

はい。福岡から参りました、ミュージアム・シティ・プロジェクトの宮本と申します。ミュージアム・シティ・プロジェクトというのは、「都市とアート」をキーワードに活動している非営利組織で、主にまちなかに現代美術の作品を置くというテンポラリーな国際美術展を2年おきにやっていました。10年ほどそういう大規模展を行った後、ワークショップや地域住民とのフェスティバル、芸術学校プロジェクトなどを行ってきました。2004年6月以降は、福岡市文化芸術振興財団からギャラリーの運営を委託され

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ています。

さて、私ども第2グループは、イギリスとフランスに行ってきました。まず、英国・イングランド北東部にあるニューカッスルとゲーツヘッドという街に伺いました。ロンドンから飛行機で約1時間の都市ですが、日本のガイドブックにはほとんど紹介がありません。到着して空港ビルに入ったとたん、「文化芸術の街ニューカッスル・ゲーツヘッドへようこそ!」というイメージのポスターが貼ってありました。この街はアートが売りだ!と主張しているわけですね。ニューカッスルは人口約26万、ゲーツヘッドが20万ぐらいの都市規模で、もともとは鉄鋼や造船など重工業で大変に栄えたまちです。そのときにタイン川という川が、重要な役割を果たしたそうです。現在この街の象徴となっているミレニアムブリッジは、対岸同士にあるニューカッスルとゲーツヘッドを結ぶ、歩いて渡る橋です。美しい曲線を描いているこの橋は一日二回、まぶたが持ち上がるように動き、その下を遊覧船が通ってゆきます。つまりそういう大いなる工業技術の歴史がある街なのです。

この橋の周りに芸術施設があります。一つはバルティック芸術センターといいまして、古い製粉所跡を現代美術センターに改装しています。うかがったときは、ちょうどキーン・ホルツの回顧展をやっていました。最先端の芸術を紹介するにあたり、近隣に人口も多くない土地でどうなるかという話だったそうですが、開館後は予想以上にたくさんお客さんが入っているとのことでした。このお向かいにセージ・ゲーツヘッドといって、音楽ホールがあります。これは、一転して斬新な建築デザインになっていまして、夜はライトアップされます。ミレニアム橋・バルティック・セージと並ぶと、かなり凄い「文化芸術」エリアであると、そんな風景になっています。セージでは大きなホールと小さなホールがあり、クラシックに限らずワールドミュージックなど様々な催しを行っているそうです。興味深かったのは、ガラス張りの公開リハーサル室です。特殊な対象だけでなく、一般の人がいつでも気軽にリハ風景を見ることができるのです。こういうことでもお分かりのように、公演だけではなく、教育プログラムにも力点を置いている、これは、英国の文化施設に共通していたと思います。バックステージツアーなどが非常に充実しています。こういうことは、例えばホールの場合、演者だけでなく、それを支える人たちを育むということからも重要ではないかと思いました。セージにはこのほか練習スタジオやカフェもあります。カフェは大変にぎわっていました。

ゲーツヘッドのほうでは、丘の上に立つパブリックアート「北の天使」を視察しました。これは個人的には、1998年ロンドンに伺った際、担当者からお話だけ聞いていて実物を見ることができなかったものですから、7年越しの想いをかなえられて大変うれしかったです。高さが20メートル、幅が54メートル、重さが150トン、98年2月完成、アントニー・ゴームリーの作品です。非常に横幅がありますので、当初は、このような不自然なバランスのものは立つわけが無いとか、表情がないため気味が悪いとかで住民の8割が反対されたそうです。そういった難しい構造のものを建てることができたのは、このまちの造船技術があったからこそ、だったのです。完成後のラジオアンケートでは住民の8割が賛成に回ったというお話も聞きましたが、それには自分たちの街の産業に対するプライドなどが絡んでいるのかなとも思いました。

さて、こういった視察コーディネート一切を仕切ってくださったのが、イングランド北東部全般の再開発と観光と文化芸術を一手に担っているエージェンシー、「ワン・ノースイースト」です。到着翌朝、我々一行はミレニアム橋の脇に並び地元新聞社用に記念撮影を行いました。「ニューカッスルは、文化的に有名な街であり、東洋からも視察が来ているよ」とアピールしたいわけですね。

「ワン・ノース・イースト」と連動して文化芸術プロジェクトをサポートしているのが、この地区のアーツカウンシル・オブ・イングランド（英国芸術評議会）です。事務所内部はなかなかおしゃれで、家具

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

やインテリアに最先端のデザイン・アート作品を使っているのです。英国のアーツカウンシルというのは、非常に専門性が高く、政府とアーティストの間をつなぐ仕事をしていますが、このように若いアーティストの作品を買うということも重要な役目だそうです。非常に重要なことだと思います。また、アーティストが金銭的にも、精神的にもサポートを受けるという観点だけでなく、投機的な意味も含まれる、というのが面白いと思いました。

でこういった施設を駆け回り、いわゆる公的文化施設の様子は何となくわかりました。じゃあ、民間、アーティスト自身はどうなの？という気持ちが沸いてきました。民間運営の画廊、ビスケット工場跡地をギャラリーとした「ビスケット・ファクトリー」にもおうかがいしました。欧州一の商業画廊だそうです。地下にスタジオが設営されています。そその壁面にはビスケットを焼いていた釜の跡が残っていたりします。

もう一つ、アーティストが自主的に運営しているスタジオ「マッシュルーム・ワークス」にも行きました。もともとマッシュルーム・ブラス・ワークスという名前の建物を改装しています。少し寂れた感じのエリアでしたが、その辺りも文化芸術地区として再開発中だそうです。街頭には立派なデザインの看板やバナーがありました。「マッシュルーム ...」はデザイン、ビジュアルアート、工芸等の芸術家たちが共同スタジオとして使っています。中心人物は家具を作っているニック・ジェームスさんです。施設内にギャラリーがあり、作品販売もおこなっています。人手がないので、週末のみオープンしているそうです。共同キッチンなどもありました。マッシュルームワークスはその後、半年の間に大発展し、事業の幅やアーティスト数などかなり拡がったとのことです。

ここで興味深かったのは、建物の改修をするために銀行ローンを組んでいるという点です。こういう支援にもアーツカウンシルが一役買っています。アーツカウンシルはこのほかにも、病院とか、交通機関とか学校などが新しく建つときにアーティストに仕事を世話するようなことをやっています。例えば、詩人が新しくできる道路に名前をつけるというような取り組みがあるそうです。日本ではアートというとき文学系はなかなか入ってこないのでそういう点も新鮮に聞こえました。

この後、ロンドンに行ってまたいっぱいお勉強させてもらったのですが、要するに英国では、文化芸術が次の産業革命になるべき＝新しいクリエイティブ・インダストリーという考え方があるようでして、実際に英国財政というのはそれで潤っているという講義を受けました。例えば、デザインとか、映画、音楽という創造的な産業を国の産業の基幹に据えたいというようなことでした。そうなると、上からの指導で芸術というのが作られているのかなといぶかったりもしたくなります。最近の日本でも、やたらクリエイティブシティとか言われておりますが、このクリエイティブという言葉が英語であるところから、やっぱり英語圏の発想がそのまま来ているのかなとも思います。このまま話が終わると固いままなので、フランスのゆるい話もしたいと思います。

薄暗いロンドンから明るい陽射しのマルセイユに飛びました。視察したのは、郊外にある工場跡地を利用した大道芸の一大アートセンターとなりつつあるところです。周辺はアルジェリアからの移民が多い地域で、やはり、ちょっとやばい感じだとか。文化芸術によるイメージ刷新をもくろんでいる向きもありそうです。敷地内には移動事務所として機能するキャンピングカーとか、垂直に立ったバスとか、でかい熊模型だとかあり、いきなりゆるゆるのクリエイターエリアという印象でした。年代物のバイクをリストアしているスタジオと、大道芸などで使う立体造形スタジオがまったく同じスペースを使って一緒に仕事をしています。ここで、たとえばメカニックで動く動物らしいものを作ったりしていました。

もう一つ、マルセイユでは、「フリッシュ」という、やはり工場跡地をアートセンターにした場所にも行きました。有名な建築家がデザインしているコンテナで作られた事務所があって、大小いろいろな劇場

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

があって、アートスタジオがあって、デザイン系のカンパニー用事務所があって …。薄暗い未整備の駐車場は、いずれ商業施設にするつもりだと説明を受けました。文化芸術的なものを扱う商業施設として、映画シアター、ミュージックストアとか、ブックショップなどを入居させたいとのことでした。このスペースは実際に活動するにあたって、マルセイユ市から土地は貸してもらっているけれど、契約とか何もしていないということだそうです。フランスでは比較的普通のことらしくて、その辺、すごくゆるいのでビックリしました。2 つの建物をつかっていて、その 1 つがしばらく使った後に市に取り上げられちゃったそうなんです。ある程度定着してきたところで、市がメディアセンターに使うということで持っていかれたらしいです。そういうことがまた起こるかも知れない、だからもう市からは脱却して、自分たちで採算取るようにしていきたいということです。

また、フランスではリールという、ニューカッスルと同じように重工業地帯であったまちにも参りました。ここは、ベルギーに近いまちで、皆さんももしかしたらリール工業地帯って聞いたことがあると思います。繊維工業も盛んだったところです。素朴な感じのまちですが、街の印象はフランスの中でもあんまり良くなくて、観光客が全然来なかった。ところが、2004 年に、欧州文化首都として「リール 2004」という大規模なアートフェスティバルを開催しました。何十万人ものお客さんが来て、その後も、意外に客足が衰えないと。それで文化というのはやっぱりずいぶん市にとって潤うものだという話になったということです。今後は 2 年おきにアートイベントを継続し、3000 年にもアートフェスティバルをやるのだとお話を聞きました。

リール近郊には、炭鉱跡地があり、そういう施設を改装した文化施設もあります。学生時代に、炭鉱が閉鎖され寂れていくまちの人たちをみてこのままではいけないと、炭鉱がなくなっても市民に元気を与えないといかんと、いろいろと調査をしたり、アーティスト・イン・レジデンスを企画してきたというキーパーソンの女性がいます。

さて、リールでは、2004 年のフェスティバルのときに、工場跡地などを利用したアートセンター「メゾン・フォリ（熱狂の家）」を 7 つほど建設しました。3 つのメゾン・フォリに行きました。

最初に行ったのは繊維工場跡のスペースでした。ステンドグラス調の派手な天井があるギャラリー、可動壁がある劇場、企業に貸し出しもしている多目的ホールなどどこも工夫が凝らしてあります。ここの目玉は屋上庭園です。100 年間工場が閉鎖されている間に、絶滅した植物がここに生き残っていたということで、植物学者や建築の専門家が入ってちゃんと庭園として見て回れるようにしつらえています。地元作家のグッズを扱うショップ、バーやレストランもあります。いずれも「ゆるーい」「洗練されすぎない」感じでした。市がつくったセンターにしてはゆるいなと思ったら、なるほど、ここも市の管理から抜け自主運営をもくろんでいるという話でした。

他の 2 箇所のうち一つは、やはり繊維工場跡を有名な建築家により改装されたアートセンターです。ギャラリーがあり、ワークショップ作品や写真作品が展示されていました。また、アーティストのレジデンス用のお部屋があります。談話室もあります。さすがフランス、台所がしっかりしています。ただ、ここはやはり整備されている感じで、先ほどのような柔軟な感じは少ないという印象でした。

リールで伺った、完全に民営運営のスペースとして「メタリュー」というスペースにも行きました。アルミ工場跡地を建築家が買い取って、それをまたアーティストたちが集団で貸してもらって、家賃を払って借りている工房です。たくさん部屋があり、いろんなアーティストがそれぞれ好き勝手なことをやってらっしゃるのですが、ときどき一緒になって大きなプロジェクトをするそうです。音の出る作品をひたすらつくってらっしゃる方や古着利用の作品を作るかた、フィルムを燃やす作業をするフィルムメーカー …。なかなか不思議なエネルギーです。レスト

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ラン、オフィスが併設されています。メタリューはもう一つ大きなものを作るための倉庫も持っています。鯨、タツノオトシゴ、王子様、潜水艦などを見ました。フランスは、こうして、どちらかというと大道芸、サーカス系のところを回りました。
最後に、この旅のハイライトを少しご紹介しようと思います。フランス・アミアンというまちで、ジュール・ベルヌへのオマージュとして創作された象のパレードが開催されていました。巨大なプチジャイアンというお嬢様が登場します。人力で動かしているように見えますが、電気系の操作もあるようで、正装したオペレーターも見え見えの感じで作業します。人工巨大象の腹部は家の造りになっていて、そのバルコニーや天井にあたるところでドラァグクイーンのような人がたくさん踊ってます。造形美術であり、ダンスであり、音楽もついている。全体が、ベルヌの原作と違う新しいストーリーが組み立てられています、したがって新しい文学、演劇とも言えます。四日間にわたりストーリーがまち中で展開されるというエキサイティングなイベントです。拝見したのは最終日でした。市長さんが人工象さんに水をかけられてべちょべちょになって笑っていました。町中から人が集ってきます。サーカス劇場前にたどりつくと、プチジャイアンちゃんは宇宙帽のようなものをかぶってポットの中に入ります。そのポッドへ象さんが鼻で水蒸気（エネルギー）を注入して、宙に上っていくというラストでした。なぜこれをご紹介したかというと、旅のハイライトであったこともさることながら、行政とアーティストがどういう形で結び合うのかということをお見せしたかったからです。フェスティバルというのは、これだけたくさんの方が熱狂して、やはり非常に分かりやすい。また、重要なことは、芸術としてこれでけの質が充実しているからいろんな人がくるのだいうことです。福岡のこともお話したかったのですが、一旦、ここで終わります。

加藤
ありがとうございました。行政とアートの関わり方もいろいろあるということだったと思います。それでは、若林さんお願いします。

若林
企業メセナ協議会の若林と申します。企業メセナ協議会というのは、企業の文化活動や文化支援活動を応援する団体です。例えば、今日のアートNPOフォーラムもたくさんの企業が協賛という形で入っていますが、そういう活動を応援する団体です。民間の非営利組織としてこのEU視察に参加させていただき、第3グループでフィンランドとドイツに行ってきました。北海道札幌のアートNPO「S-AIR」と、弘前のNPOの「harappa」、札幌市、弘前市、横浜市芸術文化財団の方が一緒でした。フィンランドでは、ケーブル工場とアーティスト村。ドイツでは、ハンブルクの港湾都市などに行ってきました。今日は「ツォルフェライン」という炭鉱跡地の再生事業を報告したいと思います。
なぜここかというと、視察の場所のなかで一番「裏切られた」ところだったからです。というのは、最初に視察予定地一覧を見たとき、ここは世界遺産に登録されているとありました。世界文化遺産に登録された炭鉱跡地と聞いて、なんだかヘルメットをかぶった蝋人形がトロッコの横に置かれたような、そういうところを巡ることを想像してしまい、あまり期待していなかったのですが、行ってみたら一番ビックリだったのです。その一番ビックリしたことをお伝えしようと思い、ツォルフェライン炭鉱跡地再生の取り組みを報告します。
「石炭の城からデザイン、アート、文化の城へ」というタイトルをつけましたが、「城」というのが一つのキーワードになっています。まず場所ですが、ドイツの北西部ノルトライン・ヴェストファーレン州、英語読みではウェストファリア州にある、エッセン市の北部に位置しています。エッセンは人口が59万人。ドイツで6番目に大きい都市です。先ほど宮本

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

さんの発表にリール工業地帯というのがありましたが、こちらはルール地方の中心都市です。社会科の教科書か何かで重工業地帯として出てきた記憶がありますが、鉄鋼業のまちとして発展してきた土地です。時代が変わって石炭から石油の時代になったので、まちもいろいろと変わってしまい、貧困問題や20%を超える高い失業率などの炭鉱閉山の影響を抱えている場所です。

まず概要ですが、「ツォルフェライン」は19世紀の鉱山です。ちょうど20年前の1986年まで操業されていました。エッセン市には炭鉱がたくさんあったのですが、これが最後の炭鉱です。ツォルフェラインというのは地名ではなく、もともと関税同盟という意味で、何か歴史的な経緯があるそうです。

赤い鉄枠にレンガの壁、左右対称幾何学模様というバウハウス様式の建築。効率的な採掘という機能性に加えて美的インパクトを非常に重視しています。「エッセンのツォルフェラインは世界で最も美しい炭鉱」と概観面からも名を知られるよう、意図して美しく建築されたそうです。お城をイメージして、正面に門を構え、門番がついて、見た感じはまさにお城のようです。

1986年の閉山後は取り壊される予定でしたが、州が買い取り、そこからいろいろと始まっています。2001年にはユネスコの世界文化遺産に「エッセンのツォルフェライン炭鉱産業遺産群」で登録されています。現在は再生の「マスタープラン」が作られ、デザイン、芸術、文化、ニューメディアの拠点として再開発している最中です。

場所は主に3つのエリアから成り立っていて、敷地面積は全部で100ha。一辺が1キロ四方ぐらいのエリアです。かなり広いです。第1エリアは、第12立杭設備というのがメインの施設です。第2エリアには、第1、第2、第8立杭設備があり、ここも現在さまざまな文化施設になっています。少し離れて、コークス製造所「コーケライ」と呼ばれているところがあるのですが、そこも文化施設になっています。せっかくなので、写真で施設をご案内したいと思います。

（写真投影）

これが、メインの建物。お城をイメージしたバウハウス様式です。正面から見るとこんな感じです。こちらは、デザインセンターの入っている施設ですが、真ん中の道路は、かつては偉い人が歩いた場所。炭鉱の労働者は、端を歩かされたそうです。正面から入っていくとこういう感じです。ガイドツアーをやっていて、私たちが行ったときも、3グループ程いました。この黒いTシャツを着ているお姉さんですが、ツォルフェラインのマークが付いたTシャツを着て、ボランティアでガイドを引き受けているそうです。

これが「マスタープラン」ですが、こういったものがきちんと展示されていて、どういった経緯で、どのようなプランに基づいて再開発をしているのかを解説しています。右上が学校です。「ツォルフェライン経営デザイン学校」というのが2004年にできて、現在この白い建物をつくっているところです。2006年に完成予定で、金沢21世紀美術館と同じ建築家です。これはインフォメーションセンター。やはり同じように、赤枠の中にレンガが敷かれた美しいデザインです。こちらは大規模な開発をしていますが、元洗炭場だったところで、将来はビジターセンターになります。これは、ビジターセンターに上るための、入り口をつくっているところです。下は石炭倉庫だったのですが、ルール地方の博物館になります。

遠くから見ると、こういう感じです。石炭を運んだ鉄道がこの中にあったのですが、こういうものがまだ残っています。ここは「pact（パクト）」といいまして、パフォーミングアーツ、コンテンポラリーアートのセンターです。元炭鉱労働者用のシャワールームだったそうです。歩いていますと、ぽたやまがほうぼうに見え、煙突も滑車もまだまだ残っています。ガラスも割れた状態のまま、線路もそのまま残っています。ツォルフェラインがなぜ発達したかというと、国鉄に近かったためらしく、こういった長所引き継いで、また駅をつくって観光客を呼ぶ予定になっているようです。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

これは、先ほどの「pact」の内部ですが、もとシャワールームの鏡がいまは控え室になっていて、実際にここで化粧したりしているそうです。ここはガイドツアーで回れるところなのですが、世界遺産なのでむやみに昔あったものを動かせなくなっていて、滑車などもそのまま置かれ、こういったものも使って施設をつくっていくそうです。トロッコの中には石炭が入っていて、私たちも石炭をいただいて帰ってきました。これは、「レッド・ドット・デザインミュージアム」。「レッド・ドット」なので赤い丸い玉がシンボルマークですが、昔の建物の中に現代のデザインを一堂に集め、日本のグッドデザイン賞に当たるレッド・ドット・デザイン賞というのを開催しています。デザイン性の優れたものが展示されています。これがマークです。

これは、レストランなのですが、施設の一部として一般の人も食べられるようになっています。レストランの内部です。

これがコークス製造所の入り口です。カバコフというアーティストの作品が常設展示されています。これは、カバコフの作品が入っている建物です。

こちらは、インキュベーションセンター。元炭鉱施設の一部に中小企業、ベンチャー企業が集っています。この看板は入居企業名です。これはそのベンチャー企業の集っている施設の一部です。アート作品もあります。これも企業が入っている建物で中は大変きれいです。

それからここは、かつて鉄道の踏み切りをコントロールしたスイッチセンターで、アーティスト・イン・レジデンスの施設になっています。これが、レジデンスを取り仕切る非営利団体の担当者です。これは、旧炭鉱労働者の住宅というのも見ておいて欲しいと、この方が案内してくださった場所です。移民が多いそうでモスクもありました。レジデントアーティストは、そういった地域性も考えながら作品をつくっているそうです。

まちを歩いてみると、「この建物はかつてこういう施設でした」という案内板があります。これは、旧エンジンルームがパフォーミングアーツの発表会場になっているところです。

ツォルフェラインの歴史をもう少し細かく見ていきますと、最初の採掘が 1847 年で、この大きな建物の建築が始まったのが 1928 年。32 年までに全てできあがり、操業を開始しました。54 年間石炭を掘り続けて 1986 年に閉山。翌 87 年、当初エッセン市は取り壊してさら地にしようと思っていたのですが、州が「ルール石炭会社」というところから鉱山跡地を買い上げました。それからどうしようかということが始まりましたが、実は 80 年代の後半にこの跡地で地元の著名なダンサーが公演をしたらしいのです。それがきっかけで芸術家たちが、この場所に関心を持ち始めたと聞いています。80 年代の最後には、開発公社「バウヒュッテ社」というのが作られました。このとき既に建築展が開始され、10 年間続いています。この後、90 年代の最初から、アート、デザイン分野、ニューメディア系の事務所、企業が入居し始めています。やはり、デザインが美しくて場所も広くて、ここはいいぞと思ったところが、どんどん眼を付けて入ってきていたという経緯がありました。98 年には、市と州が開発のための財団を設立しました。それがツォルフェライン財団。同じ年に今度は州が世界遺産に申請をします。実は、2000 年に審議延長になっているんですね。いくつか課題があったためで、計画を見直して 2001 年にようやくユネスコの世界文化遺産に登録されました。登録の翌年、いよいよということで 2002 年にマスタープラン、開発計画草案が発表されました。大規模な開発になるので州が EU 委員会に助成を申請し、許可が下りました。

では、マスタープランの内容ですが、まず「デザイン、芸術、文化の中心にしよう」というのが大きなコンセプトです。それをブレイクダウンすると 4 つの計画に分けられます。1 つは、先ほど建設中の写真が出たビジターセンターとルール博物館を作ろうというものです。ルール地帯の産業社会の変遷を捉える場にしたいというのと、地域の観光開発の場にしよ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

うという背景があります。2つ目は、デザインマネジメントの大学設立。既に開発が進んでいて、今月そこの学校長が来日して講演するようです。MBAのクラスがあるマネジメント重視の学校だそうです。3つ目は、デザイン工房を作る計画で、中にいくつか工房やアトリエがあり、ここを中心にデザインフォーラムを開催する。その先に目指すのはルール地域の中小企業や研究機関へのノウハウ伝授だそうです。最後4つ目はテーマパークをつくる計画です。最初聞いたときは「テーマパークってどうなんだろう」と思ったのですが、要は、敷地内に建物が分散しているのでその動線をつなぐためのテーマパークということで、スケートリンクやサイクリング、散歩道などを作るそうです。

さて、このプロジェクト全体の開発資金ですが、EUと州と市が出資して、2010年までの開発総予算は1億2000万ユーロ。おおよそ168億円です。2002年にマスタープランができた当時は6130万ユーロだったので、結構増えていると思います。出資比率は、2002年当時で見るとEUが36万ユーロで一番多く、州、市の順です。案内してくれた人が強調していたのは、修復にはお金がかかるというのが大前提としてあるということ、運営は持ち出しということです。今後の展望ですが、印象に残ったのが、「昔は60年間掘るための施設だった。ただ今後は、できるだけ残すために活動していきたい」と言っていたことです。2006年までに建設を終了し、順次企業などが移転してきて、2010年には全ての計画を完成させたいとのことです。現在は、年間5万人の来場者があるそうですが、2010年には10万人を想定しているらしいです。現在の就労者、従業員は800人ですが、2010年にはその倍の1600人を予定しているらしいです。かなりの雇用者になると思います。一つ強調していたのが「雇用の創出」をあげておられたこと。一般企業が入居するエリアを設けたいとも言っていました。観光客増加による経済効果も期待しているという話で、宿泊施設などをつくれば、かなりの経済効果があるんじゃないかとボランティアが話をしていました。経済復興会社がたくさんあるよりも、こういった大きな施設が1つあるほうが、ずっと効果が高いのではないかという考え方に基づいているのだそうです。

ここからは、最初の加藤さんの話から引っ張ってきて、ツォルフェラインの取り組みを創造都市という概念で捉えた場合なのですが、1）活用している資源は、閉山後の巨大炭鉱です。2）集積したのは誰かというと、エッセン市と州。開発公社も上げられます。開発公社は、コンセプトメーカーであり企画開発のハード面を担います。ツォルフェライン財団は、いろいろな文化的な催しがあるのですが、そのプログラム開発のソフト面の担当者。これらの人たちが関わって資源を集積しているといえます。3）集積の中身なのですが、本当に多様で驚きました。読み上げますと、博物館、デザインミュージアム、学校、カフェ、レストラン、アーティスト・イン・レジデンスの施設、テーマパーク、フィルムスタジオ、美術や工芸品の常設展示場、ギャラリー、パフォーミングアーツセンター、シアター、スタジオ、工房、ガイドツアー、各種催し物の企画、ツーリズム、ボランティア、インキュベーション施設、企業、NPOなど実にいろいろと集積されています。

政策都市として立案するプロセスですが、これだけ大きなプロジェクトにもかかわらず、実は、最初から確固たる計画があったわけではないとはっきりおっしゃっていました。市がさら地にしようと思っていたのを、州の大臣の提案で「保存しよう」と決めて、開発公社が設立され、さらにはユネスコの世界文化遺産に申請しようという話になって、見事登録されて、その後にマスタープランをきちんと立てて、今後どうするかを決めたと。これが都市政策としてのプロセスだった。ただ、一つ重要なのは、むやみにアートやデザインを開発の柱にしたわけではなく、エッセン市には、デザインの大学やデザインセンター、デザインの関連企業が、実はたくさんあったんですね。それで、「デザイン、アート、文化の城」にしようと考えた。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

では、キーパーソンは誰だったのか。これは私の勝手な判断ですが、さら地化計画を撤回した大臣はキーパーソンの一人だなと思います。うまく聞き取れなかったのですが、たしかツェッペルさんという州の都市計画大臣です。また、地域の美術家というのが第2のキーパーソンかなと思います。ある美術家たちが、アイデアを持っていて、炭鉱にどのような美術的な価値があるかを市民に見せていったとのことでした。こういう人たちもキーパーソンだと思います。さらには、80年代の後半にここでダンスパフォーマンスをした地元ダンサーもキーパーソンだと思います。この人が公演を行ったことで、同じようにアーティストたちがこの炭鉱跡地に眼をつけるようになったそうです。また、開発公社も一種のキーパーソン…パーソンではないのですが、大きな存在だったかと思います。

民間と行政の関係については、あまり明確に区分されていない印象です。行政は、政策立案や、施設運営、管理を担っていますが、民間の関わりはというと、中小ベンチャー企業の入居。文化事業推進企業が入居しています。ドイツでは、NPOとか企業のシステムが日本と全く違うので、なんと表現していいか分かりませんが、宮本さんのレジュメの中に「社会的企業」というのがあったように、要は会社という形態でありながら、儲けるためにやっているのではない、儲けは出すが社会的な活動をしている企業というのがあり、そういった文化事業推進企業が、ツォルフェラインの中にたくさん入っていました。あとは、非営利組織が施設を運営する、市民ボランティアがガイドツアーをするなどが、民間としてのかかわりかと思いました。

高く評価できる点については、これも個人的見解なのですが、「場の記憶を活かした活動をしている」ということです。誰が見ても、かつてここが炭鉱だったことがすぐに分かる。それを感じられるような再生をしています。それから、単なる蝋人形的な保存に留まらないで、使って活かしているということ。新しくデザイン学校をつくったり、博物館やテーマパークのようなものを作ったりと、新しく価値を付加しているというのがいいと思いました。産業、工業とアートの結びつきを非常に深く考えていることも評価できると思います。

一方、課題というか、視察でよくつかめなかったのが、NPO的な民間の組が運営の中心・根幹のところにどの程度関わっているのかあまり良く見えなかったということです。もう少し、そういう人たちも積極的に出て来るのかなと思ったのですが、あまり見えませんでした。

今回は発表者が提言をすると仰せつかっています。1つ目は、炭鉱や他の視察地を回って思ったことですが、「その場所の持っている記憶」とか「場の匂い」というものを残す、活かすというのが本当に大事だということ。あまり手を入れすぎないことが。そうすることで、もともとそこに暮らしていた人や、いま現在暮らしている人の理解が得られるのではないかと思いました。2つ目は、最初のセッションでも出ましたが、「創造力」というのが極めて重要だなと思います。アーティストの力を借りて、創造的な見せ方、どうやったら魅力的に見せられるだろうと考えていくといいかなと思いました。3つ目は、「余地」とか「隙間」を残すということ。完璧な形で開発や再生が完了したとなると、もうどうにも関わりようや参加のしようがない。参加の余地、変わる余地、協働する余地というものを残すことが大事なのかと思いました。4つ目。ツォルフェライン含めどの視察地も、アート側の声やアーティストの再発見が物事を動かしていることがわかりました。やはり、アートによるまちづくりを考えるときには「こういった価値があるのだ」とか、「ここは良いぞ」とか「こんなことをすると、まちがもっと生き生きする」というような、アート側からの声が必要なのだろうと思いました。決して上からの指示などでは、まちは再生されないだろう思いました。最後に、異業種とか異分野と交流を持つことも大事ではないかと思います。ツォルフェラインの例で言えば、いろいろな業種のベンチャー企業が入っていたりします。まちづ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

くりをアート関係者だけで語っていると、どうしてもすでにアートであることが前提の語論になってしまいがちですが、決してアートだけが都市再生の術ではないと思いますので、いろいろな業種の人と接点を持っていくことが必要かと思いました。以上です。

加藤

ありがとうございました。この炭鉱は私も見に行きましたが、炭鉱というから、しかも、閉山とレポートにも書いてありましたから、山だと思っていたら、山なんか無いんですよね。本当に街はずれに平らな土地がずーっと続いていて、建物や小さな丘みたいなのがあるんです。その丘はもともとあったのではなく、要は、ぼたやまなんです。炭鉱で掘り出したものが、あちこちに堆積して、それが地形に変化をもたらしているのですが、たぶん掘る前は全くの平地で森が続いていたというような状態だったと思います。しかし、地下は凄まじいことになっていて、話を聞いて非常に面白かったのは、地下千メートルまで穴があるので、そこで地下千メートルの展覧会なんていうのも企画したら面白いだろうなと話していました。お三方の非常に熱心な発表をいただきましてありがとうございました。ここで、お聞きいただいた小見さんからコメントを頂きたいと思います。

小見

はい。まずはじめに、とってもわくわくさせて頂きました。ああいう場所を見ているとわくわくしてくるのは、皆さんも同じかと思います…。群馬県に程近いところに足尾銅山というのがありますが、ここはまさに若林さんがおっしゃっていた通り、蝋人形館的なところです。あれはあれで、何か良い部分もあるのですが、それ以上のものではなくて、やはりリピーターはいないです。そういう場所は自分たちの周りにたくさんあるわけですが、日本人というのはもともと見立てるという能力は凄くしっかりと持っていた民族だったわけで、和菓子にしても、作庭にしてもそうなのですが、空いちゃったものを何かに変えていくというのは、見立ての発想ですよね。それがちょっと弱っているのかなってつくづく思います。本当に均一に蝋人形館にするとか、三セク的なアミューズメントパークにするとか、その辺のことですごく反省もしなくてはいけないかなという気もしています。この場所もそうですし、これからご案内します交流会の会場の麻屋デパートの跡地もそうなのですが、加藤さんもおっしゃっていましたが、報告のあった地では、二次産業的な生産業的な工場とか炭鉱がつぶれて何かにしなくてはいけないという、そういう必然が出ているんですが、前橋の場合には、三次産業が没落というか衰退をはじめていまして、本当に末期的な症状です。これをどうしようかということになってきまして、見立てるだけではなかなか追いつかなくて、もっともっと知恵を動員しなくてはならないなと思っています。いくつか、キーワードが出てきたと思います。本当に楽しいばかりで、コメントをすることも忘れつつ、勉強させていただいたのですが、やはり「再生」という言葉が数多く出てきたと思います。このフォーラムのテーマは「新生」ということになっているのですが、再生というのは、僕も本当に大好きな言葉です。ただいらなくなったものを、全く新しい熱処理を加えて、しかもつくったときよりも大きい熱量を加えて、自然に負荷を与えて新しいものをつくるのではなくて、見立てにも繋がるのですが、見方を変えて、違う見方ができるかどうかということがとっても大事だと思います。そういうことって、子どものころにもやったかと思います。いつでも、子供の頃には、月の中にはウサギがいましたし、雲が美味しいタイヤキに見えました。そういう能力がいつの間にか劣化しているのか、なくなっているなという気がします。全く新しいものをつくるのではなく、全く新しいステージに持っていってそれをもっともっと素敵なやり方で、使い切る、使い始めるという時代に来ているのかなと思っております。全く新しいものをつくる時代じゃないということは誰もが分かっています。い

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

まあるものを、もう一度使っていく。「造るまちから使うまちへ」ということでこれからも進むべきだなと思っています。さきほど、フォーラム１で、河合長官も佐東さんもおっしゃっていましたが、日本には本当にこんなにも素敵なアーティストが、ダンサーが、演劇人が発表する場が用意されています。「ハコモノ行政」とずっと否定的に言われてきましたが、ふと考えると、もっと自分たちのほうからも要求するべきですし、「9 時に閉めたら何もできない」ときちんと声にしてみる時期にきているのかなと思います。若い学芸員も育ってきていますので、共生というか行政、施設管理の方々との新しい関係みたいなものを提案する時期なのかなと、話を聞いていて思いました。あと、キーワードがいくつかありました。公共性という言葉もずいぶん出てきました。やはり、新しい公共性を考える時期に来ています。ただ、「公共性ってこうだよね」ということを誰かが言ったとしても、それはどちらかというと合意形成的なものになってしまって、都市計画においてはどこもかしこも合意形成が必要であると。市民とのワークショップをつくりながら、より多くの合意を得ながら次の政策の提案をしていくというパターンが多いのですが、どうしてもそうなると弱者を切り捨てるレトリックになりやすいということで、その合意形成というのに、僕はあんまり良い印象を持っていないのです。ただ、合意形成をする中でいろんな摩擦を感じ、いろんな小さい声も聞きながら、経験をしていくことそのものが公共性だと思っています。公共性という実体が具体的にあるのではなく、いままさにこういう瞬間が公共性を学習している公共の場なんじゃないかなという気すらしています。それをヨーロッパの人間は実に会得しているという気がしています。公共性からは少しだけ、脱線しますが、このチラシで、今回８つのアートプロジェクトを作りました。No.7 というところ、これから交流会をする場所なんですが、ここでレトロ・パースペクティブ１という新しいアートプロジェクトを始めました。レトロ・パースペクティブというには、副題が付いていて、「思い出しながら、未来を思うために」。過去を思い出しながら未来を語るために、ということですが、これまた日本人が得意な分野なわけだったんです。なぜかその辺までもがアメリカナイズされて、別に否定的に言っているわけではないのですが、いまの時点から未来を照射していくという発想の方法です。ヨーロッパの発想というのは、よく話してみると、やはり若い子たちもそうなんですが、「もし 50 年前だったら、おれはこの世の中をこう思い、こう変えていくよ」という発想をします。そういう立ち位置を自由自在に移動できるような才能さえあれば、こういう発想というのは、発電所をアートセンターに変えていったり、ビスケット工場をまさに美術館に変えていったりというのは、いとも自然に発想としては出てくるような気がします。もう一度、もし私が 60 年前の終戦前の人間であれば、いまの日本をどう思ったのかという発想に変える。そういう発想に凄く興味があるのです。そういう想像力、イマジネーションに対して凄く興味があるのですが、日本人はもともと凄く得意だと思いますので、もう一回そういうことを考えていく時期かななんて思います。言ってしまえば、もしキング牧師ならば、いまのイラクをどう思っているのかとか、そういった思考を、いまもう一度持つべきかなと思っています。今回、このチラシの一番下に、ちょっとしたメッセージを入れておきました。ハンナ・アーレントという方の言葉ですが、「いつ来てもあなたの椅子は用意されています。食卓は用意されています。」という意味です。どうしても、公共性といったときに、同じ意見をつくること、一本化することを意識しますが、この瞬間から公共性はなくなると思っています。この意味は何かというと、コモンであることや、オフィシャルであることでしか語られない公共性というのから一歩前進し、常にオープンであるということを語っていると思います。この席もそうです。フォーラムというからには、広場でこんな話をしようといった瞬間から、ある議論が始まるという歴史がもちろんありますので、もっともっとこれが開かれていくよう

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

なフォーラムに、三回、四回と続いていったらいいなと、会場を見ながらつくづく思っている次第です。そういった開かれた中で新しい地域独特の価値観みたいなものを。そんなに大きな自治体という発想は全然ないです。本当に 200 人、300 人という村はフランスにもたくさんありますから、それぐらいのレベルで「あの人がこう言っているのだったら、こんなことやってみようか」というような立ち上がり方でもいいので、新しい公共性のようなものができればいいなという気がします。最後に、いくつも言葉が出てきた中で、石炭という言葉が出てきて、ふと思いました。石炭ってボーっと見ていても何にもならないですよね。やっぱりある熱量を加えて、水蒸気が出て、それがエネルギーをつくっていくわけで。それで全く新しい力が生まれてくるわけです。アーティストというのは、それを引き出す力を持つ人間。クリエーションというのは、まさにそういう力だと思っています。まちの中に、ダイアモンドとは言いません、石炭がたくさん眠っているような気がしてならないです。ほんのちょっと見方を変えれば、こんなにクリエイティブなものがたくさんあるという、その気づきのようなものをこのまちの中で、それぞれの地域の中で探しあうということ。ゆっくりまちを歩いてみること。「歩けるまち」とさっき提案がありましたが、やっぱり歩いてみないとなかなか分からなくて、歩いて初めて分かる風景というのが、自分もたくさんロケハンをした中で発見がありました。新しい隠されたものを見つけ出すことは大事なのかなと思っています。自分は、オリジンであることこそ善といった考え方に対して少し抵抗があって、今回のプロジェクトは基本的に積極的なコピーです。DepART / デップアートですが、これは、BankArt のコピーです。椅子を地域から集めることも、BankArt もやってますし、いろんなところでやっています。地域との共感を得る。ネットワークをつくっていく。地域の人たちも参加しているとか、そういうことを誘発していく。ああいった古い建物を、テンポラリーに劇場に変えていくこともそうです。ただ、真似云々ということではなく、僕たちがすることというのは、アーティストがいい仕事をしてもらうために、僕たちは職人になる必要があると思っています。オリジナルはつくれないかもしれないけれど、もしかすると、真似かもしれないけれども、それを早く、即効的に行政や企業につなげる役割。そういう場所を早くつくるといスピードが凄く大事だと思っています。先ほどのプロジェクトも、見ていてそうだったのですが、前橋だったら 50 年ぐらい掛かっちゃうだろうなということをグングンやっちゃうその力、キーパーソンのパワーもあるのでしょうが、そんな形で、アーティストがいて、職人がいて、同じものをただただ作ることになるのかもしれないけれど、人の真似かもしれないけれど、アーティストをゆっくりとサポートしていく状況を作る人間という位置を、NPO としても、ボランティアとしても、これからもつくり続ける場になればいいなと思っています。コメントということでしたが、見ていてそういうチャンネルが凄く開きました。自分の立ち居地というか、これから前橋だけですけれども、やるべき事というのは、違う形の前橋方式としてやっていきたいと思います。前橋は人口が 32 万になったばっかりです。一番最初にミーティングをしたときに、おそろいの T シャツを作ろうということになって、「10 分の 1 シティ」という T シャツをつくって、ちょっと横浜に対抗し始めているのですが、前橋ならではのやり方があるだろうということで、いろんなリサーチをしました。いろんな石炭を見つけたと思っています。あとはそこにいろんな方の協力を得ながら、熱量を加えて、どんな力が出てくるのか。5 年後、10 年後かもしれませんけど、楽しみにしたいと思っております。まとまりませんが、とりあえず、コメントというとこんな感じです。

加藤

どうもありがとうございました。パブリックというのは、一方通行だとつまらないので、双方向にしたいので、後半は、皆さんからご意見ご質問を頂いて、

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

進めたいと思います。さきほど小見さんもおっしゃっておられましたが、とくにEUで視察をしてきたところというのは、工場であったり、炭鉱であったり、いわゆる第二次産業の近代産業遺産が多かったわけです。前橋のようなまちですと、もちろん周辺部にはそういうのがあるとしても、第三次産業である店舗とか、横浜の場合だと銀行だとかそういうものがだんだん遺産化して、遊休施設化しているわけです。それをいま、新たな活用方法を考えて、芸術文化で活用して、都市の再生に取り組もうというわけなのです。そういう遊休施設というふうに考えると、先ほどから話題になっている文化施設ですね。美術館とかホールとかというのが、箱はあるのだけれど中身があまりないということであれば、期待される役割を果たしていないならば、それも遊休施設みたいなものですから、それももう一回、使い方を変えたほうが良いのではないかと思います。ですから、遊休施設化した文化施設もあわせて活用するというのも、これから考えていかなくてはならないテーマだなと思いました。そんなことで、後半を始めたいと思いますが、特に、ここではEUの事例を参考にしながらも、我々が今後どうしていくかということが大事なわけですから、日本の現実に置き換えて、議論をしたいと思います。どなたか会場からご発言をいただけないでしょうか？

客席

経済学に関心をもっておりまして、芸術文化活動なんかだと、所得税を払わなくて良いというようなお話をどなたかなさりませんでしたか？やりましたね？2つ知りたいので、お願いします。一つは、収入に制限は無いのかということ。もう一つは、例えば、法律で決めると、芸術文化活動、芸術をやっている人ってどんな人かと決めなきゃダメだと思うのですが、どんなふうに決めているのか。どんな活動でも入れるのか。それは担当者の裁量なのか。わかる範囲で構いません。海外の話って本当に良く分からないものですから…。

甲斐：アイルランドの外務省の人とご飯を食べながら聞いた話なので、しっかりとした書類では見ていないのですが、まず収入の制限があるかないかということですが、U2のボーノがまだ非課税であるということは、制限がないと思います。それは、彼らがつくった楽曲の著作権に関する収入だと思います。CDの販売であるとか、プロモーション、流通というのはたぶん法人格を持った会社がやっているので、そこは税金がかかると。純粋にアーティストが作ったものに関する著作収入に税金がかからないということです。もう一つ、それを誰がどうやって選ぶんだということですが、これが自分の作ったものであるということが証明できて、これが何かしらの収入になったということを税務署に証明できれば良いといっていました。だから、誰がアーティストで、誰がそうじゃないかというのをジャッジするものは何もないと。逆に不思議だったので、スポーツ選手にはないのかというと、それは対象にはなっていないということでした。ですから、基本的には創作活動というかアーティストという範囲においてそのような仕組みがあるようです。

客席

実に興味深いお話でとても有益でしたが、発表、プレゼンテーションの仕方のせいなのか分かりませんが、もっぱら視覚的な側面が報告されて、音楽といわなくとも、音の面での報告が少し落ちていたような気がします。私は、育ったのが青森県の弘前市でして、私の記憶は音と共にあると。つまり、ねぶたの響きというのは、身体的な記憶としてきちんと残っているんですよね。ですから、こういうまちというものと記憶というものを共有するときには、音というのをどのような形で扱うのかというのも非常に重要な側面ではないかと思います。その点について、今日報告くださったパネリストの方たちは、実際にいろんなまちを実地でお回りになっているわけなので、その点に関して、あちらの方がどういう姿勢で

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

いるのか、また可能であれば、パネリストの方たちのそれに対するご意見を伺いたいと思います。

甲斐

第１グループが回ったのがイタリア、ジェノヴァとアイルランドのダブリン、スライゴーという３都市なのですが、そこで見たアイルランド政府、イタリア政府の用意してくれたスペースで、そのような音の記憶に関するプレゼンテーションをしているアーティスト、施設というのは無かったです。ただ、おっしゃっているようないわゆるフィールドレコーディングではなく、アイルランドのコンテンポラリーミュージックセンターのようなところで言うところの、楽曲の音ならば記憶として残そうとしている動きはあったように思います。

加藤

その場の音のようなものはありましたか？宮本さんお願いします。

宮本

第２グループでは、たぶん今回のツアーで回ったスペースがビジュアルアート系が多くなっていたかなとは思います。音を使った作品というのもその中であったのかもしれません。本日は取り上げませんでしたが、映像を扱っている教育施設にもうかがいました。最後にご紹介したアミアンの象は、それ自体に音がついていますので、それこそ、お祭りの音として人々のきおくに残っていくのかもしれません。今回は「都市の記憶としての芸術活動」という視点でのツアー構成では無かったのだろうとおもいます。

若林

第３グループのフィンランドとドイツですが、私自身があまり音に注目していなかったからかもしれませんが、音が場所の記憶と結びついているというのは無いです。一つ上げるとすれば、ツォルフェラインの炭鉱ですが、本当に広くて、逆に音が無い場所がありました。操業停止していまは音が無く、動いていないところにカバコフという人の作品が展示されていることが逆にとても印象に残っています。

甲斐

個人的な感覚なのですが、ヨーロッパの視察に行って、いわゆるアートというものを一部見せてもらったわけですが、そこで見せてもらったのは、つくり手が生産するアートだったんですね。おそらく、いまおっしゃっているのは、受け手が拾いとるアート。それについての方法論やクリエイティビティのことをおっしゃっているのだと思います。そういう意味では、あくまでも僕の個人的な感覚ですが、ヨーロッパでは、それを、アートと呼ぶような土壌というのがやや薄く、アジアもしくは日本と違って、そこにズレがあるのではないかなというふうに思ってしまいます。こっちでは、音や耳のことで言えば、風の音を聞くとか、虫の声を聞くというような「楽しみ方」というのが一般的ですが、それはやや東洋的なのかも知れません。もちろんヨーロッパにもあるのでしょうが、比較的つくり手主体の歴史があるように思えます。偏見かも知れませんが、とにかく今回そう言う場には出会えませんでした。

加藤

時期が、パフォーミングアーツ系のオフの時期だったので、そういうものをあんまり見られなかったというのも、一つの要因だと思います。それと共に、静かだったんですよね。どこに行っても。今日は、ここは賑やかですが、普段は静からしいので、道路の音なんていうのも、やはりまちが全体的にゆったりできているなという感じがして、静かだなという印象が非常に強く残っています。またこういう報告の際に、音を報告するというのは、もちろん録音すればできなくは無いのですが、やっぱり、人間の視覚の優位性ということもあるかもしれませんね。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

小見

前橋のことですけれども、東急インというホテルがある所に昔、商工会議所がありまして、そこに「愛の鐘」というのがありました。結構どんな地方都市にもそういう鐘があったと思いますが、毎日朝8時と夕方5時にその「愛の鐘」が鳴ったんですよね。もう30年ぐらい途絶えていて、5年程前に、それを再生しようということで、「時の景」というアートプロジェクトをしました。当時と全く同じ音源を探してきて、8時と5時に鳴らしたら、これが大ひんしゅくをかいましてね。3日で消すことになりました。つくづく思います。京都の「鐘の音を鳴らすな」というのとも繋がると思いますが、やはり、コミュニティの共有感の中で、音って大きかったのだと思います。豆腐屋の音でも、カラスの声でもそうなんでしょうが、何かその裏に凄い共有感というか連帯感のようなものが潜んでいるような気がしてなりません。そういう共有する音が凄く無くなってきて、それぞれがバラバラな音を聞き始めているというような感じがしますね。

加藤

これを議論すると、またおもしろいのだけど。

客席

前橋生まれなので、このあたりの事情は良く知っているのですが、去年でしたか、あるスーパーマーケットができまして、それができる前は、赤レンガのつくりの製紙倉庫だったんです。もう少し早ければ、それが残ったのではないかと思いますが。駅前にもう一つ、やはり、赤レンガで作られた上毛倉庫というのが有りまして、それがまだ残っておりますし、その他消えた倉庫もいくつかありますが、その程度しか古いものは残っていないのですよね。麻屋さんのことは、子どもの頃から良く知っているのですが、その裏にかなり広い空き地ができているのですよ。公園のような広い空き地ができているで、具体的な提案としては、2階よりは少し高い程度の回廊を、その公園の外周に歩道橋のようにつくってしまって、そこから、まだ残っている2階部分に直接土足で入り込むというような規則をつくってしまえば、それなりのことが進行するのではないかと思うんです。ただ、それには、法律的な問題とか、了解の問題とか、いろいろあるのですが、いまの世の中というのは、広場がないと動いていかない。モールをつくるというのは、そこに広場ができるからなんです。モールは、現在前橋にも、ダイハツの跡地がありますので、相当広いところで計画されて、進行中らしいのですが、私に言わせれば、そういうものをつくる必要はないんです。いまここにある空き地を利用して、その周りに2階より少し高いだいたい3階ぐらいのところにモールをつくって、その周りにビルを建てていくというふうにすれば、そこが喫茶店にもなりますし、店の出入り口が地上と2つできますし。それが、法律的に、または市役所の課長さんたちも参加してらっしゃるようなのですが、この会が、いわゆる報告会として機能しているのか、コミットメントをして具体的にプロジェクトを動きだすのか。その辺のところをちょっとお伺いしたいのですが。

加藤

ここの、フォーラムは、いろいろな課題をお互いに話合って、それを実際にどういう形で実現していくのかは、それぞれの方が持ち帰ってやっていただくことだとは思います。もっとも、皆さんが議論して、前橋でこういうことを起こして、こういうことをやろうじゃないかという話になれば、ここで決議をしてぜひやるのも無いわけじゃないと思いますが、2日あるので、明日あたりにそういう決議が出てきてもいいなと思いますが。それには、いろいろと意見を出していただいて、少し議論をしてみる必要があるのかなと思います。いま、前半で言われた、貴重な建物がどんどん壊されていくわけですけれども、それは、ある意味で仕方ないといえば、仕方ないところもあったかもしれませんが、今からでも遅くないから、残っているものを何とかしようというふう

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

に早く切り替える必要はあると思います。

客席

ぜひそうしてください。

加藤

皆さんでぜひそうしていただきたいと思います。それから、もう一つは、必ずしも材として貴重なものだけが大事なわけではないので、貴重で無いもの、こういうデパートとかも普通のビルですものね。もちろん、いろんな記憶があるから貴重なので、いろんな事情があるだろうけれど、ただのビルでも壊すよりは、残せるものなら残していこうという時代です。だから、レンガだから貴重で、そういうものを残そうというのは、もちろんその通りなのですが、それ以外のあまり貴重でないものについてもいろいろと考えていく必要がある。

それから、もう一つは、冒頭でご挨拶された中で、「日本人は侘び寂びの文化を大事にしてきて云々」という話がありましたが我々が侘び寂びを大事にしていたら、こんなことにはならないわけで、しっかりと侘び寂びを忘れて、破壊をして「そんなものは無くてやっていくのだ」と一回決めたものだから、こういう状態になっているともいえますね。そのときに、文化といえば「侘び寂びだ」、芸術といったら「侘び寂び」だというそういう感覚を一回反省するべきだろうなと思います。我々は、文化を大事になんか全然してこなかったのではないでしょうか。ですから、そこは一度徹底的に反省して、いかに日本人は文化を破壊することは一生懸命やったけれど、保存することに努めてこなかったということは、考えたほうが良いんじゃないかと思いました。

客席

私は、古いものが大事だから残して欲しいと言っているのでは無いんですよ。それは、むしろ、再利用するには、一度捨てなくてはいけないと思うんですね。だけど、捨てるには、それなりの方法があるだろうと言っているわけです。別に大事だと言っている訳ではないんです。

加藤

私も、いまのお話に異論はありません。

客席

日本に持って来たいという凄く気持ちが起こったのですが、実際に日本で様々な活動をされていて、実体験を通して、ご自身のミッションを通して、真似できないものは何なのかなと。真似したくてもできないのは何なのかということを、実体験を踏まえてお話いただければ嬉しいなと思います。

甲斐

では僕から。ヨーロッパから具体的に持って帰ってこられるものって、なかなかありませんでした。先ほど紹介したテンプルバーというエリアは、この20年間の経緯の完成形を見ているので、感じ取れないのですが、あれが始まる前、開発するという前に誰かが「それは止めようぜ」と言い出して、ネットワークを作り、連帯してある動きに食い込んでいったという、その流れが非常に重要だと思っています。現在、Dance Boxの大谷さんらと大阪市の施設であるフェスティバルゲートを今後どうしていくか、というときに、4つのNPOもしくは、周辺の関西圏の文化に興味のある人、もしくは地域の町内会、それから、商売をしている人たち、例えば近くに日本橋という大阪の秋葉原というようなところの商店街組合の方々とかと話をしながら、「こんないらない建物どうするんだ。アートだけでは無理だろ。」といわれながら、無理だけど、だからと言って、座っているだけではダメだろうと言いながら、会議をするんですよね。それは、シンポジウムという形で開いています。そういうこととか、いま、僕のほうでは8個のアート系のNPOが集って、ある展覧会を作ろうとしているのですが、アートといってもいろんな視点、価値観が違うんですね。その価値観が違うときに、あ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

る共通の目的があって、「芸術環境を良くしよう」と平たくいうことができるのですが、それをもとに一つのものを作ることになったときには、視点がぶつかるんこともあるんです。具体的には、例えば現代美術の作家を扱う側にとっては、展覧会をする際に、アーティストの作品を置く環境は完全に確保される必要があると。その作品しかあってはならないと。それは、ある考え方でいくと正しい。しかし、パフォーマンスを扱う側にとっては、ぜひその環境と絡みたいというわけです。サイトスペシフィックに作品の前で何かしたいと。そういう相反する考えが出てきて、それを言いたいだけ言ったうえで、コンセンサスをとっていくという対話の場所を経験している最中なんですよね。先ほど公共性をつくっていくための対話をする経験が重要だということを言っておられましたが、そういう意味では、こちらの前橋で、先ほどのコメントであるとか、「ぜひやってください」と言った方を含めて、市長も含めて、まずは対話できる場づくりが重要だと僕は思います。今回の視察では、そういう過程を経た成果物を見てきたので、直接的には持ち帰るものがありませんでした。唯一は、テンプルバー・プロパティーズという仕組みでしょうか。

宮本

これを機会に、先ほど話しそびれたところも話したいと思います。私はよくアートと食事を例えるのですが、和食と洋食の違いみたいなものが感じられました。いくら同じものを再現しようと思っても、ダシのとり方とか、素材が全く違う。サトイモを使ってポテト何とかを作るみたいで、なんだかギクシャクしてしまう。そしてどうしても絶対に違うのは、やはり文化芸術にたいして、多大なる関心とお金をかけようとしているということです。文化芸術を圧倒的に信用しています。じゃあ、日本は本当に信用しているのだろうか？都市再生のツールに使いたいだけであって、本当に芸術文化が生まれるところに関心があるのか？というところが一番違うと思います。

最後に、よそで見てきた話だけではなくて、福岡のスペースも紹介します。民家を改装し若い世代たちが運営しているアートスペーステトラ、篤志家がお金を出し倉庫をスタジオや発表スペースにしている三号倉庫場所、北九州・八幡で銀行跡をギャラリーにした旧百三十銀行ギャラリー、田川で炭鉱関連会社の倉庫だったところをパフォーマンススペースとカフェにしたオルタナティブスペース haco、甘木市で小学校跡地をアートセンター化した共星の里。これら福岡のスペースは法人としての NPO ではないことが多いです。テトラと旧百三十銀行ギャラリーはその後 NPO 法人化しました。アーティストの活動の一環として、いわゆる任意団体的な動きをしているケースが多い。そしてこういう人たちが、「アート NPO フォーラム」に来ない。なぜでしょうか。モチベーションが薄いということでしょうか。基本的には出張してくる資金が無いからなんですね。お金を払っても来いというほどの魅力があるかというのは別問題として。今日は福岡市行政担当者の方々がご来場になっています。もちろん出張費をもらってきていると思います。だけど、民間の組織はそれは非常に厳しい。福岡でああいうアートセンターをつくろうという話も何度も出ています。だけど、そういうアートセンターをつくろうという話ではなくてもちろん福岡ぐらいの規模であれば、あと 10 個ぐらいアートセンターがあってもいいのですが、それはさておき、こういうアーティストたちが実際に動かしている場所に対して、ここに勉強に行ってみたら？というような支援の仕方とかがあってもいいのかなと思います。

私は、この話を行政とか NPO だけでなく、アーティスト、アート活動をしている現場の人にも一緒に聞いてもらいたい。実際にアートを動かしていく人たちがいないところで、いくら話をしても、やはり進まないのではないかと思います。文化やアートが生まれるところに対しての絶対的な信用が日本という我々にもっと必要なのかなと思います。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

客席
前橋には元消防署というのが空き家としてあります。市さえアーティストが使える空間はある。もう閉鎖してあるわけだから、タダだって言い訳です。民間の施設ではないのだから。だけど、この会が、市とどういう協約を結んでなさっているのかは分かりませんが。私としては、市会議員でもないし、市にコネクションが無いので、市に在住していても動かせないんですよ。市に在住していても。

加藤
市とここの会は何の公約もしていないです。ただ、後援していただいています。そこで、いまおっしゃっていることは、宮本さんが言われたことと非常に密接に結びついているとおもいます。先ほどからいくつかご覧頂いた例には、報告しなかった分も含めて、アーティストの不法占拠、勝手に使い始めたところも多いのです。そのときに、日本だったらどうするかということです。日本では、そんなことしたらダメだという力の方が強く働くんです。ヨーロッパでもそれは気に入らないという人もたくさんいます。こんな汚いヤツらがごろごろ住み着いて、夜中まで騒がれたらどうするんだとか、犯罪が起きたらどうするんだとか、いろいろ出てくるんだけど、一方で、まあいいじゃないか、アーティストなんだからという意見も出てくるんですよ。そこの微妙なバランスは、要は先ほど言っておられたアートに対する信頼があるかどうかなんですよ。日本は、そんなものを必要ないと実は心の中で大勢の人が思っているから、不法占拠を認めないのですよ。勝手に使うのじゃなく、きちんと管理して、システム化しないといけないじゃないかという方が先に出てくるんですよ。そこが大きな違い。でも、いまおっしゃっておられることは、人に言わないで、ぜひそういうことをやってください。自分で始めて欲しいわけですよ。いろんなところで。

客席
そこで、絶対に市とアーティストがペアを組まない限り、それは前に進まないと思うんですよ。

加藤
いやいやそうじゃない。まず使うんですよ。ただでも使わせろということを、まず始めてしまうんですよ。

客席
それが、不法占拠になってしまうんですよ。

加藤
不法占拠というから不法占拠になってしまうので。

客席
そこに、一人でもネクタイを締めた社会人がいれば、状況は変わるんですよ。

加藤
もちろん、その応援のシステムはつくっていく必要があるのだけれども、まずは誰かが始めない限りは事が始まらないので、こういったところだってもちろん借りるためには、いろいろな交渉をし、手続きを踏んでやったんだけど、誰かが使おうと思わない限り、スタートしない訳だから、ともかく使っちゃってくださいよ。どこであろうと。不法にではなく、合法的に使ってくださいよ。

小見
私たちは、2001 年に 1 年間限定で、空いていた消防本部庁舎と銀行を市から借りました。ベルリンとオランダから 5 人、国内から 6 人のアーティストを招いてレジデンスをやりました。不法占拠に近い状態で。ただ、行政の方々とも本当に協調をもちながら素晴らしい仕事ができたと思っています。そして、1 年やっただけで僕たちは退散をしたというか、そこをきれいに現状復帰して帰ってきました。企画書だ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

けのプレゼンテーションではなく、行為で示したつもりです。しかし、何の評価も得られることはありませんでした。ただ、いまになって反省していることは、なぜ居残らなかったのかということです。まさに、僕にとってのすごく負い目になっています。ここにも参加してくださったアーティストが何人かいますけれども、同じ失敗は繰り返したくないという思いで、今回のフォーラムに望んでいます。明日決議が出るという話がありましたので、何か爆弾発言しようかなとワクワクしていますが。加藤さんがおっしゃるとおり、やはり人間です。人がいて全ては始まります。家財を売り払っても、自分はアートに生きるんだとかこのまちのために生きるんだとか、そういう使命感を持った人たちが、まずやり始めてみることが大事なのだと思います。そして、そんな人たちが出てきました。弁天通りにも一軒。馬場川にも一軒。小さいアートスペースかもしれませんが、自分でやる人間が出てきました。いま一番前に座っている前島さんも、帰りに寄ってほしいのですが、オリオン通りの角、空いた八百屋さんと喫茶店と、アジア雑貨のお店３軒の空き店舗を借りて、障害を持つ子どもたちの作品展示を続けるつもりでいます。これは、すごく大きな一歩だと思っています。前橋は小さいかもしれないけど、始まっています。消防署でなくてもいいのです、小さいところから始まって、先ほど「隙間」というお話がありましたが、前橋ほど脇が甘くてスキマの多い街はなかなかありません。とにかく、そうっと砂糖にお水をたらして、ジワーっと浸透するように、ゆっくりと街を芸術化していくのが僕たちの企みです。ぜひ一緒にやりたいと思います。

若林

質問へのお答えですが、私はヨーロッパから物理的に持って帰りたいと思ったものはありません。というのは、視察した施設などをそっくりそのまま日本に持ってきても意味が無いと思うからです。ただ、やはり「アートに対する社会的な信頼」というのは、これはもう、うらやましいし、ぜひもって帰りたいなと思いました。ネクタイを締めている人も、アートを信用していた。フィンランドのフィスカルスという村に視察で行きました。ハサミが主力商品のフィスカルス社が、前面的に企業がバックアップして、アーティストが 100 人集っているアーティスト村をつくっています。もう企業メセナの枠を超えた活動なのですが、やはりネクタイを締めた会社の人たちが、アートを信用してお金を出している。また、国の助成の規模を見ても、やはりアートというものを信頼してお金を出していると感じました。社会におけるアートの信用度の高さというものは、形には見えないものだけれども、非常に持ち帰りたいなと思ったものです。そういったものが高まっていけば、皆で声にしていければ、前橋や今日参加していただいている方々の地域でも、何かこう、事が動き始めるのではないかなと思っています。

客席

いま、アーティストの話がたくさん出ているのですが、お話の中でも、企業の皆さんとか、それから世界遺産のところは、コミュニティ的に遺産の中にアートのいろんなものができるということで、皆さん始めから受け入れやすい体制なのかなと思いますけれども、こういうアートがまちに入ってきて、中小企業の皆さんであるとか、商店の方とかそういう方々が、実際にご自分の生活が、何らかの形で、自分の生活の中に変化が出てきているというような実感を持っているのを感じられたかどうかというのを少しお聞きしたいのですが。

甲斐

地域の人たちがそこの恩恵を受けているということは直接は感じられるケースは僕には無いです。ごめんなさい。

宮本

今回の視察前に、まち中に出て行く、たとえばマー

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ケットなどを回り、実際に「アート」がどれほど市民の方に浸透しているのかを見る時間を作ってほしいという提案をしました。しかしビチビチのスケジュールで、正にイギリスでパブに行けず、フランスでカフェに行けずというような状態でした。ですから分かりづらかった面はあります。

本日紹介しませんでしたが、ロンドンで地域住民が土地をロンドン市から買い上げ、文化芸術を絡めた再開発のまちづくりをしているスペースにもいってきました。苦労の過程や拡大していくプランなど、美しいストーリーであり、興味深かったのですが、それは本当に住民やアーティストのためになっているのか、それを街のかたから聞くような機会はありませんでした。ここに限らず、ツアー全体にわたって運営側の話が中心でしたので、アーティストなり市民がどう受け止めているのかというのは、よく掴めなかった。それは、私にとってすごいストレスでした。

若林

フィンランド、ドイツの住民が、変化をどう受け止めているかはあまり分かりませんでした。どう受けとめているのかを感じるまでには、かなりその地域のさまざまな人たちと話し込まないと、あるいは通わないと分からないと思うのですが、そこまでする時間は無くて、住民に手ごたがあるのかどうかはっきり言えないですね。

甲斐

一つ思い出しました。ダブリンの先ほど少しお伝えした、バリマンという地区の再開発によるアート・プロジェクトに、もともと住んでいる住人たちがさまざまなかたちで参加しています。いま立ち上がっている中に、例えばそのエリアにもともと住んでいる人たちの陶芸工房をつくりたいという要望を受け入れて、陶芸の施設をつくって、彼ら自身が自主的に運営している場所があったり、同じような版画工房もあります。あと、フランスのボーグなどのファッション誌で活躍しているフォトグラファーがプレゼンした企画が通って、進められているのですが、それは子どもたちにカメラを渡して、10 年間を記録するというプロジェクトです。その写真をフォトグラファーが定期的にやって来て、チェックし、ポスターをつくっているという作業をしています。実際、見ましたが、子どもたちの写真がものすごく良いんですが、そういったプロジェクトに、住民がかなりの量で参加しているというものもいくつもありました。ただそれは、プロジェクトの範囲ですがね。

若林

追加ですが、周りの地域などが、経済的に潤ってきたかという経済効果は分かりませんでしたが、帰ってきてからいろいろと調べていく中で、炭鉱の例で言えば、元炭鉱の労働夫がいまはボランティアでガイドツアーをやっていて、一時は気分的にも沈んでいたものが、今は自分たちの過去の仕事に非常に誇りを持って生き生きとガイドツアーをしているという話がありました。誇りという意味で見ると効果はあって、そういうことがすごく大事なのではないかなと、帰ってきてからですが思いました。

加藤

そろそろ時間ですが、最後お一人だけ。

客席

いま、最後に若林さんから出た、ツォルフェラインの件なのですが、一番最後に質問というよりも、先ほどから意見が出ていて、日本に持ち帰るものは何も無かったということなのですが、このツォルフェラインのエッセンの炭鉱では、かつて日本人がたくさん働いていました。1970 年代ぐらいの日本でエネルギー政策があった後ですけれども、かなり多くの日本人が三池炭鉱とか北海道を捨てて、外人労働者としてエッセンの炭鉱に行っていたという話しがあります。それから、群馬の人も労働者として出ていったというのも、以前私が住んでいた六合村（くにむら）

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

という場所ですが、その村から外人労働者として行っていたという話を聞いた記憶があります。結局文化というのは回りまわってまた自分のところに戻ってくる。そういうふうな物だと思います。だから、ここで話し合われていることは、確かに外国の方はアートを非常に重要視されていて、私たちはあまり重要視していないように思えるけれど、それは、おそらく表裏で繋がっていて、僕らも何かをそこでまたやっていかなくては同じ事がまたくりかえってくると、話を聞いていて思いました。だから一つのきっかけになっていけば、あの小見さんの消防署の例もありますし、そういうことも含めて前進していける会に、皆から意見でてくれば良いかなと思いました。

加藤

物理的にはもちかえれないとしても、今回持って帰るべきものはたくさんあるなと思って帰ってきました。それは、一つは率先してはじめればいいんだということです。それでも、何人かの関係者が知恵を絞ってシステムにしていくということです。どこかで、何らかの形で、動かすシステムというか仕組みをつくらないと、それはそれで消えてしまうから、そこはよほどいろんな人の力や知恵を結集して、何とか仕組みづくりをしていく。そういう例ばかりだったと思います。そして、最初に始めた人もそうだし、仕組みづくりに携わった人たちも、やはりアートに対する愛があるし、まちに対する信頼、何とかしなくちゃいけないという情熱の強さというのが、我々にとって非常に参考になるなと思いました。明日は前橋宣言というのがきっと出るでしょうが、「勝手に始めるぞ!」と言ってしまえば良いのじゃないのかなと思います。小見さんが消防署をやられたのは、残念ながら時代的に早すぎたのだと思います。それで、早すぎて悪いことじゃないのですが、非常に良いのですが、周りが充分理解できなかった。それが、こうした議論をしているところへ文化庁長官が出てこられるわけだし、県も市も後援をしてくれるわけですから、こういう議論をし、事を起こすことについてようやく、わずかかもしれませんが、理解を得られる時代になってきたのではないかと思います。小見さんは幸い長生きしてくれたから、まだ間に合ったのだけど、だいたい先駆者って死んじゃうんです、先に。それで、そのあとから皆、あの人がやったことは意味があったんじゃないかということになるんだけれども、生きているうちに何とか日の目を見させてあげたいと思います。そういうことで、このフォーラムのお三方の報告とコメントを頂いた小見さんに拍手を頂きたいと思います。ありがとうございました。

以上

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

Arts NPO Forum vol.3 in Maebashi

［第3回全国アートNPOフォーラム in 前橋・議事録　フォーラム３］

日　　時　2005年11月6日（日）　13:30－15:00

タイトル　アートNPOの活性化のために
－地域メセナの役割－

内　　容　フォーラム１、２、分科会を踏まえ、アートNPOの活動をより活発にするために必要なことは何か？
いま注目されている地域メセナについて、その意味と可能性を考えます。

分科会報告　山野　真悟｜ミュージアム・シティ・プロジェクト
斎藤　ちず｜NPO法人コンカリーニョ
下山　浩一｜NPO法人コミュニティアート・ふなばし
吉本　光宏｜ニッセイ基礎研究所
中村　武　｜NPO法人街・建築・文化再生集団

基調報告　若林　朋子｜社団法人企業メセナ協議会

モデレーター　伊藤　裕夫｜静岡文化芸術大学

会　　場　旧前橋オリオン座

伊藤

こんにちは。このフォーラムも最後のセッションになってきました。一時間半という短い時間ではありますが、アートNPOの活性化に向けて、2日間の議論を振り返りながら、特に地域メセナということを考えていきたいと思います。フォーラム1では、どちらかというと政府レベルの文化政策が語られていたと思います。それに対して、もっと民の力といいますか、市民がリードする形で、より具体的にはアートNPOとどのような連携が可能か、こういったことをフォーラム3で考えていきたいと思います。

昨日のフォーラムには、私も途中からしか参加できなかったので、フォーラム1等々でどのような議論をなさったのかが少しわからないのですが、河合長官から公立文化施設をアートNPOとの連携の中で活性化するということを、今後研究していきたいという提案があったと聞いております。公立文化施設が地域の文化拠点となりうるかどうかについては、私も疑問を持っていますが、このような前向きな提案があったということも踏まえて、今後の課題が出てくると思います。しかし、あくまでもアートNPOの活性化ということが、その場合には大きな条件ではないかと思います。

また、フォーラム2においては、ヨーロッパの都市の新生といいますか、再生計画の動きのなかで、不法占拠という言葉もでましたが、様々なアーティスト、市民たちが、イニシアティブをとって、地域の古い施設を活用し、それを拠点に新しい文化センターを作っていったという話がありました。その中で、とくに深く印象に残ったこととしまして、人々の記憶というものがそれらの大きな要素を占めていたということがあります。こういったことも印象的な話として残っておりました。今日の午前中は五つに分かれて地域フォーラムが開かれています。このセッションのなかでも、各地域フォーラムでどういったことが話し合われたかということを、時間が短いので簡単にいま現在抱えている課題というものを中心に報告していただこうかと思っております。

最初に、最近メセナ協議会から本が出されまして、麻屋デパートの一階にも置いてありますのでご覧になった方もおられると思いますが、この地域メセナがいま非常に面白いといいますか、様々な動きを示しております。こういった地域メセナの動きを少し報告していただいて、今日のアートNPOの問題について考えて行きたいと思っております。特に私自身も、メセナ協議会に昔関わっていた経験から考えてみますと、メセナというと、かつては大企業が行うものというイメージが非常に強かったわけですが、しかし大企業もこの間かなり熱心にメセナ活動をやっている企業と、そうでもない企業が大きく変わっていったような気がします。その中で、むしろ、地域において企業というのが何か、という定義も含めて問い直すような形でのまちづくり運動が盛んになってきています。こういったことをぜひ考えてみたいということで、先ほどの本を編集されました若林さんから、全国の動き、そして前橋の動き等々をご紹介していただき、問題提起していただければと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

若林

企業メセナ協議会の若林と申します。よろしくお願いいたします。

「地域メセナ」という言葉を聞いて、どのようなイメージを持たれるでしょうか。メセナというと、“企業の”芸術文化支援という印象が強いと思いますが、実は企業だけではなく、個人や国、行政など、メセナの主体はさまざまです。メセナの概念が広がるうちに、“企業による芸術文化支援・社会貢献”と認識されることが多くなったのですが、今日、地域メセナを考えるにあたっては、企業に限らず「地域においてアートを支援するあらゆる人たち」という大きなくくりで考えていきたいと思います。

先ほど伊藤さんと打合せした時に、このセッションのテーマ「地域メセナの役割を考える」も、フォーラム全体のテーマ「アートがまちにできること…/アートNPOによる都市再生を考える」も、要は「まち・

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

地域について考えること」なのではないかという話になりました。アサヒビールの加藤さんがどこかで話されていましたが、地域やまちについて考えるというのは、「その地域における最大の課題は何なのか」をあきらかにすることだと思います。そのまちはこれからも住み続けたいところなのか。人を招きたいところか。また、そこは移り住んでみたいところか。あるいは、住めないまでも、足繁く通ってみたいところだろうか。そういった魅力が、そのまちにあるでしょうか。

今回のフォーラムは、この「地域の魅力」というものをどうやって生み出せるのか考えようとしてきたのだと思います。そして、地域の魅力創出にメセナはどのような役割を果たせるのかというのが、この最終セッションの中身になるかと思います。つまり、地域メセナの役割とは、「地域の魅力を創出しようとしているアートに、まち・地域は何ができるのか」を考えること。今日の第1分科会のタイトルは「まちがアートにできること」でしたが、これが「地域メセナの役割とは何か」ということだと思います。

さて、ここでいう「地域」とは何か。まず住民が入ります。たとえば、前橋に住んでおられる方、群馬に住んでおられる方。市民という言葉でも言い換えられるかもしれません。そして、商店や商店街も含まれます。また、そこにある企業。それから、大学があれば学生、大学本部も含まれると思います。あとは、その地域の行政。そして、何かプロジェクトを起こそうとしている当事者の仲間たち。これらを全部ひっくるめて「地域」なんだと思います。

「まちがアートにできること」の“できること”が、メセナの手法に当たります。手法にはいくつかあります。まずは「自主企画・自主運営、主催」。メセナというと他者に対して何か行うイメージが強いですが、自分たちで何か行うことで地域の活性化を達成している人たちもいます。これもメセナです。一方で他者への支援というのがありますが、中でも大きいのが資金の支援です。いわゆる協賛や寄付、助成です。非資金支援と呼んでいるお金以外の支援―海外では“support in kind”、“in kind support”と言っているものがあります。たとえば、マンパワー、人手の提供ですね。それから、場所、空間提供。三つ目に製品、あるいはサービスの提供。四つ目に技術、ノウハウの提供。こういったお金ではない支援もメセナとしてできることです。

折角ですので、全国の話もさることながら、前橋における地域メセナの事例を挙げたいと思います。配布資料に赤い総合パンフレットが入っていたと思います。こういうものを手にすると、職業柄どうしても協賛とか協力というところをまず見てしまうのですが、今回は、協力企業がととても多かったんですね。知らない企業名も並んでいたので、これはきっと地元の企業だと思い、実行委員会の小見さんに、これはどういった企業なのか、どういうメセナをしているのかと尋ねました。すると、なんともユニークな地域メセナ、支援の方法だったのです。そこから報告したいと思います。

（スライドを投影）

まず、「前橋フォーラムにおける地域メセナその1」。協賛という形では、地元企業の連合体のサポートがあります。これは、具体的な名前をあげさせてもらいますと、社団法人企業メセナ群馬です。社団法人なので、いろいろな会社の連合体なのですが、前橋で15年前からアート活動、アーティストや芸術文化団体を支援しています。ここが本フォーラムに協賛をしています。それから、群馬に縁のある企業のサポート。これは、具体名をあげますと、富士重工業さんです。群馬県に5つの工場を持っているといったご縁で前橋フォーラムに支援をしてくれていると。最後に全国区企業。最近は、全国区の企業でも、各地のまちおこし、まちづくり、アートとまちを考えるようなプロジェクトなどを支援する例が以前に比べて非常に増えていると思います。具体名をあげますと、今回フォーラムを支援している全国区企業は、アサヒビール、資生堂、トヨタ自動車、NEC、松下電器産業。全国企業が、どこか特定の地域で行われているプロジェクトに支援するのは、なかなか社内

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

説得が難しいところです。しかし、地域活性が、自社のメセナ活動方針であったりすると、こういった前橋フォーラムにも協賛してくださる。

「前橋フォーラムにおける地域メセナその2」として、非資金支援事例を紹介します。これは大変興味深いので、終わったあとに是非関連するところを見ていただきたい。

今回は「技術・ノウハウの提供」が多いです。清掃技術、清掃ノウハウの提供ということについては、東朋産業という、群馬県前橋市を拠点に活動されている清掃業者、ビルメンテナンス業者です。今回の会場を使える状態にまで清掃しなければならないというときに、その清掃をメセナしてくださった。ガラス磨きとか、ワックスがけ、床掃除についてプロの技術員を派遣してくれて、実際に清掃をしてくれました。それから、カフェの支援。今回、麻屋デパートの一階にフォーラムの期間中2日間だけカフェをオープンしていますが、これを支援しているのが、やはり地元前橋に拠点を持っておられますスワンレストランです。これも他に類を見ないです。当日にカフェの運営を社員が手伝っておられます。ウェイターも、統括している方もスワンから来ていただいてます。ウェイトレスは、群馬県立女子大のボランティアです。そしてすばらしいのは、そのボランティアたちに、事前のワークショップでカフェのノウハウを教えているのです。カフェにおいて必要なこと、それから、実際にコーヒーや飲みものを入れるときの技術、サービスのノウハウを事前にワークショップで伝授されています。

「ディスプレイ」とありますが、たとえば今回のロゴマークの○九。これは、元々麻屋デパートで使っていたものなのですが、それを今回のために再生して、いろいろなところに貼ってあります。それらを支援しているのが、やはり地元に根ざしておられる前田スタジオです。ディスプレイ会社ですが、かなり前から現場に入って、こちらもワークショップ付きで支援されています。これも興味深い例です。

それから、フラワーアレンジメントと書いてありますが、地元の花屋さん、はな工房のメセナです。この会場や麻屋デパートの階段にフラワーアレンジメントがありますが、これも事前に学生ボランティアさんにワークショップをして一緒に作り当日を迎えるという形のメセナです。サイン、ロゴ、看板は、先ほどの前田スタジオさんが支援しておられます。それから、商品・サービスの提供ですが、まず最初に印刷をあげました。このチラシは、やはり地元前橋の上越印刷工業がメセナとして支援しておられます。清掃、カフェも一部「商品・サービスの提供」に当たるかと思います。それから「マンパワーの提供」。これは先ほどの清掃会社さんもそうですが、事前のワークショップに人、スタッフを提供するというのはマンパワーの提供です。当日の運営に関しても、カフェに入ってくださったり、前田スタジオも参加して、実際にいろいろと見てくださったりもしています。

「前橋フォーラムにおける地域メセナその3」で「場所の提供」とありますが。今回は空き店舗をフォーラム会場にするということで、空き店舗のオーナーさんが、フォーラムの趣旨を理解して快く提供をしてくださっています。それから、最後に「物品の貸与」とがありますが、麻屋デパートの2階に行かれた方は、不揃いの椅子がたくさん並んでいるのをご覧になったとおもいますが、その後ろに小さなカードが貼り付けてあったと思います。椅子を貸してくれた人の写真と名前、コメントが入っています。地元商店街の方々が今回椅子を貸し出してくださっているのです。「前橋で、こういうフォーラムがありますので、椅子を提供してほしい」というお知らせを、事前に商店街の回覧板で回してくださったのですが、学生ボランティアがリアカーを引いて集めに行ったところ、快く提供してくださいました。フォーラムが終了後一週間以内にお返しするという約束で借りています。各種機材の貸し出しもあります。カフェもスワンがコーヒーの機械などを貸してくださっています。

これは、前田スタジオ社員が、事前のワークショッ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

プで麻屋デパートの一階にロゴを貼る作業を学生たちに指導しているところです。麻屋デパートの２階がデコレーションされていますが、そのデコレーションもワークショップで技術支援してくださっています。これは、毎週日曜日の前橋実行委員会の企画会議。スワンレストランの担当者も、夜にもかかわらず足を運んで、前段階から参加してくださっています。

このように地域メセナはいろいろな方法があるのですが、地域メセナは待っていてもやって来ない。今回は、実行委員、ボランティアがきわめて見事に、熱心に、地域メセナを引き出していたというのが印象的です。地域メセナに必要なのは、それを引き出す役であり、その引き出し役がアートNPO、つなぎ手としての市民なのではないかと思います。フォーラム３のテーマは「アートNPOの活性化のための、地域メセナの役割」となっています。タイトルと少し矛盾するようですが、アートNPOの活性化のためには、実はアートNPOをサポートしてくれる地域メセナをNPO自ら引き出していかなければいけない。アートNPOの活性化と地域メセナの活性化は表裏一体なのではないでしょうか。

伊藤

どうもありがとうございました。メセナというとどうしても、資金援助というイメージがつい先走ってしまいますが、実は企業あるいは商店街等々が提供できるものは、無限にあって、今回の前橋フォーラムでもうまくそれを引き出してここまで持ってこれました。私は、いま浜松の大学の教員をしておりますが、浜松でもこうしたアートNPO的なプロジェクトをいくつか学生や地域の人たちとしかけようとしますが、どうしても、手伝っても良い、応援しても良いという企業がいましても、非常に手間のかかる仕事でありまして、こうしたことをきちんとやり遂げていくのは、大変な仕事じゃないかと思います。そういった意味で、今回は小見さんを中心とした実行委員会の方たちが、逆に言うと、地域の持っている一つの可能性というものを見事に引き出した例じゃないかなと思って昨日から感心して見ております。

さて今日の午前中の地域フォーラムでは、美術、演劇、舞台芸術などさまざまな分野で課題が検討されてきました。この地域フォーラムの内容を報告していただく中で、前橋フォーラムの運営以外にも見られるような課題、そして地域メセナに期待されるものは何か、あるいはその引き出し方をどうしたら良いか。こういったことを少し検討していきたいと思います。が、その前に午前中、他のフォーラムを聞きたかったけど聞けなかった人も多いんじゃないかと思いますので、一分科会五分間という非常に短い枠なのですが、どういったことを議論したかというよりも、どのようなことが課題として提起されたかということを中心にご紹介していただければと思います。それでは、地域フォーラム１のテーマ１、「アートがまちにできること、まちがアートにできること…」からお願いしたいと思います。

山野

午前中の地域フォーラム１のテーマ１、「アートがまちにできること、まちがアートにできること…」のモデレーターをやりました、山野でございます。今日は、三人のパネリストにお話頂きました。三者三様というか非常にバランスの良い組み合わせで、白川さんは地元のアーティストで、どちらかというと個人的な制作活動を続けてこられたのですが、最近は地元のNPOの若い方たちと一緒に、アートとまちを繋ぐという仕事をこれからやって行きたいというようなことをお話しされました。それから、山出淳也さんは、別府プロジェクトの代表です。彼も実はアーティストなのですが、この別府プロジェクト自体が彼のアート活動といいますか、彼の言い方では「アートプロジェクト」なのですが、アート活動の延長としてまちを巻き込んだプロジェクトでした。白川さんの場合は、アーティストと地域のNPOが連携して活動していく。山出さんの場合は、アーティストの活動の延長としてまちを巻き込んでいく。それ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

から、もう一人、山本さんは、コミュニティアート・ふなばしの方で、こちらはアーティストというよりも、つなぎ手の立場といいますか、アートと地域とをつなぐ活動をしておられるということで、全く対称的な活動のスタイルを紹介していただいたと思います。まちがアートにできることという、もう一つのテーマはそれほど突っ込んで話ができませんでした。この3人の方々の地域との繋がり方の必然性というか、アーティストが地域において活動していくときの必然性というのは議論できたかなと思います。

伊藤

一つお尋ねしたいのですが、実際にお三方の活動をしていくに当たって、まちとの間で、コンフリクトのようなものがおこったのかどうか。あるいは、実際にアートNPO等々が間に入って活動していくに当たって、そのアートNPOがカバーできたこととできなかったことというのは議論になったのですか？

山野

山出さんの場合でお話しなければならないのですが、彼は、海外生活が長くて、昨年大分に帰って来られた。帰ってこられたのですが、アートや現代美術に関心を持っている人がほとんど見当たらず、これを何とかしなくてはいけないというところから始めて、さらに、彼はいろんなアーティストを呼んでレジデンスのようなこともされているようなのですが、その招待するアーティストに対して、例えば別府のプロジェクトでは、アーティストがいままでやってきたことをそのまま持ってくるのではなくて、別府というところがどういうところかという地域性を考慮して欲しいと依頼しています。ということは、山本さんとは別の意味で、彼自身もつなぎ役、調整役です。ただ、アーティストと地域とがぶつかったりということ以上に彼がその間に挟まって調整をしているという姿があったのではないかと思いました。

伊藤

ありがとうございました。この辺の話は他のところでも共通する課題ではないかと思いますので、再び後で考えてみたいと思います。

次にテーマ2ですが、「都市の魅力は劇場が育む」というテーマで行いました。

斉藤

どうもこんにちは。札幌から来ました、NPO法人コンカリーニョの斉藤といいます。今回我々の分科会では、三人のパネリストを招きました。大阪からダンスボックスの大谷さん。昨日のフォーラム1でもお話いただきました。コンテンポラリーダンスを中核とした劇場の運営、プログラムを行っているところです。そして、シネマテーク高崎から茂木さん。こちらは、映画ですね。高崎は24万都市。映画館を昨年からされておられます。その前に映画祭を長く20年くらい続けられています。もうお一人、西田さんは、いま東村という群馬にある小さな2千人ぐらいの村で、国際サーカス村という学校をされていまして、こちらは、サーカスを切り口にいろいろと活動されていますが、劇場は持っておられません。まず、学校を作って人を育てたあと、欲しいのは、サーカスのできる劇場だということで活動なさっています。大谷さんもご自分たちで資金を集めて、昨日のお話にもありましたが、大阪の中で拠点を持たれて、高崎の茂木さんたちも、やはりご自分たちで資金を集めて、映画館を始めておられます。コミュニティシネマですね。今回は、分野とすると、ダンス、映画、サーカスですね。後は、私が演劇畑から、劇場の運営もしておりますので、四つジャンルが揃ったところでの話しでした。「都市の魅力は、劇場が育む!?」ということで、これは、ビックリマークとクエスチョンマーク両方ですね。育むんだろうか、育みたいな、育むにはどうしたら良いんだろう…みたいな事なんだと思います。私自身は、育むと信じてやっておりますが、もういきなり、西田さんの方から、「都市の魅力は劇場なんかが育まないよ。」という爆弾宣言

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

が出たところからスタートしたのですが、その中で、劇場が担うべき役割とか、できることという話だったのですが、その話があっちにもこっちにも飛んで、私は凄い大変だったんです。良い話題が出たから、この話をこの人に振って話をつなげようと思うと、そこからバーンとまた違う所に話が飛んでいくんですよね。それでも、一応まとめました。劇場の担うべき役割、あるいは、できることですね。実際にもうやってらっしゃったり、手がけていることもあります。一つ、アーティスト、あるいは文化を育てるインキュベーターとして、アートを中核としたコミュニティを作るということですね。これは得意ですよね、たぶん。このことが、アートというツールを使うことで、映画もダンスも演劇もサーカスも世界に繋がることができる。世界への窓口になることができる。ということを今日は、確信しました。もう一つ、芸術の多様性にアクセスができる環境を作っていくこと。これが、高崎なんかで映画館がシネコンだけしかなくなっていて、唯一、茂木さんたちの映画館があり、多様な映画を見る環境を、彼らが地域で担おうというのが元々の立ち上がりだったそうです。それはダンスボックスにしても、サーカス村にしてもそういうものを担おうとしています。そのために、もう当たり前になってきているように、劇場の中だけでやるのではなく、教育プログラムとして外に出て行き、あるいは、昨日の大谷さんの話にもありましたが、まち中でダンスを行うことによって、多面的にまちと関わっていくというのが、当たり前のことなんだなと、劇場というのはそういうものなのだなと私は思いました。その中で、点と点をつなぎ、人と人とがつながる。先ほど、そんなことに興味を持つ人が見つからなかったというアーティストの話がありましたが、そういう人たち同士が出会うことができる、つながることができる、それによってまちってどんどん本当に変わっていきます。変わっていくのですが、その中で、大谷さんがおっしゃってましたが、独自のアイデンティティ、まちのアイデンティティを文化を通じて担保していくという言い方が良いのじゃないかと思いました。その中で、課題に行きますと、一番最初に西田さんがそんなことは「できない。」とおっしゃったのですが、西田さんもできると思ってるのですよね。なぜ、西田さんが「できない。」と言ったのかというと、彼は、サーカスの方なので、有名なのはシルク・ド・ソレイユとかですね。すごく有名になりましたが、もっと前にカナダで彼らに会ったときに、彼らがやはりノンプロフィットオーガナイゼーションで活動していた。それで、それを見て、自分もNPO法人というのを立ち上げたのだけれども、カナダと日本とのNPOの状況の違いですよね。法制度や税金の違いが大きいと思いますが、そういうところの整備が全くされていない中で、いまNPOの活動が一つのブームなのではないかと。それに踊らされて、終わっちゃダメで、そこのところを、これはここだけの話じゃないと思いますが、詰めていかなければいけないというのは大きな課題だと思いました。もう一つですね、アートカウンシルの話が出ました。大谷さんがおっしゃって下さったのですが、評価と一緒に資金も回せるような組織なり、何なりが必要なのではないかという話がでました。

アートの発想力、芸術の力を使って、そこで提案をしていく。その提案を創造都市としての計画の段階からきちんと盛り込むようなそういう話し合いの場、あるいはどういう仕組みが必要なのかは分からないけれども、そういうものが必要なのだというふうに思います。そういう提案が必要だということはわかっていても、その仕組みがいまはまだうまくできていないんですね。それで、単純に即効性のある経済効果としての観光が求められたり、活性化といっても人がたくさん来るということだけを狙っていただけでは、たぶん我々はダメなのだろうと。昨日のフォーラム2の最後に繋がるのですが、芸術というものの力を、私たちも含めてどうやって信じていくか。どうやって形にしていくかということが問われているのではないかと思います。ここまでで一応終わりますが、ちょっとおまけです。公共ホールのことにつ

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

いて、会場から質問がありました。大谷さんのダンスボックスを拠点継続するにあたって大変な問題に直面していることにからんで、公共ホールを使って、大谷さんがやったらいかがでしょうかというようなご意見がありました。そのときに大谷さんが印象的なことをおっしゃっていて、私も同じように思うのですが、ハコとして公共ホールに入るのは良い事のように思うのですが、やはりまちの人たちと一緒に何年かしていると、1年、2年…と少しずつ関係ができてくるんですよね。これから、まだ何かがやれるかもしれない。少しずつ、何かができているような手ごたえを感じているときに、そのまちを捨てるということはやはりできないし、すぐにそういうふうに乗り換えるということはできない。二号店か三号店を考えたら良いなと思いました。以上です。

伊藤

ありがとうございました。私もテーマ2に参加していたので、すごく議論が錯綜したのをうまくまとめられたのではないかなと思いました。テーマ2でも、議論の中でいくつかの問題があったと思いますが、特に行政とのかかわりの問題で、アートカウンシル的な機関への期待が強く出てきたと思います。それと芸術の社会性みたいなもの、社会的な力というものが期待されるのですが、ともすれば、それが観光とか、非常に一面的なものにいくことに対して、もう少しコミュニティや、あるいは非常に大きなアイデンティティを作ってくという、そういった問題が重要ではないかということが議論されていたのではないかと思います。

では次にテーマ3、ユースセッションです。「No Art, No Life」。特に若い人たちがいま、どのようなことを感じているのか。いくつか課題が出されたのではないかと期待しております。

下山

こんにちは。テーマ3のモデレーターを勤めさせていただきました、コミュニティアート・ふなばしの下山と申します。テーマ3は、アーケードの中の路上でやっておりました。風がビュービュー通るし、アーケードの上から音楽が降り注ぎ、やっているとバイクが通り、トラックが通りと凄いところで、これからのアートNPOは温室の中ではなくてこういう所でやっていかなくてはならないんだなと、思わず将来を暗示させるようなセッションだったと思います。

私は、小さいころ前橋に住んでおりました。前橋というのは、駅を降りるととても立派な欅並木が通った立派なまちというイメージがありました。この分科会の準備で1週間前に下見に来たのですが、驚きました。駅を降りたら、いきなりマツキヨと吉牛と、千円で髪が切れる床屋があって、なんだか、千葉でいうと常磐線の快速が止まらない駅のよう。本当に県庁所在地の駅なのだろうか？という感じで、従来型の都市計画の産物がコレか!? という印象でした。まち中の人がまばらな所を歩いてきましたら、燦然と輝く旧麻屋デパートのdepARTに着きまして、なんだか凄いストーリーだなと思って参りました。テーマ3は、パネリストとして、NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウの小沢さん。それから、前橋で活動してらっしゃるアーティストの高橋綾さん、前島芳隆さん、茂木康一さんと三人のアーティストをお迎えして行いました。参加者は、女子高生から企業メセナ協議会の方、前橋県庁の方から、まちを歩いてきてくださったという奥様までいらっしゃいました。パネリストの皆様方からは、「前橋には非常に優れたアーティストがたくさんいらっしゃる。かなり息の長い活動をされているし、アーティストの自主的な活動はたくさんあるのだけれど、それをつないでいく、お客様とつなぐ、行政とつなぐ、企業メセナのような企業の方とつなぐというようなことをする人が少ない」というようなお話がありました。これは、どこの地域でも同じだと思います。

隣にいらっしゃる、山本さんが前橋で旧麻屋デパートをさらに直進していったところの右手に、昨日、アートカフェ「Yaman's」をオープンされました。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

26歳の山本さんが開かれたアートカフェ。この拠点を活かして、前橋のアートシーンをどうやって盛り上げていったら良いのかという話を後半グループワークスタイルで、行いました。

山本
今回、アートNPOフォーラムをきっかけに、昨日オープンしましたヤーマンズというお店の山本と申します。今後は、地元のアーティストの人たちと、まちをつないで、人と人とをつなげられることができるような、前橋初の情報発信基地として機能できたらと思っております。ぜひ、このフォーラム後には、足を運んで頂けたら嬉しいと思います。よろしくお願いします。

下山
ありがとうございます。小見さんと山本さんという非常に優れた人材を中心に前橋が盛り上がって行っていただきたいと思いますが、ぜひ拍手だけでなく、フォーラムは早い時間に終わりますので、終了後は山本さんのお店に行ってコーヒーを飲んであげてください。

伊藤
他に課題等々で出たことはありますか代表的なことを四つぐらい上げてください。

下山
代表的なのは、アーティストがたくさんいらっしゃるのですが、個人プレイが非常に多いということがありました。このフォーラムはアーティストさんが多かったので、他のコーディネーターの方中心のフォーラムとはお話が若干違いました。あとは、さまざまなアーティストランのアート拠点というのは、これまでに群馬県でもたくさん事例があるのですが、やはり、そこがアーティストがやっているということで、活動はしっかりしているが、資金や人脈の広がりというのがうまくつくることができなかったのではないかというようなことがありました。アートマネージメントをやってみたいというような学生さんやアーティストとしてやって行きたいという学生さんがたくさんいるのですが、卒業後の進路のこと、自立、自活ということを考えると非常に先行きが暗いのであきらめるしかないというようなお話もありました。

伊藤
最後の話は、私自身も非常に頭が痛い問題で、今日も学生が来ているので、後で学生になんと説明したら良いかという問題はあるのですが、山本さんがやっているアートカフェ等々が、二番目に上げられたアートの拠点といいますか、個人プレイの多いアーティストたちがどこかで出会ってつながって行くための場がないとなかなかうまく行かないという意味では、大いに期待していますので頑張っていただければと思います。どうもありがとうございました。
やや時間がオーバーしていますが、次にテーマ4です。テーマ4は「創造都市の可能性 – 横浜のチャレンジの先にあるものは –」ということでお願いいたします。

吉本
テーマ4のモデレーターをさせていただいた吉本です。テーマ4では、今回のフォーラムの全体のテーマにもなっている「創造都市」ということで、あちこちで話題になる横浜のケースをちゃんと勉強しようと、横浜市から仲原さんに来ていただきました。それから、群馬県の出納長をされています後藤さん、横浜とアサヒビールの両方の財団を兼務する加藤さんにも出ていただき、三人のパネリストでテーマ4の分科会を行いました。最初に仲原さんから横浜のチャレンジについて説明をしていただいたのですが、横浜の歴史的な背景からも含めて報告をしていただきました。色々と検討しているなかで、「クリエイティブシティ」というコンセプトが出てきて、それを行政が一つのスローガンとしてちゃんと掲げるという

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ことで、目標が明確になるということをおっしゃっていました。ただ、スローガンを掲げるのは、やろうと思えばできるのですが、それをちゃんと分かってもらう努力がすごく大変です。行政の中でもすごく大変だし、実際に地域の中で分かってもらうのも大変だということで、そういう意味で、BankART という一つの実験プロジェクトを始めたわけですが、「こういうことなのか」と実際眼に見える形で何かひとつでも実現することが非常に重要だというお話しをされていたかと思います。

後半で出た議論なのですが、例えば、BankART というスペースは、いまは NPO に託して運営しているのですが、行政が直接運営した場合と、何が一番違うかという質問をしたところ、仲原さんが非常に印象的なことをおっしゃいました。行政では絶対にできないことで NPO だからできていることがあるというのです。それは、何かというと、徹底的な「えこひいき」ができるというふうに仲原さんがおっしゃっていました。仲原さんはえこひいきという表現をしたのですが、行政では、やはり公平の原理に従わなければならないということですね。結局それは中に入っている NPO が市から BankART に託されたミッションがあるのですが、それを達成するためのいろんな事業が市民や芸術団体の側から提案があります。公が直接関わっていると、抽選とか公平とかいうことになってしまうところを、NPO が市から託されたミッションを達成するために、「えこひいき」つまりある価値に基づいて取捨選択をして、一番効率的なものをやっているということだと解釈できるかと思います。それが非常に印象的なことでした。

それから、群馬県は、実は桐生市には一店一作家運動といって、一つのお店で桐生にしかないオリジナルなもの、それは、商品でも良いし、芸術作品でも良いというような活動をすでにされていたり、桐生にはご存知の方もいらっしゃると思いますが、有麟館という日本のオルタナティブスペースの原点のようなスペースもありますから、クリエイティブシティとなり得るような種は色々あるということでした。前橋も生糸で栄えたまちで、ヨーロッパに輸出された生糸の名前そのものが「マエバシ」というブランドだったということも話として出ました。

また、地域メセナというテーマとも関係すると思いますが、市民が関わっているということで、加藤さんに、アサヒビールでやってらっしゃるアサヒアートフェスティバルの話をしていただきました。その中でも淡路島で市民参加のプロジェクトを行ったところ、兵庫県がそのプロジェクトの意義というのを認めて県がそれを助成しようという動きになったというお話が印象的でした。これらは、例えばメセナで芸術団体を支援するという形ではなくて、おそらく市民の案を企業メセナで支援することで、市民が動いているから行政も支援に乗り出したということが非常に大きいと思います。メセナの一つの大きな目標の一つに、政策誘導というのがあります。国とか地方自治体ができない、分からないけれども、企業がそれを支援することでより大きな政策を動かして行くということです。僕は、アサヒの加藤さんの話はそういうことの典型かなと思いました。

最後に、創造都市の最終的なゴールというか、どんな事が起こったら良いのかという質問が会場の県職員の方から出たのですが、それは結局そのまちに住んでみたいと思うか、住み続けたいと思うかということだと思います。まさしく先ほど若林さんがプレゼンされていた、それが一番大きなことだろうと思います。そのときに、ブランディングという話が出まして、アートで前橋のブランド価値を高めるということで、その中に前橋には、味噌漬けの有名なたむらやさんがあるとか、片原饅頭という大変なブランドのお饅頭やさんがあったそうなのですが、残念ながらそこは操業を停止されたそうなのです。そういった食文化も地域のブランド化につながって行くのではないかということで、ブランド力を高めていくというのが創造都市のひとつの大きな最終ゴールかなという話がでました。以上簡単ですが終わります。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

伊藤

どうもありがとうございます。特にメセナに関する話で、先ほど若林さんが上げていなかった項目の一つに政策提案といいますか、政策誘導という要素。これもすごく大きなポイントではないかなと思います。後で少し検討して行きたいと思います。それでは、最後にテーマ５です。テーマ５は、「前橋中心市街地の現状を見る」。実際に歩いて、さまざまな問題が発見されたのではないかと思いますが、よろしくお願いいたします。

中村

私たちは、NPO 法人街・建築・文化再生集団と申します。群馬を中心に、群馬県だけではなく、古いまちとか古い建物、長屋とか、そういうところに住み続けるまちを作ろうと、若い人からお年寄りまで、安心して暮らせるまちというのは、やはり古いものを大事にするという、古いものを大事にするということはお年寄りを大事にするということにつながると思うのですが、そういうまちにしようという活動をしている団体です。今日は、コーディネーターが前橋工科大学の星、星というのは私どもの理事長ですが、それと松井先生が案内をされたのですが、たまたま学生の用事で早く帰られまして、私が代理という形で報告させて頂きます。今日の報告と感想は、一緒に歩いて頂いた遠藤さんにお願いしたいと思います。

それで、まだ前橋を歩かれていない方もいらっしゃると思いますが、今日の私たちのコースは、先ほどの麻屋さんから出発しましてアーケードを南に下りました。アーケードを少し下ったところに、昔、吉野トという呉服屋さんがありました。いまは別な方が衣料品店をやられているのですが、そこの裏に、一つ発見がありました。私も前橋はじめ群馬県内でまち歩きを結構してるのですが、それでもまだ驚きというか宝物が見つかるんですね。その旧吉野トさんのお店から入って裏の住まいに行きましたら、土蔵と、戦後の建築といわれていますが立派なお風呂場とがありました。私は歴史的建造物の保存運動に携わっています。国の文化財保護制度の中に登録文化財という制度がありますが、それにすぐしても良いようなものがまだ前橋のまちの中に残っていました。それから、アーケードの上にあがりまして、少し視点を変え、目線を変えるとどういうものが見えるのかということをしました。ただ高い建物の窓から見るのではなく、アーケードの上のキャットウォークという危なっかしい通路のところを歩きました。そうすると、いろんなところが見えまして、そこが一番大好評でした。普段は眼にできないところに、何かのアートシーンの使えるような場所とか…。もし何かの機会がありましたら、前橋だけでなく、どこにもアーケードはあると思うのですが、あの上には必ず上れるようになっています。その上のペントハウスとか、使われていない部分が非常に多くあります。東京と違って、前橋とか高崎とか地方都市の場合は、やはり平面都市なんですよね。二階三階を使うつもりで建てても、結局使えるのは一階だけなんですよね。そうすると二階、三階が空いていて、これを使えるといいなというところが非常に多く見つかると思います。それから、アーケードを降り、中心街を東に向かい、路地裏などを見まして、前橋が戦後からどんどん変わって行くった風景を皆さんに見ていただきました。参加者の感想では、昭和 40 年代がストップして、それからずっと停滞しているまちだなという印象が多かったと思います。その印象も、まだまだ宝があるねという方と、もうこれはどうして良いか分からないという方といらっしゃっいました。

できれば、地元の方にいっぱい参加していただきたかったと思います。全国からんいろいろな方々がお見えになって、アーティストもお見えになって、前橋もまだこんなに元気にやれるんだよという皆さんの意見を地元の方に聞かせたいと思いました。

そんなことで、ぶらぶらと約二時間歩きました。私も見えなかった事を改めて見せて頂いたところもありますし、他のところから来られた方の印象が私た

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ちにとっても新鮮な印象がありまして、やっている私自身も楽しませて頂きました。報告に関しては、遠藤さんにお願いしたいと思います。

それから、今回のフォーラムを聞いていまして、行政とNPOとの関係という話はよく出るのですが、行政とではなくて、NPOと市民。NPOは一体どっちを向いているのだということがなかなか聞けません。企業メセナの問題もありますが、NPOに支援するということは結局市民に支援するということだと思うんですね。テーマ5の報告の変わりに私の勝手な話をさせていただいて非常に申し訳ないのですが、そんなようなところのご意見を伺いたいというところがあります。

遠藤

今日は、東京の向島から参加させて頂いたのですが、本当に初めて前橋に来まして、とても整備されていまして、とてもいろんな見所がいっぱいあるのに人がいないということにビックリしました。昨日の夜から、参加させていただきまして、「踊りに行くぜ!」では、空き店舗でいろんなダンスを見せて頂きまして、ものすごく良いなと思いました。すごく参加者が多かったんですよね。参加者もあっという間に移動できるぐらいに空いている商店街ってすごいなと、そういう意味ではものすごく便利で、いまがチャンスなんじゃないかなと思いました。今日歩かしてもらいましたら、いろんなところにまだまだそういうイベントができそうなところがたくさんありまして、今回のような企画が何度も繰り返されてここがちょっとした観光名所になることで商店街も活性化するという相乗効果が出るのではないかと思いながら歩かせていただきました。

ありがとうございました。

伊藤

歩かれて、他にもう少し何か感じられたことはありますか？

遠藤

広瀬川とかも昨日の夜にはライトアップされていて、思わず学生さんに聞いたんですが、ここの街って税金が高いんじゃない？と思うぐらい整備にすごくお金を使われていると思いますね。商店街の中もそうでしたし、本当にこれがこのままになるのはもったいないと思いました。

伊藤

向島でもアートプロジェクトが行われていますよね。また別の機会にぜひお話しを聞かせていただければと思います。

いま、五つの午前中の地域フォーラムからの報告がありました。この問題を含めて、ここでまとめの議論をするというのは非常に難しいので、少し2、3に論点を絞って考えてみたいと思います。まず、一つは若林さんの提案の中で、「まちとは」「地域とは」という問題があったと思います。このアートNPOフォーラムの課題の中に、一方でアートというものがどれだけ多くの人たちとのつながりを取り戻していくのかという観点がありつつ、他方でアートの現場としてのまち、地域、コミュニティといったものの活性化、あるいは、いままでとは違った形で人と人との結びつきを作っていくようなことを期待している。まちというのが、今回は前橋というのがモデルになっておりますが、例えば私が参加しましたテーマ2におきましても、例えば大阪という人口二百万の都市や札幌という百数十万の都市、前橋、高崎という両方合わせて50万の都市。あるいは、もっと小さな東村という村の話。まち、地域といいましても規模や歴史的条件も違う中で、まちとは何かという問題。この話が一つ重要なキーポイントかなという気がしました。それともう一つは、そういう状況の中で、地域メセナの可能性。これも、若林さんから非常にたくさんの可能性を上げていただきましたし、吉本さんのお話の中で、政策誘導という、民間からこれから先の文化振興、まちづくりについて、その経験をもっと普遍化していく。そして、それを政策

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

に反映させて行くようなことがあってもいいじゃないかというような地域メセナの可能性というのが出されました。そして最後に若林さんは、可能性としてあっても引き出さないと見えてこない。それを引き出すためにアートNPOというのが再び必要になってくると。従って、アートNPOと地域メセナというのはお互いにお互いを必要としているような関係にあるのではないかというような話になってきたかと思います。この辺を少し、具体的に見て行くために、会場の皆さんの中で、いまの論点に関わる形で発言があればお願いしたいと思います。特に、地域メセナというのは大企業のメセナだけではなく、同じまちを構成する人の中で、住民や、お店で商いをなさっておられる方たち、そういった人たちが地域メセナの主役じゃないか思いますが、そういった人たちの連携というものを考えるに当たって、例えば具体的に自分たちの地域では、こういった問題、課題があって、こういうふうに解決してきたということ。あるいは、企業、商店の方で実際に今回関わって、どうであったか。こういった発言があればちょっとお願いしたいと思います。

客席

芦屋市から参りました。皆さんもご存知かと思いますが、芦屋市立美術博物館が、芦屋市というのが本来裕福な都市ということで知られていますが、震災以降は財政的に非常に苦しい情勢になりまして、美術博物館以下いくつかの施設については、民間に売却するか廃館ということが決まりました。今日お話しを聞いていまして、私どもは、実はあまりアートのことには詳しくない、そこに住んでいる市民なのですが、我々市民としてもこういった財産というのは失いたくないということで、NPOを作りまして、当初は指定管理者制度に出されるというお話でしたので、なんとか美術館を受託したいといろいろと活動を続けてまいりまして、何とか直営ということで、いまは業務委託をする方向で話しが進んでおります。それがちょうど、11月3日で、実は、その疲れを引きずりながらここへも来ております。阪神間ナベットミュゼという小さなマイクロバスを、阪神間クラブという団体と一緒に共済で走らせまして、阪神西宮と阪神芦屋の間にですね、西宮大谷記念美術館とか、白鹿記念酒造博物館とかいろんな小さな美術館があります。こういったところをバスで走らせて、しかも、評論家の方とか、洋菓子の美味しい地域ですので、ケーキに詳しい方ですとかそういった方がガイドをしながら運行すると。こういうバスを走らせることに致しまして、さらに美術館の入館者数を増やして行くというような取り組みをしました。28人乗りのバスを11便片方向から出しましたが、朝の便を除いて満杯で、一応1200人ぐらいの申し込みがあったということです。詳しくは、パンフレットを持ってきております。比較的、昨日も今日もアーティストの方からのいろいろな問題的が多かったと思うのですが、何か、こういうふうに市民の側も、アートに触れたい、接したい、なくしたくないという思いも強くありますので、そういった市民の側からの動きがでてくればうまくいくのかなと思いました。私たちの団体の中でもよく話をするのですが、専門家が実は一人もいません。私は実は行政職員で、色々と行政から予算書とか条例改正とか色々と宿題が出ますと、私が全部書いて理事長に持たせると。あとは、高額所得者の方も多いので、例えば資産の運用を一定お任せしてもいいという方については、証券会社さんと一緒にタイアップしまして、金融商品を作っていただいて、そこから得られる利益については、NPOの活動に任せても良いというようなこともやっております。一つ感じましたのは、そういえば、アーティストの方が、私たちの団体にはいないのだなと。アートに触れたいという強い気持ちは持っていますので、逆にそういったアーティストの方と組んでさらにアートを中核とした創造都市というのができればなとおもっております。

伊藤

どうもありがとうございます。この話は、私も気に

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

なっているテーマで、確か昨日の質問のなかで、市民たちがそういった活動をどう見ているのかという話がありました。また、以前加藤さんがドキュメント2000の中で書かれていましたが、NPOに熱心な人は、あんまりアートに関心がなくて、アートに関心のある人は、どちらかというと、従来型のアート鑑賞の仕方、オペラとかバレエを見に行ったり、自分たちがお稽古事を行っている人たちが多くて、その両者のつながりがなかなか悪いということを指摘されていました。それから、5年経っていますので、ずいぶん状況は変化してきているのではないかと思いますし、芦屋の場合は、市民が中心に、非常に良い形で進んでいると思いますが、必ずしもそうじゃなくて、アーティスト不在のカッコつきアートNPO。それから、アーティスト中心のアートNPOの問題というのもあると思いますが、だれがそれを繋ぐのか。このときにたぶん地域メセナというものが何か一つ可能性があるのではないかと思いますが、良いお話じゃなかったかと思います。他に、場内のご発言、特に前橋の方で今回協力なさって何か感じられたことがある方はおられませんか？
あるいは、前橋の方だとかえって発言しにくいかもしれません。今日お見えのかたで、企業のメセナを担当されている方、あるいは、メセナではないが企業関係で地域でさまざまな文化関係に関わっているかたがおられましたらぜひご発言をお願いいたします。どうでしょうか？

客席

意見というよりも、質問をよろしいでしょうか？
私は前橋の市民に合併によってなった者ですが、この行事と市民の人たちとの準備段階において絡み合わせというか、もう少し地域の人が来れるようなことをしないともったいないなというのが率直な感想なのですが、この全国組織の企画と、地域との絡み合わせというものをどういうような段階でやったのかということ。市民の方が少ないというのが私も残念に思うところがあるので、準備段階におけることと、この会自体がこれからも発展して欲しいと思いますので、その辺を少しお聞きしたいのですが…。要するに、この地域の自治体とこの組織との関連というか…。どうも地元といいながらももう一歩分からない部分もありまして、よろしくお願いいたします。

伊藤

このフォーラム自体は、一応全国組織であるアートNPOリンクが全体的なマネジメントをしていますが、実際に今回のフォーラムを開いたのは、前橋の地元で活動しているアートNPO. 小見さんを始めとする方たちが地域の人たちとかなり協力をして作り上げてきたと思います。ただ、市民というのは、非常に概念が広くって、一般の住民の方すべてを巻き込んで、また行政のように全ての市民を対象にという形ではなかなかNPO活動は進みませんし、ある面においては、呼びかけに応じて集ってきた有志が中心にならざるを得ないと思っています。その点、もちろん広報等々でどこまで呼びかけができたかという問題はあると思いますが、逆にこういった機会の中から、次へのステップに繋がっていく。これが終着点ではなく、出発点であると考えて行きますと、いまお集まりになった方が今日の課題をどういった形で次に広げていくことが可能になっていくのかということが重要になってくるのかなと思いますが、この辺については説明していると時間が経ちますから、終わった後にアートNPOリンクの総会がこの後開かれますし、前半にはフリーディスカッションもあると思いますので、今後市民を巻き込んだアートNPOフォーラムをどういった形で継続発展させていくのか、行政との関係、企業との関係、この運動自体の進め方も常に問われてくることになります。これは、このフォーラムでやりますとあまりにも大きなテーマになりますので、一応、私のほうのこういった答えで済まさせていただきたいと思います。

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

客席

先ほどの私の発言で、地域の住民が見えないという話の真意と言いますか、いまおっしゃったとおり、市民を巻き込んでするというのは非常に難しい話で、現実に私ども市民を巻き込んでとは言いながらも、なかなか興味をもたれないという段階だと思います。ただ、私が言いたかったのは、その NPO 法人だけでなく、非営利活動をしている NPO セクターがどっちを向くべきなのかという話をお聞きしたかったのです。昨日のご発言からずっと聞いておりますと、NPO が行政に自分たちの活動をどう認めさせようかとか、どういう関係を作ろうかというお話はいっぱいされていましたが、市民と NPO はどうなのかというところです。実際に市民の中で活動をされている方ばかりだと思いますが、その辺がちょっと見えなかったので、先ほど発言させて頂きました。NPO は、行政のほうに向いているわけではなくて、市民のほうに向かなくてはいけないと。行政と市民の間のつなぎ役が NPO ではないというふうに私は思っていますので、言わせていただいたところがあります。昨日の調査報告も含めて、ヨーロッパから持ってくるものは何も無かったというお話をされていましたが、そんなことは、もう皆さん分かっていることでして、行かれた方がそれを認識していなかっただけの話だと思います。ですから、今度は次に行く人に、やはりそれを引き継いで行かないと、また次の人が同じことをやってしまうという話になりますし、政策提言の話もどっちに向かって政策提言しているのかという話になります。そういうところを少し考えていかないと、アート NPO は、アート NPO じゃなくてアート協同組合のほうが良いんじゃないかというように私は思いました。市民社会を作って行くための NPO だと思いますので、市民社会を成熟させるために私たちは何をしなければいけないのかというあたりを、議論して頂きたいなと思いました。

伊藤

これは非常に重要な問題提起だと思いますが、この地域メセナに期待する話の中で、ともすれば NPO の活動が行政とのかかわりの中で論じられているケースが多い。あるいは、行政からの資金を当てにしているケースが増えてきている。これは、アートだけじゃなくて、他の NPO の分野においても、業務委託等々なんかが非常に現在の NPO の活動の中の大きな財源になってきている問題も含め、市民との関係が非常に希薄になっているのではないかという指摘は多々聞くことが多いのではないかと思います。そんな中で、地域メセナと考えたときに、先ほどの芦屋の場合には行政マンの方が NPO の一員として活動されていますから、行政が入ってきても構わないわけなのですし、企業人もいれば、市民もいたりと、NPO はさまざまな人がネットワークを作っている組織ですし、そこが、一つのポイントではないかなと思います。地域メセナという形でさまざまな企業がそういうアートプロジェクトに様々なリソースを提供することによって、行政ではなくて同じ市民社会のパートナーとしての関係を作っているというふうにも思えるのですが、若林さん、どうでしょうか？

若林

いま発言してくださった方が、普段は行政でお仕事をされていても、地域の当事者としては、個人として参加されているのは非常に興味深いと思います。NPO というのは、そういう側面がある。地域の当事者として自分が別の面を持てる。普段は仕事として役所で働いていても、個人として、NPO として地域の活性化に関われるというのは、NPO の大きな可能性だと思いました。

さきほどの、参加者に前橋の方が少ないというご指摘ですが、このフォーラムに地域の方々がたくさん参加されるというのは難しく、確かに少ないかもしれない。しかし、実行委員から興味深いことを聞きました。今回の実行委員には地域の方が非常にたくさん入っている。群馬県立女子大の学生さんも 32 人も参加しています。普段は仕事をしているけれども、週末に会場の椅子を集めた時のリアカー引き、照明

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

など、本当にいろんな地元の方が裏方として手伝っておられる。そのために受講者として参加する人が少なくなってしまっているのが心配だ、なんていう声も聞かれました。今日はお店があって来られないと思いますが、商店の方も椅子を提供する等さまざまな形で関わっておられるので、総合的にみると、フォーラムに関わっている地元人の数は、例年より多いのではないかと思っています。

行政の告知広報協力の話も出ていましたが、今回は行政の方もコピーからなにからサポートしてくださっていましたし、地域広報誌にもたくさん載せていただいています。もっともっと多くの人に呼びかけるためには、これも地域メセナの一つに入るのかもしれませんが、やはりぜひとも地元のマスコミに協力していただきたい。アートの紙面は極めて少ないのですが、こういったフォーラムがどんな意図で開催されて、どういう人に集ってほしいのかを、紙面をとって伝えていただきたいです。こういった活動を日ごろから取り上げて欲しいのです。

それから、ちょっと付け加えさせていただいてもよいでしょうか。先ほど「昨日“ヨーロッパから持って帰ってくるものは何も無かった”という発言があった」とありました。言ったのは私なのですが、少し舌足らずなところがあったかと思います。言いたかったのは、“物理的に”持って帰りたいと思うものは無かったということです。例えば、ワイシャツ工場が文化施設になったあの立派なスペースや、ツォルフェライン炭鉱の立派な文化施設。そういったものをうらやましがって日本でそっくりなものをつくっても意味がない。そういうことよりも、考え方のような目には見えないもの、アートに対する社会の信頼、そういったものを私は持ち帰りたかったというのが真意です。

伊藤

どうもありがとうございました。本当は、若林さんに先ほどの地域フォーラムへのコメントをしてもらおうと思っていたのですが、時間がなくなってきましたので、最後に一言だけまとめをしたいと思います。今回お話しを聞いて、最後の地域フォーラムの報告、あるいはいまのいくつかの質問を聞く中で、やはりアートと地域あるいは、アートと市民の距離というのがまだあまり埋まっていないなというのが率直な印象です。しかし、この三年間、さまざまなプロジェクトが進む中で、個々のプロジェクトや現場ではさまざまな出会いが行われてきたというのも非常に大きな事実だと思います。しかし、現代美術をなかなか地域で理解してもらえない。そのためにアーティストとしての苦労があったとか、あるいはNPOのほうも決してそういうことはないのですが、自分たちが活動するときにともすれば行政、あるいは企業のほうを向いて実際の市民とのつながりというのがなかなか見えてこない。実際の市民というのは多様であり、つかみどころのない存在であり、市民を最大公約数で捕らえることで失敗してきた行政と同じことをNPOも繰り返したくない、こういった考え方も当然あるのであって、市民という捉え方にあまりにこだわりすぎて行くのもどうかという気もしないでもないです。ただ、その距離感というのは感じずにはいれません。しかし、その時にそのクッション役として考えられるのが、例えばアートプロジェクトを受け止めて行く商店街であったり、それを支援する企業であったり、現場現場ではさまざまな出会いがあって、そこではノウハウの交換だとかパートナーとしての活動だとかいくつかのコラボレーションが進んでいたのではないかと思います。おそらく、この経験というのが、このフォーラムで話し合われ、共有されていく。これが、今年が3回目ですが、このフォーラムが続いて行くのならば、そして記録として何らかの形で繋がっていくのならば、何らかの大きな成果につながって行くのではないかなと思います。

もう一つ、昨日から話していて、非常に印象的だったのが、イニシアティブをだれが取るかということです。最初に行動を起こすということがかなり重要であると。これが多分、これから先、もう一つしな

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。

ければならない課題だとおもっています。私自身の自己反省も含めて考えますと、私は大学の教員になってしまったことでフットワークが非常に悪くなってしまったなというのが自分自身の数年間の反省です。何かコトを起こそうとしたときに、ある程度その事柄や地域に没入していくような環境がないと難しい。昨日から命がけとかさまざまなアートNPOをやってこられた方たち、それをひっぱってこられた方たちから成功事例としてたくさんあげられていますけれども、それは一歩間違えれば、大失敗、自殺するかもしれないような状況の中で活動をしておられるということが非常に多いということはよく承知しております。それが分かっているだけに、イニシアティブをとるということの怖さがあって、ついビビッてしまうということもあるわけです。しかし、そういう人が孤独に、全く連帯なしにそれを行っていけば、きわめてリスクが大きく危険である。こういう状況をこういった場で分かち合い、どのような形でその孤独な戦いに対して理解を示していくのか。あるいは協力の輪というものをつくり上げて行くのか。アートの仕事というのは、みんなが簡単に理解して、ぱっと仲良く手を繋いでというわけには行かない問題が非常に多いわけです。ですから、こういう機会というものを大事にしていく必要があるのではないかなと思います。

フォーラム3というのは、アートNPOを活性化していくためにという形で、地域メセナの役割という議論ですが、地域メセナがそういう意味においてのクッション、緩衝材、あるいはいろんな人たちをくっつけていく繋ぎ役として機能していく、こういったことがこれからの課題ではないかということをまとめにさせて頂いてして、このフォーラムを終わりたいと思います。

若林さん、そして分科会の発表をしていただいたテーマ1から5のモデレーターの皆様、ありがとうございました。

以上

一部あるいは全部について、許諾を得ずに、無断で複写、複製、改訂等することを禁じます。